国史跡　山王囲遺跡

発掘調査報告書Ⅰ

1996

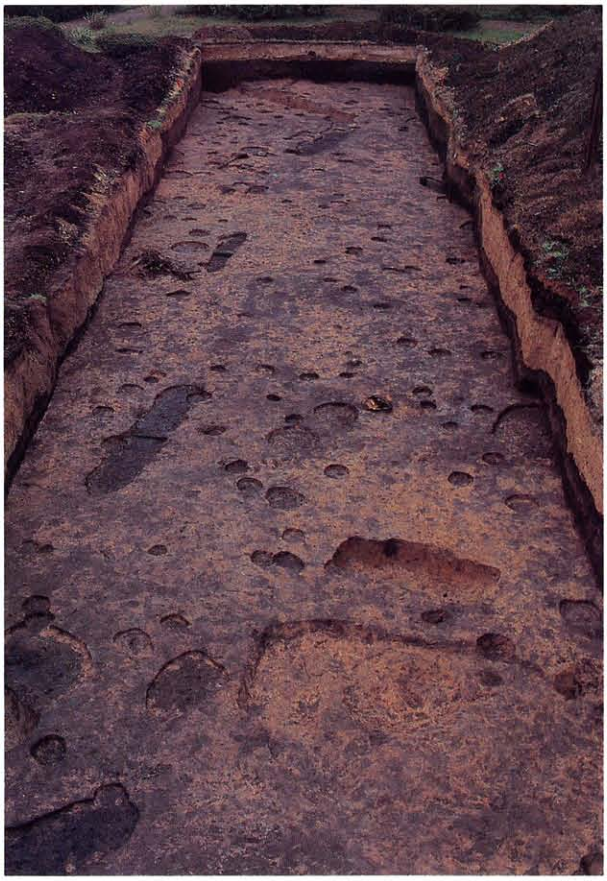
一迫町教育委員会

国史跡　山王囲遺跡

発掘調査報告書Ⅰ

1　山王囲遺跡航空写真
Aerial photograph of the Sanno-gakoi site

2　第2、3号竪穴住居跡（北から）
Pit dwelling 2 and 3



3　第5、6、7号竪穴住居跡（西から）
Pit dwelling 5, 6 and 7

1　第 1 号配石遺構
Stony feature 1

2　第 2 号土器埋設土壙
Pit 2 with buried pottery

序

山王囲遺跡は古くよりその存在が知られており、縄文時代から弥生時代にかけての集落遺跡として、発掘調査が行われてきました。とくに、一迫町立一迫小学校の体育館建設にともなう昭和39年と40年の調査において、縄文時代の遺物を大量に包含する良好な泥炭層が発見され、重要な遺跡であることが明らかにされました。その成果にもとづいて昭和46年に国の史跡に指定されております。

町では指定以来、史跡の環境整備、資料館としての山王考古館における出土品の展示など史跡の保存と活用に努めてきましたが、一迫小学校が平成２年に移転することが決まり、その跡地の整備が課題となりました。このため、平成５年度から６年度の２ヶ年で史跡山王囲遺跡保存活用基本計画を策定いたしました。この度の調査はこの整備計画に基づき、継続調査の第一次調査として実施されたものです。

山王囲遺跡は、その遺物の豊富さから基幹的集落遺跡として周囲の遺跡との関連が論じられてきましたが、当時の土地利用のあり方が不明のままでした。この度の発掘調査によって、住居跡をはじめとする数々の遺構が発見され、遺跡の姿が明らかになりつつあります。本町ではこれらの調査成果をふまえ、山王囲遺跡をより多くの方々に理解していただけるよう整備していく予定であり、平成８年度には基本計画にそって仮称「縄文マインド研究所」の基本設計に入り、平成９年から10年に建物を建設することとなっております。

最後になりましたが、本発掘調査のみならず本書の刊行にあたりましてもご指導、ご協力を賜りました東北大学教授 須藤隆先生をはじめとする諸先生方、宮城県教育庁文化財保護課、並びに関係機関の方々に深く感謝申し上げます。

平成８年３月

宮城県一迫町教育委員会

教育長　遠藤昭吉

例　　言

1　本書は宮城県栗原郡一迫町真坂字山王に所在する国史跡山王囲遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は国庫補助事業として一迫町教育委員会が調査主体となり、史跡整備の目的で平成７年７月17日から10月11日にかけて面積約1550㎡にわたって行った。

3　以下に調査組織を掲げる。

調査担当　一迫町教育委員会
調査指導　須藤　隆（東北大学文学部教授）
岡村道雄（文化庁文化財保護部記念物課主任文化財調査官）
加藤道男（宮城県教育庁文化財保護課調査第一係係長）
調査協力機関　東北大学文学部考古学研究室
宮城県教育庁文化財保護課
調　査　員　大場亜弥（一迫町教育委員会総務課技師）
調査参加者　阿子島香（東北大学文学部助教授）
古川一明、山田晃弘（宮城県教育庁文化財保護課技術主査）
天野順陽、三好秀樹（宮城県教育庁文化財保護課技師）
富岡直人（東北大学文学部助手）
関根達人、菊池佳子（東北大学埋蔵文化財調査研究センター調査研究員）
菅原哲文（東北大学大学院博士課程）、日下和寿、氷見淳哉、伊藤典子、池谷勝典、西村　力、荻原研一、石田　真（東北大学大学院修士課程）、王 小慶（東北大学大学院研究生）、藤原弘明、高橋　哲、玉橋さやか（東北大学文学部研究生）、酒井　淳、関　健吾、小山有希、佐藤道子、山澤安利、児島　学、坂田由紀子、西井　亨、鈴木　綾、北村浩貴、鹿又喜隆、五十嵐満、川原　啓、熊谷宏靖、澤田純明、若山智也、杉山陽亮、池谷考史、千葉直樹、三上紅美子、丹羽美智子、京野恵子、廣田英一郎、藤田直行、川口貴史（東北大学文学部学生）
佐藤幸一、佐藤正利、津田小砂、曽根茂子、曽根あいし、松田　司、曽根義秋、笹川義春、久我とも子、久我敏夫、門伝保輝、佐藤運之亟、後藤祥子、菅原みさ子、松田せつ子、津田登喜子、金田せつ子（一迫町）

4　編集は須藤　隆の指導のもとに、大場亜弥、富岡直人、菅原哲文、氷見淳哉がこれを進め一迫町教育委員会、東北大学文学部考古学研究室の構成員が整理・分析を行った。以下に資料整理・分析作業の体制を掲げる。

整理参加者　伊藤典子、池谷勝典、西村　力、荻原研一、石田　真、王　小慶、藤原弘明、高橋　哲、玉橋さやか、関　健吾、小山有希、佐藤道子、廣嶋秀俊、坂田由紀子、西井　亨、鈴木　綾、北村浩貴、鹿又喜隆、五十嵐満、川原　啓、熊谷宏靖、澤田純明、若山智也、杉山陽亮、三上紅美子、藤田直行、池谷考史、千葉直樹、川口貴史、丹羽美智子、粟野昌之、京野恵子、廣田英一郎（東北大学文学部）、斉藤幸子、佐藤勝子、菅原みさ子、佐藤たけ子、阿部辰江、小山幸江、佐藤幸一、佐藤運之亟（一迫町）

5　本報告書の執筆分担は、文章末（ ）内に付記した。

6　調査報告書をまとめるにあたって、次の方々の御協力と御助言を頂いた。
興野義一氏（日本考古学協会会員）、藤沼邦彦氏、阿部博志氏、須田良平氏（東北歴史資料館）、千葉景一氏、真山　悟氏、斉藤吉弘氏、佐藤則之氏、東理浩明氏（宮城県教育庁文化財保護課）、太田昭夫氏、荒井　格氏（仙台市教育委員会文化課）

7　遺跡探査については、安達三郎氏（東北大学名誉教授・東北工業大学教授）、宇野　亨氏（東京農工大学助教授）〔文部省科学研究費補助金 重点領域研究 遺跡探査「遺跡探査パルスレーダ用アンテナの設計と埋蔵物のイメージング法に関する研究」班〕、奥島基良氏（東京工業大学名誉教授・桐蔭学園横浜大学教授）、杉本恒美氏（桐蔭学園横浜大学講師）、本岡誠一氏（千葉工業大学教授）〔同「地中遺構及び文化財の超音波探査法の開発研究」班〕に依頼した。

8　地質調査については阿子島功氏（山形大学教育学部助教授）に依頼した。

9　石材の鑑定は蟹澤聰史氏（東北大学教授）に依頼した。

10　明治大学考古学博物館（館長 戸沢充則明治大学教授）より、1962年時の遺跡測量図面を提供して頂いた。

11　自然科学分析はパリノ・サーヴェイに依頼し、詳細な報告を受け取った。本報告書に要約した内容を掲載した。

12　地図は建設省国土地理院発行の1／50,000「岩ヶ崎」を複製、使用した。

13　土色については『新版土色帖』（小山正忠・竹原秀雄：1994）を参照した。

14　遺物図面、写真図版中の（ ）内の番号は属性表中の登録番号に対応する。

目　　次

第1章　調査の目的 …… 1

第2章　遺跡の概要 …… 2

第1節　自然景観 …… 2
第2節　歴史的環境 …… 2

第3章　調査の概要 …… 6

第1節　調査の経緯 …… 6
第2節　調査の方法 …… 7
第3節　調査の経過 …… 7

第4章　発掘調査の成果 …… 9

第1節　層　　序 …… 9
第2節　遺　　構 …… 11
第3節　遺　　物 …… 21

第5章　結　　語 …… 28

引用文献 …… 30

附　章　山王囲遺跡における古環境変遷 …… 31

はじめに …… 31
第1節　分析試料 …… 31
第2節　分析方法 …… 32
第3節　縄文時代晩期から弥生時代前期の古環境変遷 …… 32
第4節　稲作の消長について …… 35
第5節　第3号竪穴住居跡の^{14}C年代測定結果について …… 35
第6節　総　　括 …… 37

付表１　山王囲遺跡出土土器観察表 …… 38
付表２　山王囲遺跡出土土師器観察表 …… 40
付表３　山王囲遺跡出土陶器観察表 …… 41
付表４　山王囲遺跡出土石器観察表 …… 41

図　　版

第１図版　山王囲遺跡発掘区配置図
第２図版　山王囲遺跡遺構配置図（Ａ～Ｄ、Ｋ区）
第３図版　山王囲遺跡遺構配置図（Ｅ～Ｊ区）
第４図版　山王囲遺跡出土土器拓影（Ｃ区、Ｄ区）
第５図版　山王囲遺跡出土土器拓影（Ｄ～Ｇ区）
第６図版　山王囲遺跡出土土器拓影（Ｃ、Ｅ～Ｇ区、Ｋ区）
第７図版　山王囲遺跡出土土器拓影（Ｅ～Ｋ区）
第８図版　山王囲遺跡出土土器拓影（Ｋ区）
第９図版　山王囲遺跡出土土器拓影（Ｋ区）
第10図版　山王囲遺跡出土土器拓影（Ｋ区）
第11図版　山王囲遺跡出土土器実測図（Ｄ、Ｅ、Ｇ、Ｋ区）
第12図版　山王囲遺跡出土土器実測図（Ａ、Ｃ、Ｇ、Ｋ区）
第13図版　山王囲遺跡出土石器
第14図版　山王囲遺跡出土石器
第15図版　山王囲遺跡出土石器
第16図版　山王囲遺跡出土石器
第17図版　山王囲遺跡出土石器

写　真　図　版

ＰＬ.１　山王囲遺跡航空写真及び第２、３号竪穴住居跡
ＰＬ.２　Ｇ区全景及び第１号配石遺構
ＰＬ.３　Ｉ区全景及び畦畔状遺構
ＰＬ.４　Ｋ区全景及び第５号竪穴住居跡
ＰＬ.５　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ.６　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ.７　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ.８　山王囲遺跡出土土器、土製品
ＰＬ.９　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ.10　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ.11　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ.12　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ.13　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ.14　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ.15　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ.16　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ.17　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ.18　山王囲遺跡出土石器
ＰＬ.19　山王囲遺跡出土石器

第1章　調査の目的

1964年秋、東北大学の伊東信雄教授の研究室に一迫町診療所の興野義一医師から、一迫小学校校庭の山王囲遺跡において建物の建設工事に伴って多量の縄文時代の遺物が出土したことが報ぜられた。伊東教授は、その遺物が出土した包含層が泥炭層であり、晩期の豊富な資料とともに弥生時代初期の土器が多数出土したことなどから、遺跡の重要性を知り、考古学研究室による調査が必要であると判断された。そして、その年の12月に、急遽、短期間の予備調査を実施し、遺跡の状況を確認した。その予備調査の結果にもとづいて、発掘調査計画が立てられ、翌1965年４月から６月までの２カ月におよぶ長期間の発掘調査が実施された。

この調査によって、厚さ１ｍを超す泥炭層から縄文時代晩期後半の亀ヶ岡式土器が層位的に出土し、縄文時代終末の物質文化の変遷が詳細に捉えられることとなった。また、最上層では晩期終末の包含層の上に弥生時代初頭の遺構と包含層がひろがっており、土器、石器、土器棺など貴重な資料が多数出土した。東北地方の亀ヶ岡文化から弥生時代農耕文化への変遷を捉らえることのできる極めて重要な遺跡であることが明らかになった。

地下水位の高い泥炭層では、遺物の保存状態がきわめて良好であった。とくに、有機質の資料が豊富に出土し、トチ、クリ、クルミ、ドングリ、ニワトコの種子、葉、木、動物の骨、貝など食料の残滓、紐類、木製品、漆塗り櫛、籃胎漆器、編布、ヤスなどの骨角器、漆塗り貝製品、土偶、耳飾り、土製玉類など縄文人の豊かな生活内容を示唆する多種多様な遺物が豊富に出土した。

とくに編布は、きわめて繊細な編物技術が認められ、縄文人の衣生活に対する認識を大きく変えた。また漆器類、とくに籃胎漆器の製作技術は、縄文人の工芸技術の並々ならない洗練度、伝統の深さを明らかにした。また、多量の亀ヶ岡式土器は土器作りの技術の高さを明確にした。このような調査内容から、山王囲遺跡は、国の重要遺跡として1971年に史跡指定が行われた。その後、資料館の建設、史跡公園としての整備が進められた。さらに、史跡北側低湿地には湿性植物園が設けられ、地域の人々のための憩の場として活用がはかられた。さらに1989年には、出土遺物の資料館が改装され、展示施設の整備と展示品の充実がはかられた。

1994年になって、一迫小学校が著しく老朽化したため移転新築計画が浮上した。遺跡の主要部分と重なる小学校の移転に伴って、遺跡の整備すべき範囲が一気に拡大することとなった。そのため、一迫町教育委員会は、遺跡の範囲、集落遺跡の中枢部、泥炭層の範囲と保存状況など、遺跡の全体的見直しが必要と認識し、今後の整備計画、さらにその活用計画の策定をすすめ、1995年にその策定案を完成した。

その結果、策定案にもとづいて、①縄文時代の集落の主要部分の構造を明らかにする。②泥炭層の範囲を明確にし、地下水の変化などによる影響も含め、その保存状況を把握する。③泥炭層から、時期の明らかな植物遺存体（種子類、草、樹木の葉や茎、樹幹、花粉など）を確保、分析し、縄文時代晩期の自然景観を復元する基礎資料をうる、といった目的を達成するため、５年次にわたる史跡整備のための発掘調査を実施することと決定した。

一迫町教育委員会は、この調査を効率的に進めるため、東北大学文学部考古学研究室と宮城県教育庁文化財保護課の協力と指導のもとに発掘計画を協議、立案し、その計画にもとづいて、1995年夏、第１次発掘調査を実施した。その結果、予想以上に大きな成果をうることができた。今回の調査報告書は、一迫町教育委員会と東北大学考古学研究室が全面的に協力してすすめたものである。　（須藤）

第2章　遺跡の概要

第1節　自然景観

山王囲遺跡は、栗駒山（1628m）と荒雄岳（984m）の山麓に源を発する一迫川によって形成された南北3km、東西15km程の沖積地のほぼ中央の自然堤防上に位置する。この自然堤防は一迫川とその支流の長崎川にはさまれ、標高37～39mで、東西240m、南北180m程のひろがりをもつ。長崎川河床面からの比高は3m程度で、現在の水田面より1～2mの微高地である。一迫川流域の沖積地を囲む丘陵地には、ナラ、クヌギ、アカマツなどの樹林がひろがり、キジ、ヤマドリ、ノウサギ、タヌキ、ムササビなどが棲息している。一迫川や長崎川などにはウグイ、コイ、フナが棲息し、サケの遡上もみられ、オオハクチョウ、ガンカモ科などの渡鳥が飛来する。

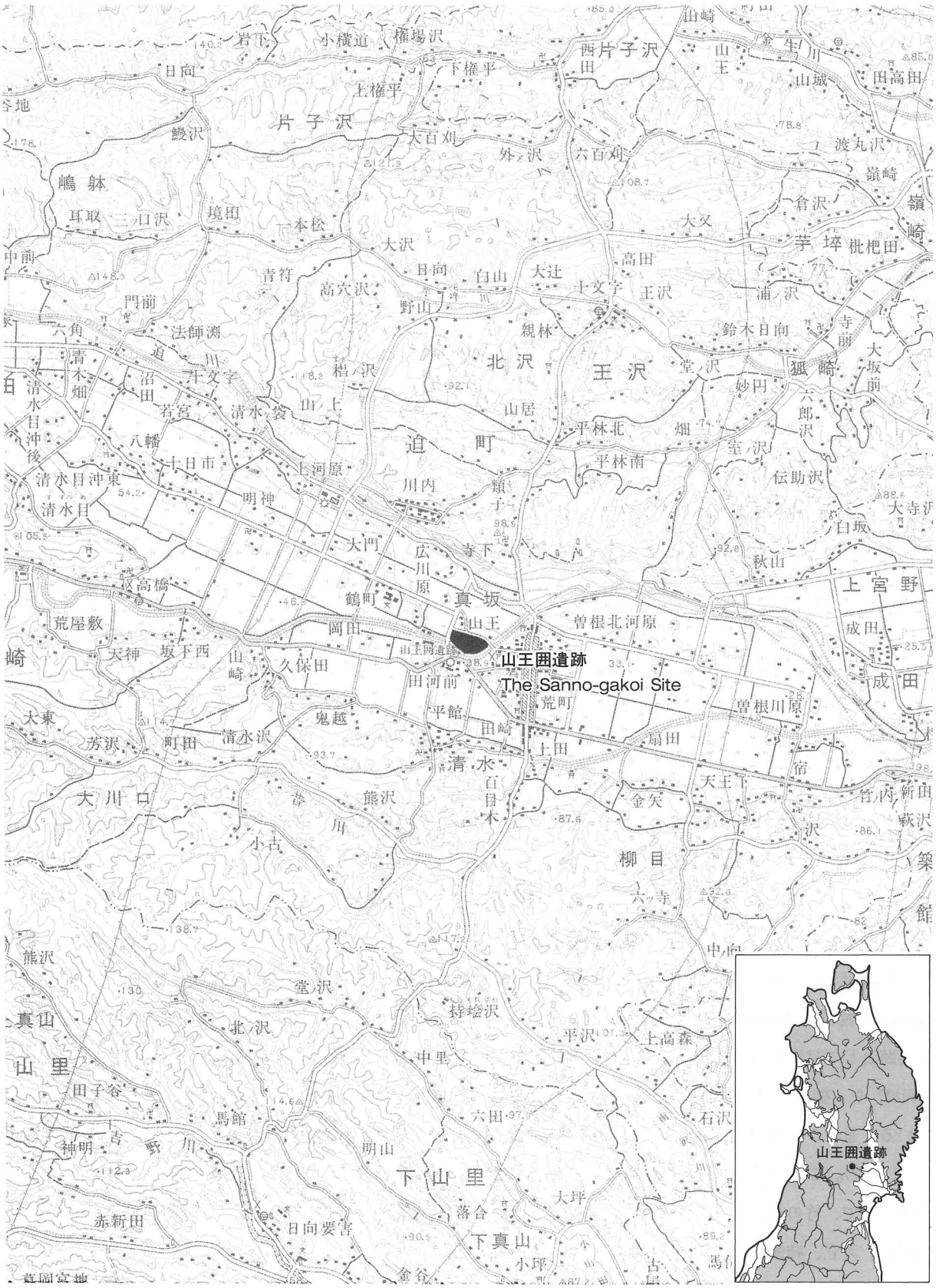
山王囲遺跡周囲の丘陵地は、鮮新世後期から更新世前期に平坦面であったが（宮城県 1991）、更新世中期以降浸食が進み、多くの谷が開析された。約1万年前に氷河時代が終わりをつげると、海水面が急速に上昇し、遺跡周囲においても沖積化が進んだ。現在、遺跡付近での沖積層は厚さ3～7mである（宮城県他 1992）。縄文時代の前期前葉の大木1式期には、山王囲遺跡から18km東方の迫町八ノ森貝塚のようにヤマトシジミなどの汽水性貝類を主体とする貝塚が出現し、仙北湖沼域の奥部でピークに達していた海進は終りをつげ、海岸線の後退が進んだことがうかがえる。中期後葉に海退はさらに進み、更新世に形成された谷筋も河川の運ぶ土砂で埋没していった。海退と沖積化に伴って内湾が汽水化、さらに淡水化し、迫川流域には多数の沼沢、低湿地が形成され、築館町嘉倉貝塚など多くの貝塚が残されることとなった。山王囲遺跡の東方10km程の一迫川と迫川との合流点に位置する嘉倉貝塚は、後・晩期の淡水性貝塚であり、仙北湖沼域の最奥部が淡水化していたことがうかがわれる。

山王囲遺跡の所在する自然堤防では、縄文時代前期大木3式土器が確認されており、前期中葉には生活の場として利用されていたと考えられる。晩期には自然堤防の北に沼沢、低湿地がひろがり、その後埋没するにつれて泥炭層や低湿地堆積層が形成されていった。そして弥生時代にかけて急速に埋没していったと推定される。

第2節　歴史的環境

一迫川流域では旧石器時代から縄文、弥生、古墳時代にかけて丘陵地や自然堤防上に数多くの遺跡が残されている。山王囲遺跡の南にのびる築館丘陵では、60万年前に遡る築館町上高森遺跡（芹沢 1996）をはじめとして、岩出山町座散乱木遺跡や古川市馬場壇A遺跡など、旧石器時代前期から晩期にかけての遺跡が数多く分布している。花山村原井田、大穴山、天沢、小田裏A・B遺跡など一迫川上流域の遺跡から、石刃や細石刃核、有舌尖頭器などが出土している（花山村史編纂委員会 1978）。一迫町佐野原遺跡では、大型の局部磨製石斧が出土し（興野 1976b）、柳ノ目古屋敷遺跡（中山遺跡）でもローム層中から剥片が出土している。

縄文時代になると、丘陵地を中心として多数の遺跡が出現する。一迫川と迫川流域では、一迫町赤坂遺跡から早期中葉の日計式土器が発見されており、この地域における最古の縄文遺跡といえる。高清水町大寺遺跡では、多量の貝殻文土器が採集され、早期後半の大寺式の標式遺跡となっている。前期には、大栗A遺跡をはじめ丘陵



第1図　山王囲遺跡位置図〔Scale 1 : 50,000〕
Location of the Sanno-gakoi site

国土地理院発行「岩ヶ崎」

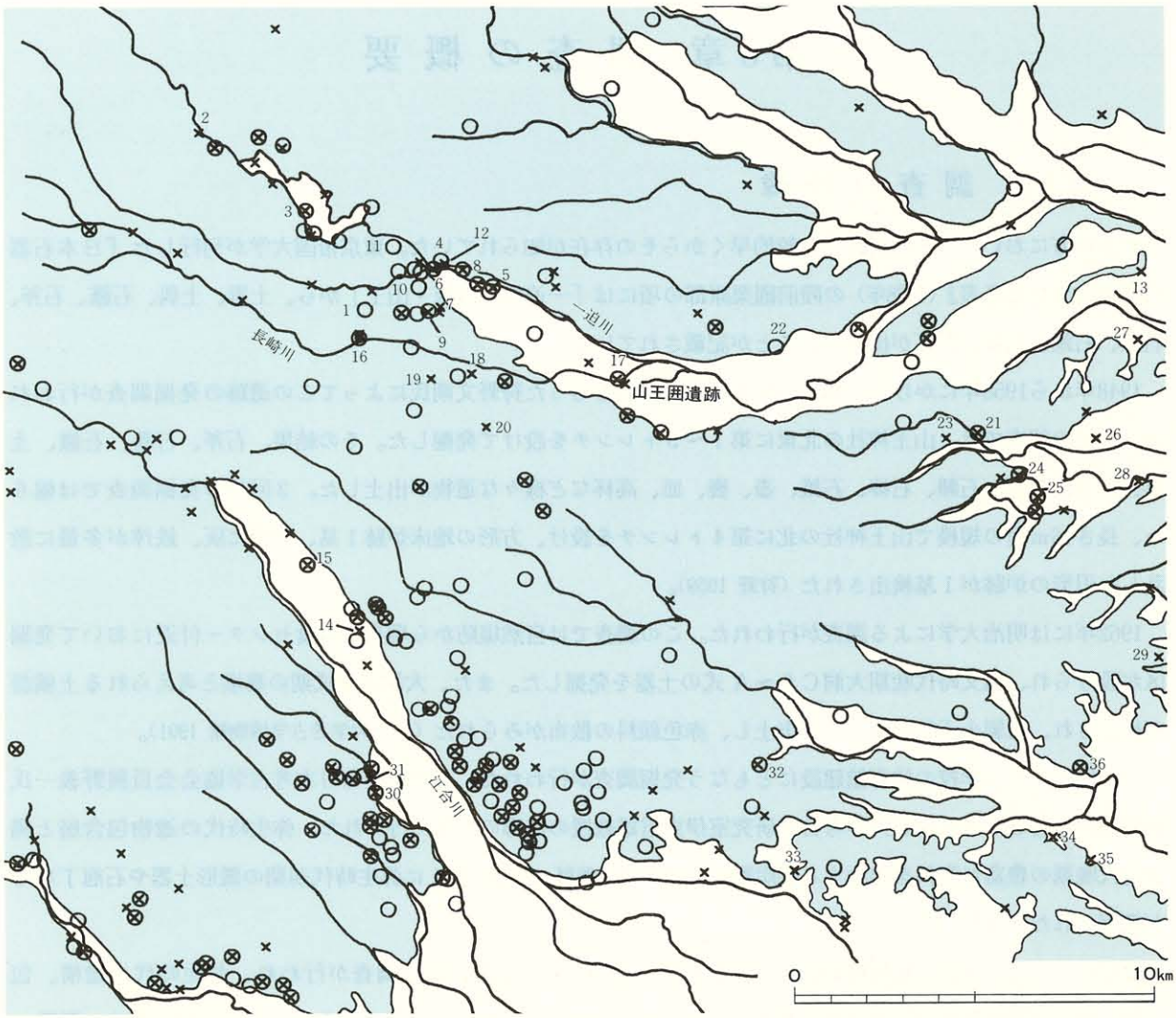
上で遺跡が増加する。また、迫川流域では迫町糠塚貝塚、八ノ森貝塚など前・中期の貝塚が多数みられる。中・後期の遺跡では丘陵平坦面に立地する一迫町小古遺跡で大木10式期の竪穴住居跡が確認されている。一迫町宝領遺跡では後期前葉の遺物包含層から土器が多量に出土し（佐藤 1984)、比較的規模の大きい集落が営まれたと推定される。晩期には若柳町館貝塚、敷味貝塚、築館町横須賀貝塚、嘉倉貝塚、大型遮光器土偶が出土した田尻町恵比須田遺跡、国指定史跡中沢目貝塚、泥炭層から有機質遺物が出土する田尻町北小松遺跡など数多くの貝塚と大規模遺跡が群在する。一迫町巻堀遺跡では厚さ1.5mにおよぶ晩期Ⅲ～Ⅵ期の遺物包含層が検出され（宮城県教育委員会 1977)、山王囲遺跡でも厚さ１mにおよぶ晩期Ⅳ期の遺物包含層と遺構群が検出されている。このように晩期には大規模な集落が多数形成されていたことがうかがえる。

弥生時代には、一迫川流域の青木畑遺跡、山王囲遺跡、伊豆沼・内沼にのぞむ横須賀貝塚、嘉倉貝塚、浄土遺跡、青島貝塚など前期の山王Ⅲ層式期から中期中葉の桝形囲式期にかけての遺物を出土する遺跡が分布する。その大部分が山王Ⅲ層式期の遺跡であり、これらの弥生時代前期の遺跡の多くは晩期から継続する。

山王囲遺跡から一迫川を遡った青木畑遺跡では多量に土器、石器、土製品が出土し、弥生Ⅱa期の青木畑式が設定されている（加藤 1982)。また、山王囲遺跡から出土した土器群にもとづいて弥生Ⅱb期の山王Ⅲ層式が設定されている。この山王囲遺跡の弥生Ⅱb期の層からは石庖丁が出土しており、宮城県北部地域において前期後半から水稲農耕が行われていた可能性が指摘されている（須藤 1983)。中期中葉の桝形囲式期の遺物は一迫町上戸遺跡、山ノ神遺跡、山王囲遺跡、築館町横須賀貝塚、嘉倉貝塚、岩出山町境ノ目Ａ遺跡（太田他 1982）などで出土している。また、後期になると丘陵上で小規模な集落遺跡が多数確認されており、上ノ原Ａ遺跡や古川市宮沢遺跡、高清水町東館遺跡などから天王山式土器が出土している。ことに上ノ原Ａ遺跡ではこの時期の隅丸方形の竪穴住居跡が１棟検出され、中央に石組炉をもつ焼失住居であることが明らかにされている（佐藤他 1978)。このような丘陵地における多数の天王山式期の遺跡の出現は、弥生時代後期になってこの地域で農耕活動が盛んに行われたことを示唆している（須藤 1986)。

古墳時代前期になると、鳴瀬川、江合川流域では小牛田町京銭塚古墳、鳴子町石の梅古墳などの前方後方墳や、全長100mにおよぶ大規模な前方後円墳である古川市青塚古墳が出現する。東館遺跡や志波姫町鶴の丸遺跡では塩釜式期の方形周溝墓が検出され、志波姫町宇南遺跡、古川市留沼遺跡では同時期の竪穴住居跡が調査されている。このような遺跡のあり方から、前期古墳文化の北限であるこの地域において農耕集落の発達と、有力な首長層の台頭がうかがえる。また、一迫町清水田遺跡、高清水町大寺遺跡では北海道系土器が出土しており（興野 1976 a、b)、北海道続縄文文化圏との交流が行われていたことが推定される。中期前半に、この地域で古墳は減少する。集落跡としては東館遺跡で南小泉式期の竪穴住居跡が検出されている。中期後半には、色麻町念南寺古墳（前方後円墳）や、御山古墳（円墳）が造営される。後期では、志波姫町山ノ上遺跡で住社式期の竪穴住居跡が検出されている。また、鳴瀬川上流域に300基を超す色麻町色麻古墳群が形成され、関東地方からの集団移住が推定される（古川 1987)。この背景として畿内政権の影響が強まったことが考えられる。さらに古墳時代の終末期には、一迫川中流域で、竹の花、山王、西沢横穴古墳群などが形成され、迫川上流域の金成丘陵地には内陸部北限の白地、山根前、大立、姉歯などの横穴古墳群が分布している。

以上のように一迫川流域、迫川水系付近は、東北地方における南北の特色を異にする地域文化の境界領域にあったと考えられ、東北の先史・古代史を理解する上できわめて重要である。　　（富岡、大場、西村、氷見）



凡例　×…縄文晩期　○…弥生

No.	遺跡名	縄文					弥生			No.	遺跡名	縄文					弥生		
		早	前	中	後	晩	前	中	後			早	前	中	後	晩	前	中	後
1	大穴山遺跡	○	○	○					○	19	猿田原遺跡		○	○		○			
2	越戸遺跡				○	○				20	向芳沢遺跡		○			○			
3	天沢遺跡			○	○	○	○		○	21	嘉倉貝塚		○	○	○	○			
4	宝領A遺跡		○		○		○		○	22	本木遺跡				○			○	
5	青木畑遺跡			○	○	○	○		○	23	照越台遺跡			○	○	○			
6	巻堀遺跡				○	○	○			24	横須賀貝塚					○	○	○	○
7	清水田遺跡	○	○	○	○	○				25	浄土遺跡			○		○	○		
8	上戸遺跡				○	○	○	○		26	敷味貝塚				○	○			
9	上ノ原A遺跡					○	○		○	27	大畑貝塚			○	○	○			
10	山ノ神遺跡						○	○		28	唐木崎貝塚				○	○			
11	上滝野B遺跡								○	29	平貝貝塚					○			
12	竹ノ花遺跡			○	○	○				30	岩の上遺跡	○	○	○		○	○	○	○
13	柴の脇遺跡					○				31	天神山遺跡		○			○			
14	天王寺遺跡				○	○				32	萩田遺跡					○	○		
15	根岸遺跡					○				33	北小松岩田西遺跡					○			
16	大栗A遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	34	恵比須田遺跡	○	○	○	○	○			
17	山王囲遺跡					○	○	○	○	35	中沢目貝塚				○	○			
18	日向遺跡			○		○				36	長者原貝塚		○	○	○	○			

第2図　一迫町周辺遺跡分布図

Distribution of the Final Jomon and Yayoi sites around the Sanno-gakoi site

第3章　調査の概要

第1節　調査の経緯

東北地方において山王囲遺跡は比較的早くからその存在が知られていた。東京帝国大学が刊行した『日本石器時代遺物発見地名表』(1928年) の陸前國栗原郡の項には「一迫村・眞坂・山王」から、土器、土偶、石鏃、石斧、石皿、石錐、石錘、凹石が出土したことが記載されている。

1948年から1958年にかけて、郷土の先史に強い関心をもった狩野文朔氏によってこの遺跡の発掘調査が行われた。最初の調査では、山王神社の北東に第1～3トレンチを設けて発掘した。その結果、石斧、石匙、石鏃、土偶、石皿、凹石、石錘、石棒、石錐、壺、甕、皿、高杯など様々な遺物が出土した。2回目の発掘調査では幅6m、長さ16m程の規模で山王神社の北に第4トレンチを設け、方形の地床炉跡1基、周囲に灰、鉄滓が多量に散乱した円形の炉跡が1基検出された（狩野 1959)。

1962年には明治大学による調査が行われた。この調査では自然堤防から現在の給食センター付近において発掘区が設けられ、縄文時代晩期大洞C2～A′式の土器を発掘した。また、大洞C2式期の墓壙と考えられる土壙群が検出され、石製小玉約60個が一括出土し、赤色顔料の散布がみられた（明治大学考古学博物館 1991)。

1964年、一迫小学校の体育館建設にともなう発掘調査が行われた。この調査は日本考古学協会会員興野義一氏を発掘担当者として、東北大学考古学研究室伊東信雄教授の指導のもとに行われた。弥生時代の遺物包含層と縄文時代晩期の豊富な資料を包含する泥炭層が確認され（興野 1965)、とくに弥生時代前期の瓢形土器や石庖丁などが発掘された（須藤 1983、84)。

翌1965年には、伊東信雄教授を中心に東北大学考古学研究室による第2次調査が行われ、弥生時代の遺構、包含層、縄文時代晩期後半の泥炭層が調査された。出土した土器は登録されているもので391点におよび、石器、土製玉類、耳飾、ヒスイ製・石製玉類、腕輪、櫛、籃胎漆器、骨角器、岩版、土版、土偶、猪牙製垂飾、編布、木製品、植物遺存体、動物遺存体など多様な遺物の出土がみられた（伊東他 1985)。

1971年に山王囲遺跡は国史跡の指定を受け、1976年には東北大学考古学研究室によって保存管理計画策定のための調査が行われた。ボーリング調査の結果、泥炭層、遺物包含層の分布が確認された（一迫町教育委員会 1976)。

1976年以降、10年にわたる史跡整備がなされ、山王囲遺跡は「山王史跡公園」として形を整えた。1990年、指定地内にあった一迫小学校の移転が決定され、それを契機としてあらためて遺跡全体の整備のみなおしが進められることとなった。一迫町は1993、1994年度に国指定史跡山王囲遺跡保存活用基本計画策定委員会を設置し、史跡整備計画を検討した。委員会は、「地形復元レベルと縄文晩期の遺構面の確認」、「自然・社会景観の復元的調査・研究」、「生業形態に関する総合的調査・研究」、「縄文・弥生時代の技術復原とその応用」、「調査・研究成果の公開等」を目的とする発掘調査の実施を提言した。今回の発掘調査はこの史跡整備の基本計画にもとづく初年度の調査である。

（大場、菅原）

第2節　調査の方法

縄文時代の集落構造を捉え、それらを構成する遺構群の性格と配置、時期などを明らかにするために、自然堤防の東半部を中心として発掘区を設定し、遺構、包含層の確認・精査を目的とする調査を行った。

発掘区は遺跡の南西に原点を設定し、南北を基軸とした一辺３ｍのグリッドを基準とした。発掘区設定のための基準点は三角点「真坂」（−140227.500, 10294.440, 38.860）と1987年に史跡整備の際に設けられた第Ｘ座標系の既知点であるＡ点（−139985.753, 10386.946）、Ｂ点（−140026.921, 10492.012）を利用した。さらに任意に設定した点はＤ点（−140081.592, 10365.3185, 38.992）、Ｆ点（−140072.76, 10387.945, 38.600）、Ｇ点（−140107.000, 10378.000, 39.474）、Ｉ点（−140084.000, 10378.000, 38.997）、Ｊ点（−140100.979, 10390.703, 39.654）、Ｋ点（−140107.000, 10339.000, 39.254）、Ｌ点（−140138.000, 10335.00, 39.081）、Ｍ点（−140092.002, 10419.983, 39.208）である。軸は国土座標を基準とし、東西軸には北に向かってＡＡ、ＡＢ、ＡＣ……、南北軸には東に向かって１、２、３……と名称をあたえ、グリッド名は南側の東西軸名および西側の南北軸名をその区名とした。この基準軸にそって発掘区を設けた。

発掘区の設定は従来の調査成果と自然堤防の地形を考慮して行った。南西にのびる自然堤防の東端にＡ～Ｄ区を設定し、遺構の分布を確認することとした。自然堤防中央部においては、1958年の調査で炉跡が発見されており、その周辺の遺構の分布を確認するため、Ｋ、Ｌ区を設定した。1965年の発掘調査では大規模な泥炭層が検出されており、その際出土した大量の遺物は発掘区の東側の自然堤防上から廃棄されたと推定される。この推定にもとづき、自然堤防から低湿地にかけて、地形と遺構の分布を確認するためにＥ、Ｆ区を設定した。また、1965年の発掘調査区の南側にＧ～Ｊ区を設け、低湿地のひろがりを確認することとした。

調査にあたって、層位的発掘を行い、各調査区における堆積層相互の対応関係を明らかにするよう努めた。遺構については分布状況を把握し、竪穴住居跡、ピットなど主要な遺構を精査した。主要な遺構の土壌はすべて採取し、フルイによる微細遺物の検出を行った。遺構、遺物の検出状況については詳細に記録し、特に第２、３号竪穴住居跡、第１号配石遺構出土の遺物については出土位置をすべて記録した。これらの測量と記録を効率的に行うため東北大学考古学研究室所有のソキア製トータルステーション（光波測量器）およびコンピューターシステム社製三次元測量システム・Siteを利用した。

重複する遺構については、上層遺構を精査し、それらの記録をとった後、下層の遺構を調査すべきか否かを検討した。また、埋没している遺構を把握する試みとして、安達三郎氏（東北大学名誉教授・東北工業大学教授）、奥島基良氏（東京工業大学名誉教授・桐蔭学園横浜大学教授）に依頼し、レーダー、音波での遺構探査を実施した。

（大場、富岡）

第3節　調査の経過

発掘区の設定は７月18日にＧ・Ｊ・Ｉ区、19日にＡ～Ｃ区、28日にＤ・Ｈ区、９月６日にＫ・Ｌ区を行った。表土除去は７月18日にＧ区、19日にＡ・Ｉ・Ｊ区、25日にＥ・Ｆ区、26日にＣ区、27日にＢ区、28日にＤ・Ｈ区、９月６日にＫ区、７日にＬ区で行った。

７月18日に、Ｇ区５層上面で溝を確認した。発掘区北端に60cm幅でサブトレンチを設定し、下層に白色粘土層

（7層）や泥炭質の有機成分を含む礫層（11層）のひろがりを確認した。7月20日に、G区北端・西端、I・J区北端のサブトレンチで下層の堆積状況を確認した。7月21日にはI区西端で弥生土器を包含する泥炭質粘土層（9層）を検出した。7月24日に、A区で第1号竪穴住居跡、I区北側で畦畔状遺構を確認した。7月25日に、F区6b層の精査を行い、弥生時代中期の土器片を検出した。7月26日にI区を南方向に3m拡張して、畦畔状遺構のひろがりを確認した。また、G区第1～3号溝跡を検出し、27・28日には精査を行い、中世陶器1点、弥生土器、石斧を検出した。7月28日に、D区黒色土層（2層）中に若干の遺物を検出したが、遺構のプランは不明瞭で、3層上面の精査を行った。7月31日に、I区9層で遺構のひろがりを確認するため上層を精査した。さらにF区9・10層の精査を行い、土壙などの遺構を検出した。

8月2日にF区第4号溝跡を検出し、H区では北壁にみられた焼土のひろがりや柱穴を検出し、第4号竪穴住居跡として精査を行った。8月3日にF区10層上面の精査を行った。C区では東西方向にのびる第4号溝跡プランを検出した。

9月7日にK区の調査を開始した。9月8日にE区で、第4号溝跡、多数の土壙や方形の遺構を確認した。一方、阿子島功氏が地形・地質の分析を行った。9月9日にK区包含層を確認し（7・8層上面）、10日から25日に精査を行った。9月12日にC・D区で遺構プランの検出、13日には、精査を行った。ピット9埋土からは土師器が出土した。9月14日にB区北東隅に深掘区を設定し、下部に礫層のひろがりを確認した。また、F区9・10層上面の精査を続行し、C区ピット3の精査を行った。9月18日から20日にF区南側の遺構群とK区7・8層の精査を行った。9月20日にF区北側で第2号竪穴住居跡、E区で多数の遺構の精査を行った。9月21日から22日にC区ピット3・9、E区ピット群の精査を行った。さらに北側で方形の遺構から土師器を検出し、精査を終了した。F区では第2号竪穴住居跡の精査（10月4日まで）を行った。9月25日にG区遺構群の精査を開始し（10月7日まで）、第5号溝跡は部分的に観察トレンチを設定した。また、第1号配石遺構の精査を行った。26日にC区ピット8・9において遺物の記録・取り上げを行った。9月27日にF区第3号竪穴住居跡の壁溝を確認した。9月28日にE区第1号土器埋設土壙の精査を行った。9月29日にD区で土壙群や第1号陥穴などの遺構の精査を行った。

遺構および遺物の諸記録は7月27日より10月6日にかけて随時行った。10月6日には、パリノ・サーヴェイによる自然環境分析試料の採取が行われた。10月7日に午後2時より現地説明会を開催した。10月11日には実測図や土層観察表を作成し、作業を終了した。

安達三郎氏を中心とするレーダー探査は8月4日に基準杭を設定し、8月20日から24日に探査、9月6日に測定結果の検討を行った。探査に際してA～G区に基準線を設定し、測定を行った。奥島基良氏を中心とする音波探査は、9月8日から10日に実施された。

（小山、大場、富岡）

第４章　発掘調査の成果

第１節　層　　序

Ｅ～Ｊ区については、堆積層が最も多く確認されたＧ・Ｉ区を基準として１～11層の基本層序を認定した。Ａ～Ｄ・Ｋ区では、それぞれの発掘区において層名を与え、Ｅ～Ｊ区との対応を検討した。

Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ区基本層序

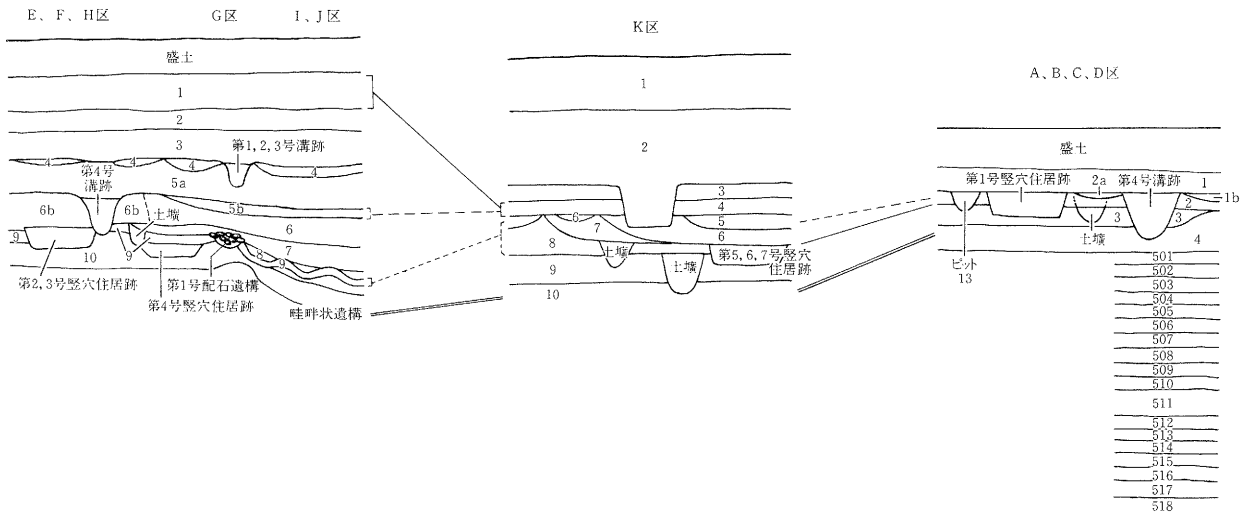
最上層は盛土である。１層は旧耕作土であり、部分的に礫や砂を含んでいる。２層は明褐色シルト質で、３層の酸化した層であり、厚さが２～５㎝で、鉄分を多く含む。３層は明灰黄褐色シルト質土壌が主体であり、Ｊ区では黒褐色のシルト質となる。マンガンを多く含み、白色粒子を少量含む。４層は、10世紀降下の灰白色火山灰（白鳥 1980、町田他 1981）を含み、特に凹地において比較的厚く堆積している。４層の上面で、第１～３号溝跡が確認されている。また、植物珪酸体分析の結果、イネ科のプラントオパールが多く検出されている。５a層は灰褐色のシルト質であり、マンガンを含む。一部に砂のラミナが形成されている水成堆積層である。また縦方向に微細なクラックがみられ、灰白色火山灰粒が落ち込んでいる。

Ｉ区の西側では、５a層の下に、より褐色が強く、砂質の５b層がひろがる。６層は灰黄色の粘土質であり、沼鉄を多く含む。Ｅ・Ｆ区の６b層はＧ・Ｈ・Ｉ区の６層にあたり、より黄色みが強い砂質シルトである。Ｆ区の６b層上面では、弥生時代中・後期の土器片（第６図版23）と土師器の破片が出土し、古墳時代以降の生活面であったと考えられる。植物珪酸体分析の結果では、５、６層でもイネ科のプラントオパールがわずかながら検出されている。７層は明灰黄褐色の粘土質であり、鉄分を含み、Ｇ・Ｉ区では白色を帯び、Ｈ～Ｊ区に分布する。またＩ区７b層は、赤褐色の粘土質で鉄分を多量に含む。５～７層はラミナの形成と沈澱物のグラデーションが観察され、洪水層と考えられる。畦畔状遺構など、特にＧ～Ｊ区の遺構はこの層によって覆われている。８層は、９層の漸移層で、Ｇ・Ｉ区のみに認められる。

９層は黒色で、Ｇ～Ｊ区では粘土質で、東側の区では砂質になる。炭化物を多量に含み、Ｉ区西側で層が厚くなり、畦畔状遺構の基盤となる。Ｉ区における珪藻分析では、第１地点の層から陸生珪藻の非完形殻が多く検出され、縄文時代から弥生時代にかけての生活面であった可能性が高いと考えられている。また、イネ科のプラントオパールがわずかながら検出されている（第６図第３地点）。Ｇ・Ｉ区では鉄分がとくに多く、土中の鉄分が植物体のまわりに付着してできた「高師小僧」がみられ、遺物にも付着する。とくにＩ区では６～９層にかけて土壌中に沼鉄が多い。10層は色調の多様な砂層で、場所によって変化がみられる。部分的に暗褐色、灰色、黄褐色などを呈し、Ｅ・Ｆ区では黄褐色で、粒度はより細かくなる。Ｅ・Ｆ区の遺構はこの面で確認されている。Ｇ区では縄文時代晩期の土器も確認されており、さらに分層される可能性がある。11層は泥炭質の有機成分を多く含む礫層である。

Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区基本層序

最上層は公園造成時の盛土である。１層は旧表土である。１b層は黒褐色のシルト質で２層の漸移層である。１c層はＤ区南西部の１層下部に認められ、暗赤褐色シルト質土壌である。鉄分をブロック状に含む。２層は黒色



第3図　基本層序模式図
Excavated layers in the Sanno-gakoi site

のシルト質であり、径5㎜の白色土粒を少量含み、深耕の痕跡が多く認められる。層の堆積は南側で厚く、北側で薄い。2a層は黒色シルト質土壌であり、鉄分の多い土壌を斑状に多量に含む。3層はにぶい黄褐色粘土質シルトであり、4層の漸移層である。4層は黄褐色の粘土質シルトである。この3、4層からは遺物は検出されていない。

B区の北東隅を1m四方、深さ約1.4mまで試掘し、堆積状況を調べ、501～518層の18層に区分した。501～510層は、砂層、砂質シルト層、シルト層が互層となって堆積し、各層の厚さは約50㎝である。その下の511層は厚さ約30㎝の粘土層である。512～516層は厚さ20～30㎝の砂層、517、518層は砂礫層である。いずれの層も水成堆積層で、遺物は出土していない。

K区基本層序

K区では1～10層が認められた。内容はA～D区と類似する。1～3層は公園造成時の盛土である。4層は旧表土、5、6層は耕作土である。7、8層は黒褐色の遺物包含層で南側でより厚く、主として縄文時代晩期後半から弥生時代前期の遺物が認められる。9層は10層由来の黄褐色土ブロックを含むシルトである。10層は、黄褐色のシルトであり、遺構確認面である。

各区の基本層序の対応

E～J区の水成堆積層である2～8層は、A～D・K区には堆積が認められない。その下層では、E～J区の9層、A～D区の2層、K区の7、8層が対応する。いずれも黒色土層で遺物を多く含む。黄色土層の漸移層として、A～D区3層とK区9層が対応する。E～J区には堆積がみられない。さらにE～J区の10層、A～D区の4層、K区の10層が対応すると考えられる。この層は縄文時代から弥生時代の遺構の確認面である。E～J区の11層は礫層であるが、B区の深掘区の517、518層の礫層がこれに対応する可能性がある。I区では、11層は西側に向かって傾斜しており、複雑な水成堆積の状況が予想される。　（富岡、菅原）

第２節　遺　　構

今回の調査で検出された各遺構の内容と分布は次の通りである。

縄文時代晩期

Ｄ・Ｅ区南側、Ｋ区の自然堤防上で竪穴住居跡、ピット、墓壙と考えられる土器埋設土壙が検出されている。Ｅ・Ｆ・Ｈ区においては多数の遺構が重複して検出されており、Ｇ区より西側の遺構群についても、弥生時代の遺構と重複が確認されることから晩期以前に属する遺構群が存在する可能性が高い。

弥　生　時　代

Ｆ区からＩ区において多数の遺構が確認されている。竪穴住居跡はF区の北半で２棟が検出された。Ｇ区の南寄りには土器埋設土壙群が、中央付近では配石遺構とその周囲にめぐる溝跡が検出され、墓域の存在が推測される。Ｇ区から西にのびるＩ区では南北方向の畦畔状遺構が２条確認された。

古墳時代以降

自然堤防上東南部にあたるＡ～Ｆ区にかけて確認された。Ａ区南寄りに竪穴住居跡1棟、南端ではピット１基が検出された。Ｃ区の北端には７世紀末から８世紀前半のピット２基が検出されている。また、Ｃ～Ｆ区において上記の遺構とほぼ同時期に属する溝跡が確認されている。

１）竪穴住居跡

第１号竪穴住居跡（第２図版）

Ａ区中央東寄りで検出された、一辺約３ｍの方形の竪穴住居跡である。２層上面から掘り込まれている。床面は４層を掘り込んでおり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土壌を主体とし５つに分層される。覆土３と５はカマドの埋土と考えられる。

カマドは北辺中央部に設けられている。カマドの埋土である覆土３は暗赤褐色粘土質シルトで、多量の焼土を含んでいる。煙道は北にのび、その覆土５は黒褐色シルトで、炭化物や焼土を若干含んでいる。燃焼部で、倒立した状態の土師器の甕が検出されており、支脚として用いられたと考えられる。

竪穴住居跡内の南西隅に径30㎝、深さ15㎝の柱穴１が確認されている。柱穴埋土１は黒色シルトであり、黄褐色土ブロックと焼土粒を少量含む。埋土２は黒褐色シルトであり、焼土粒を多く含む。

黒褐色シルトの覆土４より土師器の杯が３個体出土している（第12図版４、５、６）。杯は国分寺下層式の前段階のものである（加藤 1989）。これらの出土土器から第１号竪穴住居跡は７世紀末から８世紀前半に属すると考えられる。同時期の竪穴住居跡は、宮城県志波姫町山ノ上遺跡（手塚 1980）、御駒堂遺跡（小井川他 1982）、蔵王町塩沢北遺跡（小川 1980）で確認されている。（高橋）

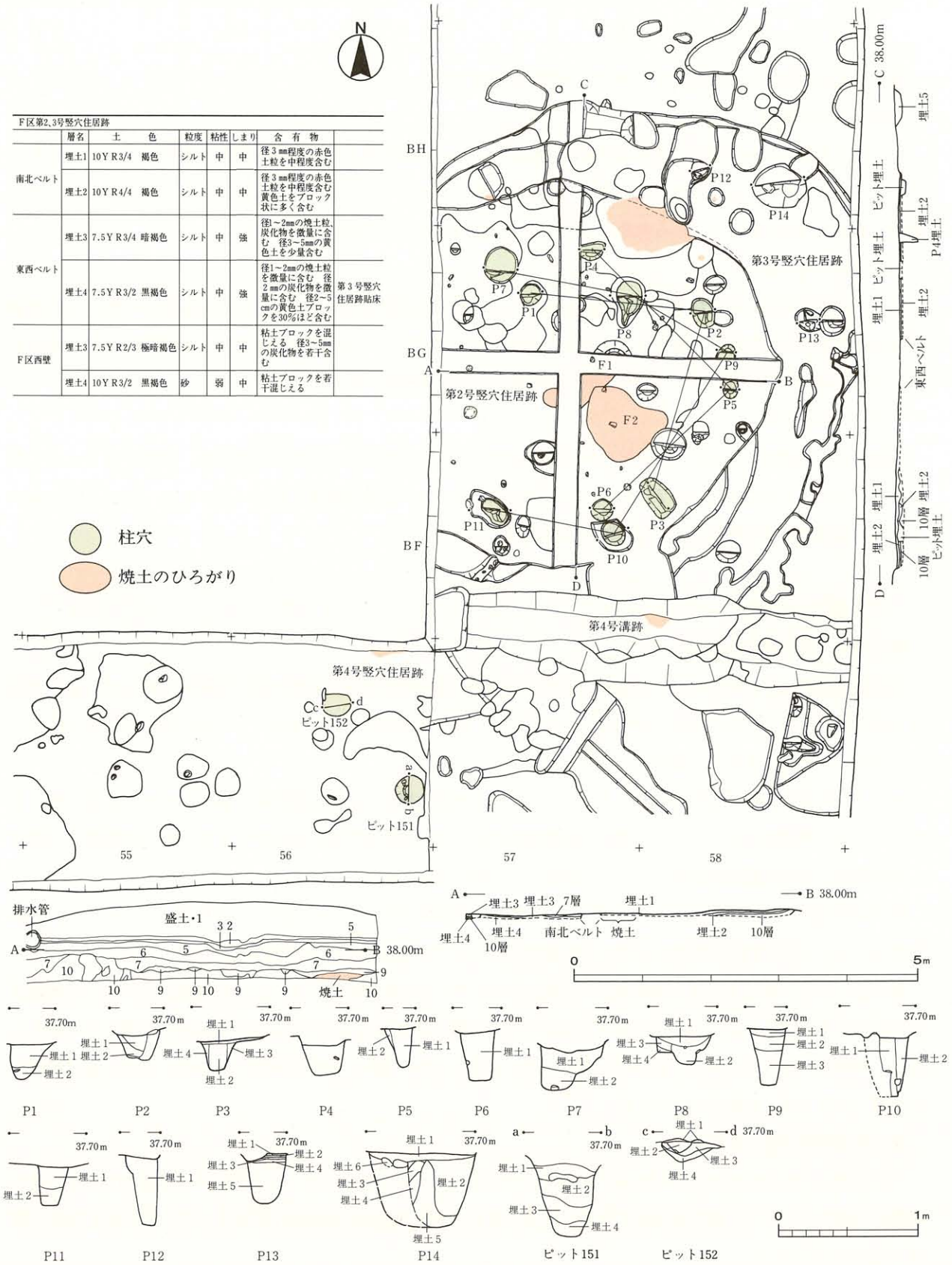
第２号竪穴住居跡（第４図）

Ｆ区北寄りで検出された直径5.6m程の不整円形を呈する竪穴住居跡である。壁上部は第３号竪穴住居跡の構築の際に削平されている。残存する深さは５～15㎝である。今回の調査では床面の精査は一部にとどめており、壁溝は検出されなかった。

住居跡の中央およびその南東寄りで重複する２基の炉跡が検出された。いずれの炉も、焼土と炭化物を多量に

F区第2,3号竪穴住居跡

	層名	土　色	粒度	粘性	しまり	含有物	
南北ベルト	埋土1	10YR3/4 褐色	シルト	中	中	径3㎜程度の赤色土粒を中程度含む	
	埋土2	10YR4/4 褐色	シルト	中	中	径3㎜程度の赤色土粒を中程度含む 黄色土をブロック状に多く含む	
東西ベルト	埋土3	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	中	強	径1～2㎜の焼土粒、炭化物を微量に含む 径3～5㎜の黄色土を少量含む	
	埋土4	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	中	強	径1～2㎜の焼土粒を微量に含む 径2㎜の炭化物を微量に含む 径2～5cmの黄色土ブロックを30%ほど含む	第3号竪穴住居跡貼床
F区西壁	埋土3	7.5YR2/3 極暗褐色	シルト	中	中	粘土ブロックを混じえる 径3～5㎜の炭化物を若干含む	
	埋土4	10YR3/2 黒褐色	砂	弱	中	粘土ブロックを若干混じえる	



第4図　第2、3、4号竪穴住居跡（F・H区）

Plans and sections of pit dwelling 2, 3 and 4

含んでいる。１号炉（Ｆ１）は重複関係と位置から第２号竪穴住居跡に伴うと考えられる。この炉は長径1.4m、短径約60㎝の不整楕円形を呈している。

主柱と推定される柱穴は、Ｐ１～６の６基が検出されている。Ｐ１～３は、深さ20㎝前後で埋土に炭化物や焼土を比較的多く含み、一群と推定される。Ｐ１とＰ２は2.5m、Ｐ２とＰ３は2.7mの間隔をもち、南西の柱穴は検出されていないが、主柱はほぼ正方形の４本柱構成をとると推定される。Ｐ４～６は深さ30㎝前後で焼土をほとんど含まず、一群のものと推定される。Ｐ４とＰ５は３m、Ｐ５とＰ６は2.6mの間隔をもち、これについても南西の柱穴は検出されていないが、これも主柱はほぼ正方形の４本柱構成をとると推定される。第２号竪穴住居跡は、これら２組の柱穴の存在から、ほぼ同規模で改築が行われたと考えられる。

第２号竪穴住居跡の覆土および床面からは、弥生Ⅱb期の土器（第５図版４～11）、石鏃（第13図版20）、打製石斧（第15図版37）、凹石（第15図版44、45）、石核（第17図版53）が出土しており、この住居跡の所属時期は弥生Ⅱb期と考えられる。この竪穴住居跡は、規模、構造の点で、岩手県滝沢村湯舟沢遺跡（桐生他 1986）、軽米町馬場野Ⅱ遺跡（工藤他 1986）、宮古市上村貝塚（小田野他 1991）の弥生時代前期竪穴住居跡と類似する。　（須藤、西村）

第３号竪穴住居跡（第４図）

第３号竪穴住居跡は第２号竪穴住居跡と重複し、直径約８mの不整円形を呈する。洪水により壁上部が削平されている。壁溝は幅20㎝、深さ20㎝程で周囲12m分が確認された。また貼り床も確認された。

２号炉（Ｆ２）は第３号竪穴住居跡に伴うと推定される。Ｆ２はＦ１の上層にある。この炉は東西1.2m、南北

ピット番号	層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
Ｐ１	埋土１	7.5ＹＲ3/2　黒褐色	シルト	中	中	径10mm以上の炭化物、黄色、赤色土粒を多く含む
	埋土２	7.5ＹＲ3/2　黒褐色	シルト	中	中	径5mm程度の黄色土粒をまばらに含む
Ｐ２	埋土１	10ＹＲ2/4　暗褐色	シルト	中	中	径3mm程度の炭化物、径5mm程度の黄色、赤色土粒を中程度含む
	埋土２	10ＹＲ4/6　褐色	砂質シルト	中	弱	
Ｐ３	埋土１	10ＹＲ3/1　黒褐色	シルト	中	中	径5mmの炭化物焼土を多く含む
	埋土２	7.5ＹＲ	砂質シルト	弱	中	径5mmの炭化物焼土を含む
	埋土３	10ＹＲ2/4　暗褐色	砂	弱	弱	
	埋土４	10ＹＲ2/4　暗褐色	砂	弱	弱	
Ｐ５	埋土１	10ＹＲ2/2　黒褐色	シルト	中	中	径5mmの炭化物を少量含む　径2～5mmの黄色土ブロックを比較的多く含む
	埋土２	10ＹＲ2/3　黒褐色	砂質シルト	中	強	径20mmの黄色土ブロックを含む
Ｐ６	埋土１	10ＹＲ3/3　暗褐色	砂質シルト	中	中	径3mm程度の黄色土粒をまばらに含む
Ｐ７	埋土１	10ＹＲ2/2　黒褐色	シルト	中	中	径5mm程度の黄色土を多く含む
	埋土２	7.5ＹＲ2/2　黒褐色	シルト	中	中	径5mm程度の黄色、赤色土粒をまばらに含む
Ｐ８	埋土１	10ＹＲ2/3　黒褐色	シルト	中	中	径5mm程度の焼土粒、炭化物を比較的多く含む
	埋土２	10ＹＲ3/3　暗褐色	砂質シルト	中	中	径5～20mmの黄褐色土ブロックを多く含む　径5mmの炭化物を比較的多く含む
	埋土３	10ＹＲ5/6　黄褐色	粘土質	強	中	
	埋土４	10ＹＲ2/1　黒色	粘土質シルト	強	中	
Ｐ９	埋土１	10ＹＲ2/2　黒褐色	シルト	中	強	径1～2mmの炭化物と焼土粒を含む　径5mmの黄色土粒を少量含む
	埋土２	10ＹＲ2/2　黒褐色	シルト	中	中	径3cmの黄色土ブロックを多く含む　径2mmの炭化物を少量含む
	埋土３	10ＹＲ3/5　暗褐色	シルト	中	中	
Ｐ10	埋土１	10ＹＲ3/4　暗褐色	シルト	中	中	径1mm程度の炭化物、径1～3mm程度の赤色土粒を少量含む
	埋土２	10ＹＲ4/4　褐色	砂質シルト	中	弱	
Ｐ11	埋土１	10ＹＲ3/2　黒褐色	シルト	中	中	径2mm程度の黄色、赤色土粒をまばらに含む
	埋土２	10ＹＲ4/4　褐色	砂質シルト	中	弱	
Ｐ12	埋土１	10ＹＲ2/3　黒褐色	シルト	中	弱	径2mm程度の赤色土粒をわずかに含む　径1～2cm程度の10ＹＲ4/4褐色土をブロック状にまばらに含む
Ｐ13	埋土１	10ＹＲ3/3　暗褐色	シルト	中	中	径1mm以下の黄色土粒を中程度含む
	埋土２	2.5ＹＲ4/6　赤褐色		弱	中	埋土1の土がわずかに含まれる
	埋土３	10ＹＲ5/6　黄褐色	シルト	中	中	埋土4の土がわずかに含まれる
	埋土４	10ＹＲ2/2　黒褐色	シルト	中	中	
	埋土５	10ＹＲ3/3　暗褐色	シルト	中	中	径1～2cm黄色ブロックを中程度含む
Ｐ14	埋土１	10ＹＲ3/3　暗褐色	シルト	中	中	径1～5mmの赤色土粒、炭化物を多く含む
	埋土２	10ＹＲ3/3　暗褐色	シルト	中	中	径1～2cmの10ＹＲ4/4褐色ブロックを多く含む　径1～5mmの赤色土粒、炭化物を多く含む
	埋土３	10ＹＲ4/4　褐色	粘土質シルト	強	中	径1mm以下の赤色、黄色土粒を多く含む
	埋土４	10ＹＲ3/2　黒褐色	シルト	中	中	径3mm程度の黄色土粒をまばらに含む
	埋土５	10ＹＲ4/6　褐色	シルト	中	中	10ＹＲ2/2黒褐色土が5:1ぐらいに混じる
	埋土６	10ＹＲ4/4　褐色	シルト	中	中	

ピット番号	層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
ピット151	埋土１		粘土質シルト	中	中（やや強い）	砂を少量含む　径10～15mm程度の赤色土粒、径5mm程の炭化物を多く含む
	埋土２	10ＹＲ3/2　黒褐色	粘土質シルト	中	中	砂を少量含む　径10mmの赤色土粒、径5～10mm程の炭化物を含む
	埋土３	10ＹＲ3/3　暗褐色	粘土質シルト	中	中	砂を含む　径3mmの赤色土粒を含む
	埋土４	10ＹＲ3/4　暗褐色	粘土質シルト	中	中	砂を含む　径3mmの赤色土粒を含む
ピット152	埋土１	7.5ＹＲ4/4　褐色	砂質シルト	中	中	
	埋土２	7.5ＹＲ2/2　黒褐色	シルト	中	中	かなり多く炭化物が集中する
	埋土３	7.5ＹＲ3/4　暗褐色	砂質シルト	中	中	
	埋土４	10ＹＲ3/3　暗褐色	砂質シルト	中	中	

80cmの不整形を呈し、その中にこぶし大の礫が7点散在している。

主柱穴は、P7～11の5本が検出されている。P7、P9、P10は深さが40～50cmある。P8、P11は深さ20～30cmと浅い。主柱穴P7、P9、P10間の距離は3.2～3.6mである。さらに壁寄りに、P12～14の柱穴がある。これらはP7～11に補助的に組み合う可能性がある。

この第3号竪穴住居は、第2号竪穴住居を拡張し、建て替えられたものと推定される。

第3号竪穴住居跡の床面および主柱穴P9、P10から弥生Ⅱb期の土器が出土している。

また、第3号竪穴住居跡では、北寄りの貼り床上にひろがる長径1.4m、短径80cmの不整楕円形を呈する焼土面をはじめとして、いくつかの焼土面が確認されている。P14の埋土には焼土粒や炭化物が多く含まれ、P13には焼土層がみられる。さらに壁溝からは焼けた土器片が出土しており、焼失住居の可能性が高い。

第3号竪穴住居跡は、その規模、構造の点で、青森県下北郡脇野沢村瀬野遺跡（伊東他 1982)、秋田県秋田市地蔵田B遺跡（菅原他 1986）において検出されている弥生時代前期の竪穴住居跡と類似している。　（富岡、西村）

第4号竪穴住居跡（第4図）

第4号竪穴住居跡はH区東北寄りで検出された。焼土の分布がH区北東隅にみられ、地床炉と推定される。H区北壁セクションで10層を掘り込んだ第4号竪穴住居跡の壁の立ち上がりが確認された。ピット151、152は深さ15～30cmで焼土粒を含む。これらのピットは第4号竪穴住居跡の柱穴と推定される。F区の第2、3号竪穴住居跡やピットとの重複関係から、第4号竪穴住居跡は周囲の遺構群より古いことが明らかである。さらに、ピット152からは縄文晩期V期の壷（第5図版18）や縄文晩期VI期の深鉢（第5図版17）が出土している。　（氷見）

第5号竪穴住居跡（第5図）

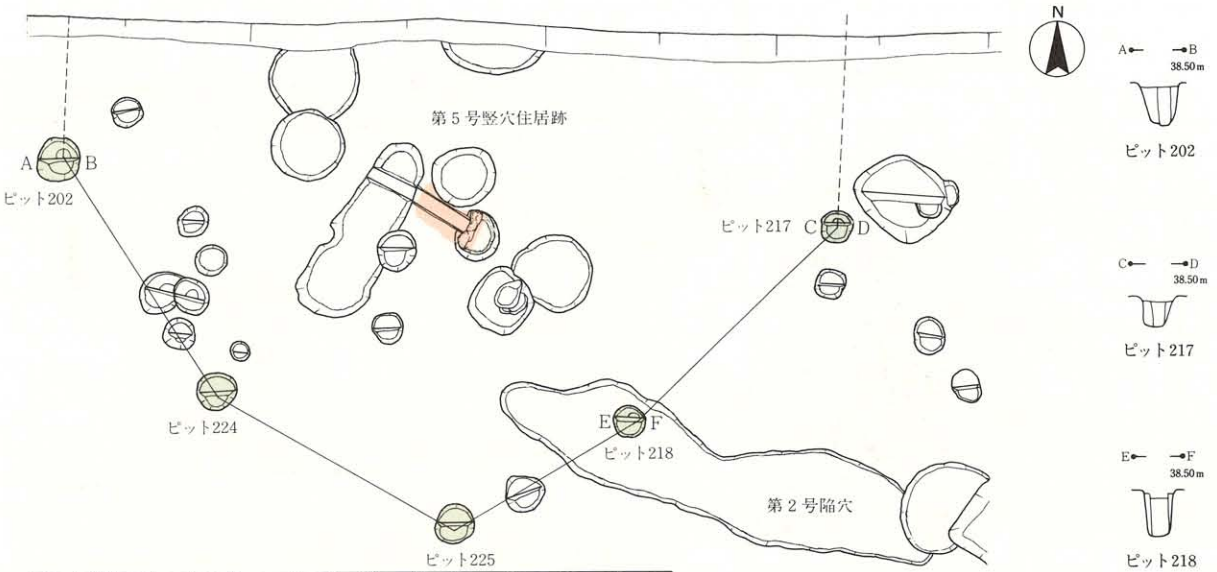
K区の中央東寄りに位置し、10層上面で確認されている。地床炉とその周囲にめぐる5基の柱穴が検出された。地床炉は径約40cmのひろがりをもつ。壁は削平されていた。柱穴の配置から、径約6mの不整円形を呈する住居であったと考えられる。ピット202、217、218、224、225は住居の柱穴と推定され、深さ20～35cmである。ピット202、217、218には柱痕跡が認められる。ピット202からは、縄文晩期VI期、あるいは弥生I期の浅鉢が出土している（第6図版14)。さらに地床炉から石皿（第17図版52）が出土している。この竪穴住居跡は、ピット202から出土した土器より縄文晩期VI期あるいは弥生I期に属すると考えられる。　（大場、関）

第6号竪穴住居跡（第5図）

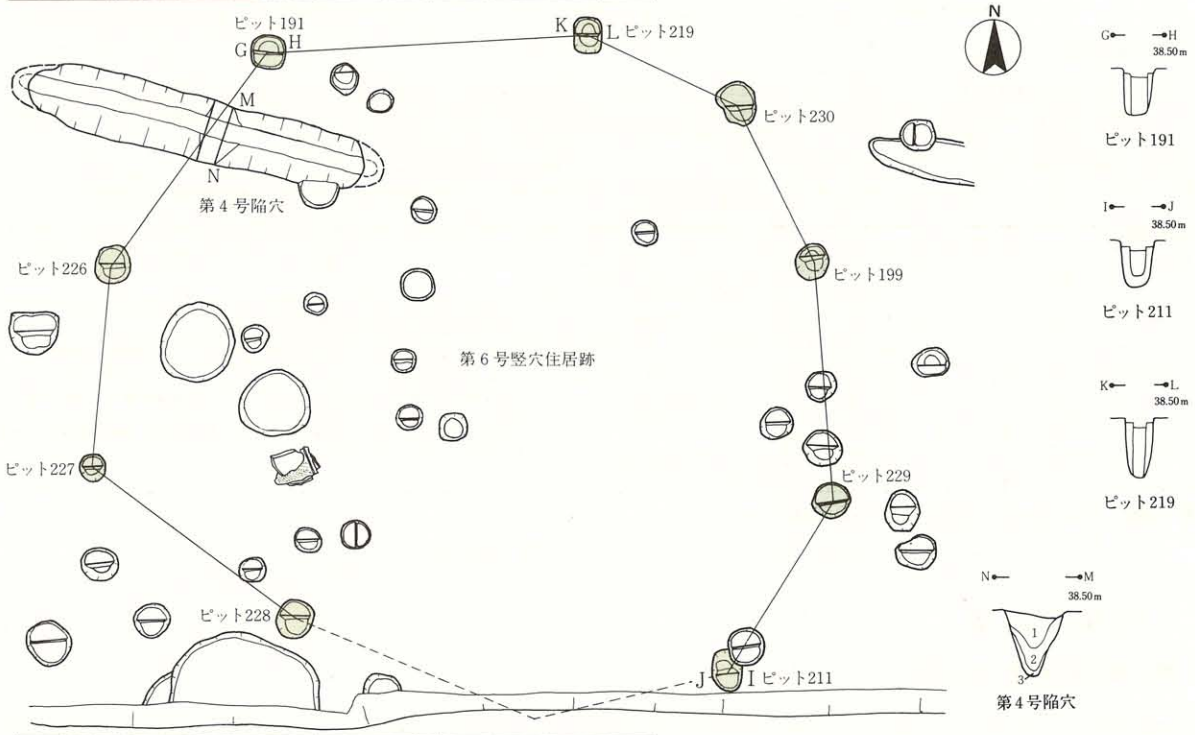
K区中央西寄りに位置し、10層上面で確認されている。柱穴の配置から推定して径約6mの円形を呈すると考えられる。ピット191、199、211、219、226～230の計9基が柱穴と推定される。このうちピット191、211、219は柱痕跡が認められ、深さ約30～50cmである。床面から縄文晩期VI期と推定される甕（第12図版1）が一括して出土している。　（大場、関）

第7号竪穴住居跡（第2図版）

K区北東隅において、狩野文朔氏の発掘によるトレンチに切られて検出された。覆土は6つに分けられる。ピット231はこの住居の柱穴と考えられ、柱痕跡があり、深さは20cm以上である。縄文土器片及び石鏃（第13図版17）が住居の覆土から出土している。　（大場、関）



ピット番号	層　名	土　　色	粒　度	含　有　物
ピット202	掘　形	10YR3/3暗褐色	シルト	径5cmのローム粒
	柱痕跡	10YR3/3暗褐色	粘質シルト	径2cmのローム粒
ピット217	掘　形	10YR2/2黒褐色	シルト	径3cm以下のローム粒
	柱痕跡	10YR2/1黒色	粘質シルト	
ピット218	掘　形	10YR2/2黒褐色	シルト	径2cmのローム粒
	柱痕跡	10YR3/1黒褐色	シルト質粘土	

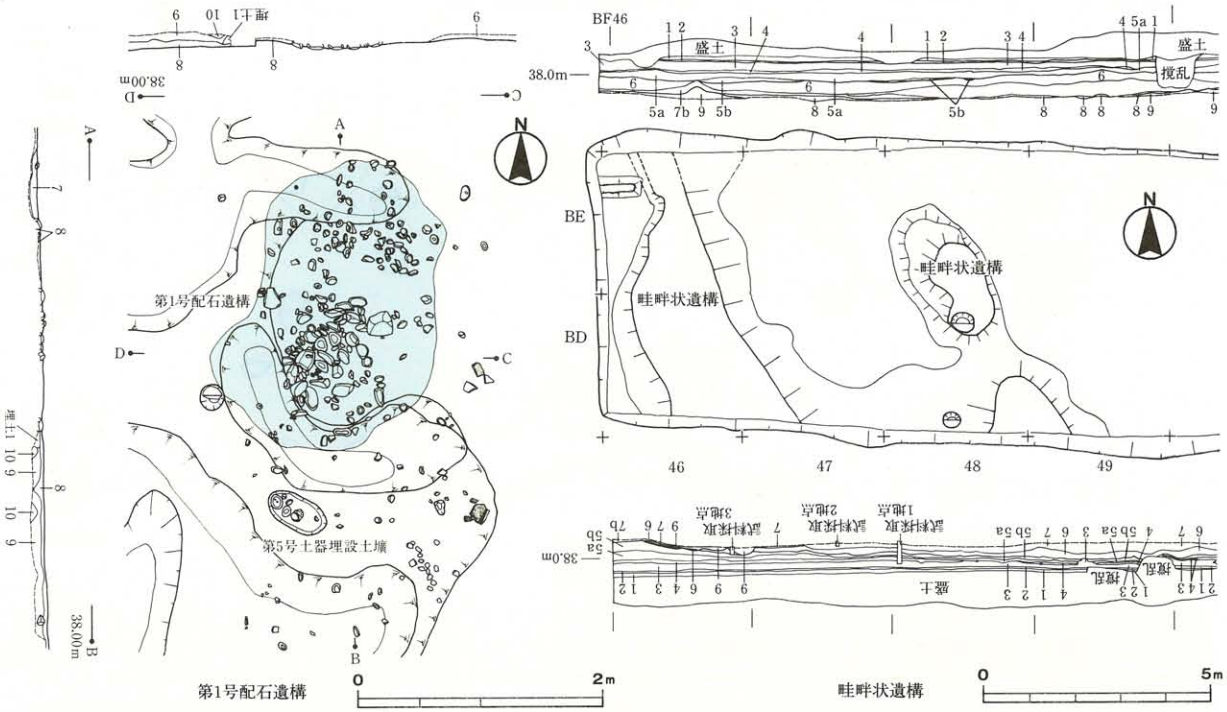


ピット番号	層　名	土　　色	粒　度	含　有　物
ピット191	掘　形	10YR3/1黒褐色	シルト	
	柱痕跡	10YR3/2黒褐色	粘土	
ピット211	掘　形	10YR2/2黒褐色	シルト	径2cmのローム粒
	柱痕跡	10YR2/1黒色	シルト質粘土	木炭焼土粒
ピット219	掘　形	10YR2/1黒色	シルト	径0.5～1cmのローム
	柱痕跡	10YR2/2黒褐色	シルト質粘土	

第４号陥穴

層　名	土　　色	粒　度	含　有　物	備　　考
埋土１	10YR2/1黒色	粘土		均質である　自然堆積
埋土２	10YR1.7/1黒色	粘土	下部にローム粒少々	自然堆積
埋土３	10YR2/2黒褐色	シルト質粘土	崩落土　径2～3cmのローム含む	自然堆積

第５図　第５、６号竪穴住居跡（K区）
Plans and sections of pit dwelling 5 and 6



G区 第1号配石遺構						
層名	土　色	粒　度	粘　性	しまり	含　有　物	備　考
7	10Y R7/2　にぶい黄橙色	粘土	強	強	沼鉄により褐色になっている	遺物が少量出土した　全体を覆っていたと考えられるが溝状に残存しているのみである
8	10Y R4/3　褐灰色	シルト	中	中	沼鉄をまじえる	弥生土器、フレークなどの遺物が多く出土した　7層と9層の漸移層　白と黒をバッチ状に含む
9	10Y R3/1　黒褐色	砂質シルト	弱	弱	径約3mmの炭化物、径1mmの白色土粒を少量含む	弥生土器、フレークなどの遺物が多く出土した
10	10Y R6/6　明黄褐色	砂	弱	弱		場所によって沼鉄が激しく赤変している
配石埋土	7.5Y R2/1　黒色	粘土質シルト	中	中	径3～5mmの炭化物を非常に多く含む 3～20cmの礫を多数含む	弥生土器、フレークなどの遺物が多く出土した　配石遺構、9層を切り、8層に覆われる

畦畔状遺構						
層名	土　色	粒　度	粘　性	しまり	含　有　物	備　考
5a	10Y R5/1　褐灰色	シルト	中	強	マンガンを含む　鉄分が多く、縦方向に微細なクラックが多数みられる　白色粒子(径1～2mm)をわずかに含む	
5b	7.5Y R6/2　灰褐色	シルト	中	強	鉄分が縦方向に細かく入る　白色土粒がやや入る	西側で6・7層を削っている痕跡がみられる　また、西側では徐々に土粒が粗くなっており、時間をかけて推積した水成推積層と考えられる
6	10Y R4/2　灰黄色	粘土	強	強	鉄分が縦方向にやや太めに入る　径2～3mmのマンガンを斑状に含む	弥生土器の小破片をまばらに含む一部で白色砂粒がラミナ状に推積する水成推積層
7	7.5Y R6/2　灰褐色	粘土	強	強	鉄分が縦方向に太めに入る　マンガンを多く含む	6層より土色が明るい
7b	5Y R4/8　赤褐色	粘土	強	強	上部に砂利が多く、下部に鉄分を多量に含む	南側付近では植物の根の痕跡がみられた　北側と南側に偏って分布し中央部で薄い
8	10Y R4/2　灰黄色	粘土	強	強	炭化物を含む	北側と南側に偏って分布し中央部で薄い　西側で土手状に高まり畦畔状遺構がみられる 山王Ⅲ層式土器を多く出土する
9	7.5Y R1.7/1 黒色	粘土	強	強	炭化物を多量に含む　鉄分をやや多く含む	
11	―	礫	―	―	径5cm程度の礫が多い	

第6図　第1号配石遺構、畦畔状遺構（G・I区）
Plans and sections of stony feature 1 and the levee-like feature

2）配 石 遺 構

第1号配石遺構（第6図）

G区の中央で検出され、長軸が2.2m、短軸が1.3mの楕円形を呈する。礫の集中は北と南に分かれる。北側は5～10cm程度の比較的小さな礫、南側は10～20cm程度の比較的大きな礫で構成される。9層および10層を掘り込んでいる。配石の埋土は、周囲の9層よりも黒色の強い粘土質と細粒砂質であり、炭化物を多く含んでいる。配石の埋土や周囲から、土器片、凹石、剥片、砕片などが多く出土している。配石上部で弥生Ⅱb期の甕の口縁部破片が出土している（第5図版21、第6図版1）。

また、配石の南端から30～40cm離れた位置に、弥生Ⅱb期の高杯脚部（第11図版3）などを出土した第5号土器埋設土壙がある。　（菅原）

３）畦畔状遺構（第６図）

Ｉ区において黒色の泥炭質粘土（９層）からなる土手状に高まった２本の畦畔状遺構が検出された。この間隔は約４ｍである。東側の畦畔状遺構は、一部で途切れるが長さ約5.5mであり、断面は下端幅1.7～1.8m、上端幅１～1.5m、高さ13～33cmの台形を呈する。西側の畦畔状遺構は長さ約６ｍで断面は下端幅約60cm、高さ16cmの蒲鉾形を呈する。畦畔の間を埋める８層はＧ・Ｉ区にのみ認められ、９層に由来する灰黄褐色の粘土を主体とし、多量の炭化物を含んでいる。９層から弥生Ⅱb期の壷（第７図版14）、高杯（第７図版11）や甕（第７図版16）、弥生Ⅱa期の浅鉢（第７図版17）など多量の土器が出土している。畦畔状遺構は、出土土器から弥生Ⅱb期に属すると考えられる。畦畔状遺構の西側では泥炭層が確認され、弥生Ⅱb期の蓋（第７図版10）が出土している。（荻原）

４）溝　　跡

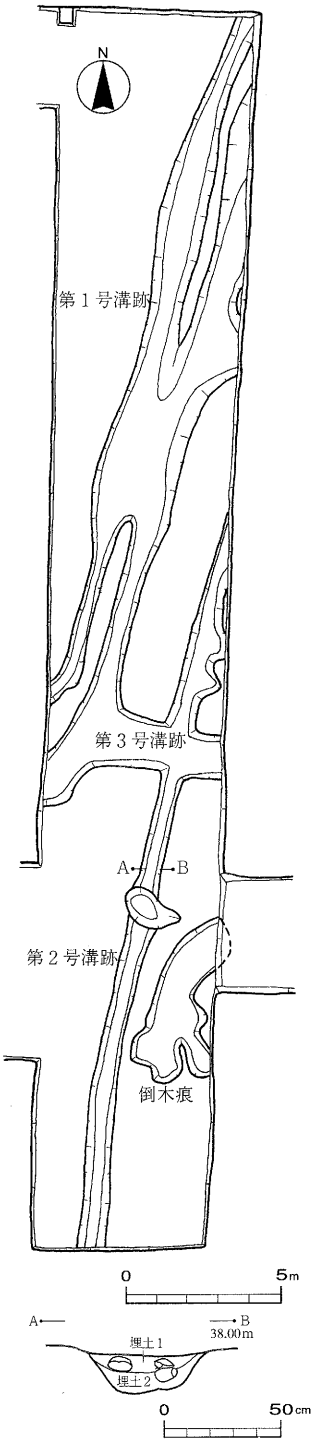
第１、２、３号溝跡（第７図）

第１、２、３号溝跡はＧ区の４層上面で検出された。ほぼ南北に平行に走る溝を第１、２号溝跡とし、２つの溝を連結し東西に走る溝を第３号溝跡とした。第１号溝跡は幅約2.5m、深さ26cmである。ＢＫ52区において東に分岐しており、またＢＦ51区で西へとのびる。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。第２号溝跡は第１号溝跡よりもやや狭く幅約90cm、深さ20cmである。壁の立ち上がりは明瞭である。第３号溝跡は幅1.7mで底面は平坦であり、壁はなだらかに立ち上がる。

埋土は２層が確認された。埋土１は多量の礫を含み、一部に４層由来の灰白色火山灰ブロックを含む。埋土２は黒褐色のシルト質砂である。この層より中世陶器の擂鉢（第12図版13）が出土していることから、中世以降の溝と考えられる。また第２号溝跡からは弥生Ⅱ期の土器（第６図版２）や磨製石斧（第14図版35）が出土している。

第４号溝跡（第２、３図版）

Ｃ～Ｆ区で検出された。６b層を掘り込み、第２、３号竪穴住居跡の南縁辺を切っている。Ｆ区においては幅0.8～1.2m、深さ20cmで、壁はなだらかに立ち上がる。埋土は粘土質シルトで、下層ほど沼鉄を多く含む。Ｃ、Ｄ区においては、幅１～1.2m、深さは１ｍである。掘り込み面は２層上面で、壁の立ち上がりは明瞭である。埋土１は黒色粘土質シルトであり、埋土２は黒褐色の粘土質シルトで、４層由来の黄褐色土粒をブロック状に含む。埋土１から縄文晩期Ⅳ～Ⅵ期の土器（第４図版28～34、第５図版１、２）や土師器の破



第1、2、3号溝跡				
層名	土色	粘性	しまり	粒度
埋土１	青灰色	強	強	粘土
埋土２	黒灰色	強	強	シルト質砂

含有物	備考
径10～30cmの円礫、多量の炭化物を含む	
	一部で弥生土器・石斧が出土した

第７図
第１、２、３号溝跡（Ｇ区）
Plan and section of ditch 1, 2 and 3

片が出土しており、帰属時期は古墳時代以降と考えられる。

第５、６号溝跡（第３図版）

Ｇ区の第１号溝跡の下層において検出された溝を第５号溝跡とし、これに直交し西にのびる溝を第６号溝跡とした。第５号溝跡は幅1.2～3.0mである。第６号溝跡は長さ2.5m、幅１mである。埋土は７層由来の白色粘土と８層由来の灰褐色粘土である。この溝は自然堤防と沖積面の傾斜変換線上に位置し、複雑に分岐しており、自然流路を利用した溝と推定される。これらは畦畔状遺構と関連している可能性が考えられ、今後検討していく必要がある。（高橋）

５）土器埋設土壙

第１号土器埋設土壙（第８図）

Ｅ区ＡＺ60区の10層上面で検出された。径60cmの円形であり、深さ35cmである。埋土１は黒褐色砂質シルトで、埋土２は褐色砂質シルトである。縄文晩期Ⅵ期の鉢（第11図版１）が出土した。

第２号土器埋設土壙（第８図）

Ｇ区ＢＢ51区の西壁付近に位置し、10層で検出された。径34cmの円形で、深さ31cmである。埋土１は暗緑灰色砂質シルトで、焼土を含んでいる。埋土２は埋土1より青みが強く、炭化物を多く含む。土器は正立し、体部下半と底部が出土している。この土器は横走縄文が施文され、弥生Ⅱb期に属する甕（第11図版２）と考えられる。また、径10cmの礫が埋土２上面で出土している。

第３号土器埋設土壙（第８図）

Ｇ区ＢＣ52区の10層上面で検出された。楕円形を呈し、長径82cm、短径44cmで深さは20cmである。口縁部に突起を有し平行沈線のめぐる弥生Ⅰ期の深鉢（第12図版３）が出土している。

第４号土器埋設土壙（第８図）

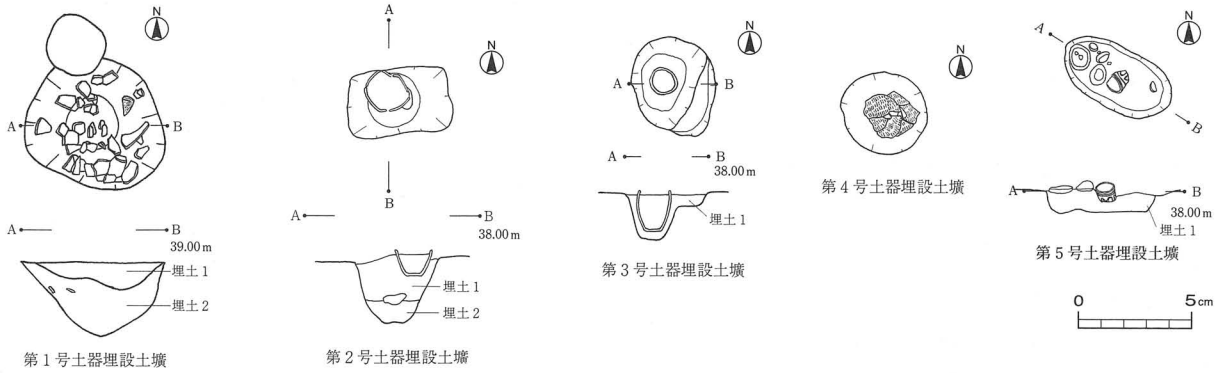
Ｇ区ＢＤ52区の10層を掘り込み、土壙底部は11層に達している。径76cmの円形を呈する。埋土は黒色砂である。横走縄文が施されている弥生Ⅱb期の甕（第５図版19）が出土している。

第５号土器埋設土壙（第８図）

Ｇ区ＢＨ52区の第１号配石遺構の南で検出された。長径55cm、短径27cmの楕円形を呈し、深さ10cmである。検出面は９層上面で、10層を掘り込んでいる。埋土は灰褐色砂質シルトである。弥生Ⅱb期の高杯の脚部（第11図版３）が倒立して出土している。凹石と礫を共伴した。（高橋）

６）陥　　穴（第２図版、第５図）

Ｄ・Ｋ区で長楕円形を呈する陥穴が5基確認された。Ｄ区は４層、Ｋ区は10層上面で検出されている。Ｋ区検出の第２～４号陥穴は自然堤防の等高線に沿って東西に一列に並んでいる。第１、５号陥穴の長軸は自然堤防の等高線に対し直交している。Ｄ区の第１号陥穴は、長軸約2.3m、短軸40cm、深さ50cmである。底部に「逆茂木」などの痕跡は確認されなかった。埋土からは遺物は出土していない。これらの陥穴は集落が盛んに営まれた縄文晩期中葉以前に作られたと考えられる。（高橋）



第１号土器埋設土壙(E区)

層名	土色	粘性	しまり	粒度	含有物	備考
埋土１	10Y R2/2　黒褐色	中	中	砂質シルト		土器の小破片
埋土２	10Y R3/4　暗褐色	中	中	砂質シルト	10層の黄褐色土をブロック状に含む	

第２号土器埋設土壙(G区)

層名	土色	粘性	しまり	粒度	含有物	備考
埋土１	10G Y4/1　暗緑灰色			砂質シルト	焼土を含む	
埋土２				シルト質砂	炭化物を含む	

第３号土器埋設土壙(G区)

層名	土色	粘性	しまり	粒度	含有物	備考
埋　土	10Y R3/3　暗褐色	中	中	砂質シルト	径2～3mmの赤色土粒を含む	

第５号土器埋設土壙(G区)

層名	土色	粘性	しまり	粒度	含有物	備考
埋土１	10Y R2/2　黒褐色	中	中	粘性シルト	燈色の鉄分を比較的多く含む	層厚は13cmである 石器、山王Ⅲ層式土器を含む 埋土1,1′と特に分けて注記
埋土1′	7.5Y R4/1 褐灰色	弱	弱	砂質シルト		山王Ⅲ層式高杯の台部、凹石、礫(5～8cm)を含む 9層を切り、8層に覆われる 9層に類似する

第８図　第１、２、３、４、５号土器埋設土壙（E・G区）
Plans and sections of pit 1, 2, 3, 4 and 5 with buried pottery

7）ピ　ッ　ト

ピ ッ ト ３（第９図）

C区ＡＸ74区の４層上面で検出された。径126cmの円形を呈し、深さ12cmである。縄文晩期Ｖc期の台付浅鉢（第４図版４）、弥生Ⅰ期の鉢（第４図版３）、Ⅱa期の鉢（第４図版２）、壺（第４図版１）が出土している。また、土製品（第10図２）、円盤状石製品（第15図版38）が出土している。

ピ ッ ト ８（第９図）

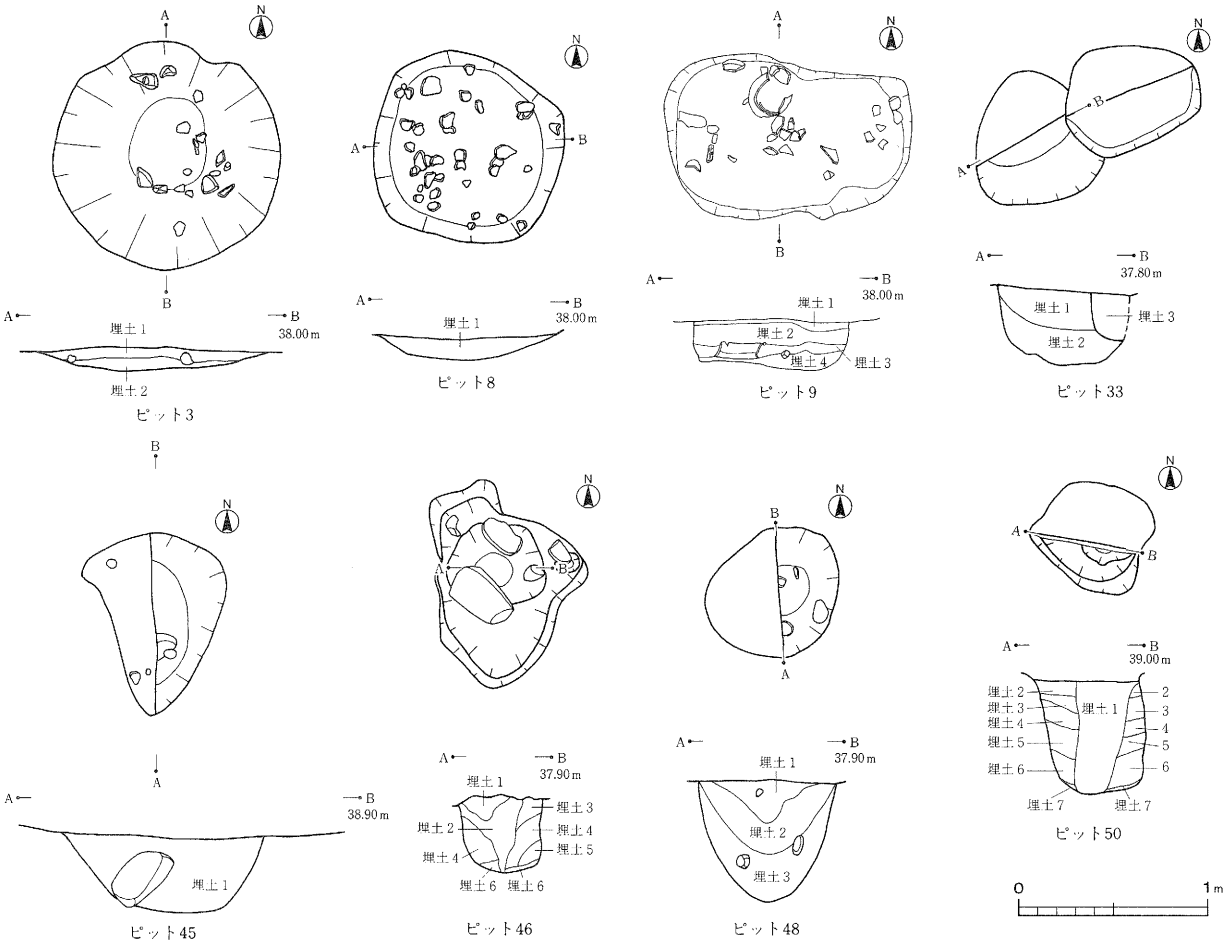
C区ＢＢ75区の４層上面で検出された。径102cmの円形で深さ16cmである。縄文晩期Ｖ期の鉢（第４図版６）、Ｖc期の壺（第４図版７）、晩期Ⅵ期の深鉢（第４図版５）が出土している。

ピ ッ ト ９（第９図）

C区ＢＤ75区の４層上面で検出された。長径131cm、短径51cmの小判形を呈し、深さ27cmである。焼土、炭化物が多量に含まれるピット下部から土師器の甕の口縁部（第12図版12）が倒立して出土している。また、土師器の杯、台付甕（第12図版７、８）が出土しており、これらは一括して廃棄されたものと考えられる。他に縄文晩期Ｖ期の壺（第４図版８）、晩期Ｖa期の甕（第４図版９）が出土している。このピットの帰属時期は７世紀末から８世紀前半と考えられる。

ピ ッ ト 33（第９図）

E区ＢＣ61区の10層上面で検出された。径40cmの円形を呈し、深さ38cmである。埋土１から縄文土器片が出土した。埋土は２つに分けられ、埋土２から石刀（属性表No.44）と縄文土器片が出土している。



ピット番号	区名	層名	土色	粘性	しまり	粒度	含有物	備考
ピット3	C	埋土1	7.5YR2/2 黒褐色	中	中	シルト	わずかに1mm以下の炭化物を含む	
		埋土2	7.5YR2/2 黒褐色	中	中	シルト	径5～10mm程度の炭化物を多く含む　黄色土ブロックを含む　0.5mm程度の赤色粒子を含む	
ピット8	C	埋土1	10YR2/2 黒褐色	中	弱	粘土質シルト	径2mm程の炭化物を少量含む　4層由来の黄褐色土ブロック(径2～5cm)を多量に含む	土器片多い
ピット9	C	埋土1	10YR2/2 黒褐色	弱	強		黄色土ブロックを多く含む	層厚は8cmである　土器片が出土した
		埋土2	10YR3/1 黒褐色	中	中		炭化物を多く含む　焼土粒を若干含む	土師器が多数出土した　層厚は12cmである
		埋土3	10YR2/2 黒褐色	中	中		黄色土ブロックを若干含む　炭化物(木材)を含む	土師器(杯、甕等)が出土した 層厚は11cmである
		埋土4	10YR5/6 黄褐色				黄色砂層(4層の土を埋め戻したもの)に黒色土が混入する	土器片が少量出土した
ピット33	E	埋土1	10YR2/2 黒褐色	弱	中	砂質シルト	径10mm程の炭化物をかなり含む　径5mm程の黄色土粒を多く含む	層厚は20cmである　土器片少量が出土した
		埋土2	10YR2/3 黒褐色	中	強	砂質シルト	径1～3mm程度の黄色土粒を若干含む	層厚は22cmである　土器片少量が出土した
		埋土3	10YR2/3 黒褐色			砂質シルト	黄色土ブロックを多量に含む　径5mm程の炭化物を若干含む	層厚は22cmである　土器片少量が出土した
ピット45	F	埋土1	10YR3/4 暗褐色	弱	中	砂質シルト	径2mm程の炭化物をごくわずかに含む　径5mm程の黄色土ブロックを若干含む　礫の周囲付近は10層の土がブロック状に入る	北側の一部に根による撹乱あり
ピット46	F	埋土1	10YR2/3 黒褐色	弱	中	シルト	径1mm程度の炭化物をまばらに含む	
		埋土2	10YR2/2 黒褐色	中	中	シルト	径1mm程度の赤色土粒をまばらに含む	
		埋土3	10YR4/4褐色と10YR4/1褐灰色が混ざる	中	中	シルト		
		埋土4	10YR4/4褐色と10YR3/2黒褐色が混ざる	中	中	シルト		
		埋土5	10YR4/4 褐色	弱	弱	シルト		
		埋土6	10YR2/2 黒褐色	中	弱	砂質シルト		
ピット48	F	埋土1	7.5YR2/2 黒褐色	中	中	シルト	炭化物と径2cm程度の礫を含む	層厚は22cmである
		埋土2	7.5YR4/4 褐色	中	中	シルト	炭化物を含む	層厚は42cmである
		埋土3	7.5YR3/2 黒褐色	やや弱い	やや強い	粘土質シルト	炭化物を含む	層厚は63cmである
ピット50	E	埋土1(柱痕跡)	10YR2/2 黒褐色	中	中	シルト	径1cm程の炭化物を含む　ほぼ均質な層だが径5cm程の褐色土粒をごく少量、径10cm程の小ブロック状に含む	
		埋土2	10YR3/4 暗褐色	弱	中	シルト	径1～2cmの黄褐色土粒を少量含む	
		埋土3	10YR2/3 黒褐色	中	強	シルト	径2～3mmの炭化物を少量含む	10YR2/3黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトが互層をなしている
		埋土4	10YR2/3 黒褐色	中	強	シルト	径2～3mmの炭化物を少量含む	10YR2/3黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトが互層をなしている
		埋土5	10YR2/3 黒褐色	中	強	シルト	径2～3mmの炭化物を少量含む	10YR2/3黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトが互層をなしている
		埋土6	10YR2/3 黒褐色	中	強	シルト	径2～3mmの炭化物を少量含む	10YR2/3黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトが互層をなしている
		埋土7	10YR2/3 黒褐色	中	強	シルト	径2～3mmの炭化物を少量含む	10YR2/3黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトが互層をなしている

第9図　ピット3、8、9、33、45、46、48、50（C・E・F区）
Plans and sections of pit 3, 8, 9, 33, 45, 46, 48 and 50

ピット45（第９図）

Ｆ区ＡＺ58～ＢＡ58区の10層上面で検出された。長径94㎝、短径76㎝の不整形を呈し、深さ21㎝である。埋土は暗褐色砂質シルトであり、黄褐色土粒をブロック状に含んでいる。ピットの底面近くから礫が出土している。

ピット46（第９図）

Ｆ区ＡＺ57区10層上面で検出された。長径108㎝、短径78㎝の楕円形で、深さ41㎝である。埋土は６層が確認され、黒褐色や褐色のシルトである。ピット上部に石皿などの礫石器（第16図版50）が出土し、一括して廃棄された可能性が高い。山形突起を有する弥生Ｉ期の高杯（第５図版12）が出土している。

ピット48（第９図）

Ｆ区ＢＡ58区の10層上面で検出された。径72㎝の円形で、深さ65㎝である。埋土は３層で、いずれも炭化物を含んでいる。埋土１と３から礫が出土している。

ピット50（第９図）

Ｅ区ＡＺ60区の10層上面で検出された柱穴である。径65㎝の不整円形を呈し、深さ64㎝である。埋土１は柱痕跡であり、径30㎝を測る。黒褐色シルトであり、径５㎜の褐色土粒を含む。埋土１の周囲に褐色と黒褐色のシルト層が互層に堆積しており、柱の埋形と考えられる。このピットの約３ｍ北に柱穴と考えられるピット37があり、関連する可能性が高い。（高橋）

第３節　遺　　物

１）土　　器

Ｃ区の２層、Ｅ～Ｊ区の６～10層、Ｋ区の７、８層の遺物包含層および遺構から出土した完形土器と個体認定可能な口縁部や、有文土器片・底部・台部・脚部を抽出し、属性分析を行なった。器形と装飾の明らかな個体は176点に達している。

ａ　縄文土器・弥生土器

属性表に記した「時期」と、土器型式との対応関係は以下のとおりである。縄文時代晩期Ⅳ期は大洞Ｃ２式、Ｖ期は大洞Ａ式、Ⅵ期は大洞Ａ′式の時期に相当する。Ｖ期はさらに1965年の調査成果（伊東他 1985）にもとづいてＶａ、Ｖｂ、Ｖｃの３期に区分した。また、弥生時代Ｉ期は砂沢式の時期に相当する。Ⅱａ期は青木畑式、Ⅱｂ期は山王Ⅲ層式である。Ⅲ期は寺下囲式、Ⅳ期は桝形囲式、Ｖ期は崎山囲式、Ⅵ期は天王山式の時期に相当する。

「器種」は甕・深鉢・鉢・浅鉢・台付浅鉢・高杯・壷・注口土器・蓋に大別した。

「口縁部の特徴」は平坦口縁、平坦口縁に刻みまたは押圧、小波状口縁（第４図版27）、山形口縁（第11図版６）、平坦口縁に突起（第５図版17）、山形突起（第９図版10）に大別した。

文様帯の名称は、口縁部装飾帯をＩ文様帯、頸部をⅡ文様帯、体部上半をⅢ文様帯、体部下半をⅣ文様帯、底部あるいは台部をＶ文様帯とした。変形工字文は、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｐ型の４類型に大別し、さらに、Ａ型を２類型に、Ｂ型を２類型に、Ｃ型を２類型に細別した（須藤 1976、90）。

抽出された縄文土器には晩期Ⅳ期からⅥ期までの資料が含まれている。晩期Ⅳ期の資料は主にＫ区から出土し

ている。深鉢は口縁部が強く外反し、平坦口縁に刻み、押圧、突起が施されたものが主体である。浅鉢は、平坦口縁あるいは平坦口縁に低い突起を付し、体部に平滑な雲形文を施したもの（第10図版４、５、７）、無文のもの（第10図版８）がある。壷、注口土器は各１点出土し（第10図版11、12）、体部に雲形文が施されている。また、Ⅳ期には、ＬＲ・ＲＬ羽状縄文が多用される。

晩期Ⅴ期の資料は、Ｃ・Ｄ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｋ区から出土した。深鉢・鉢・台付浅鉢・壷がみられる。口縁部がかるく外反する深鉢が出土している（第４図版19、第５図版14）。鉢には、工字文（第７図版５、第９図版12）、匹字文（第６図版20、第11図版10）、変形工字文（第７図版９）が施文されている。台付浅鉢には、体部と台部に匹字文が施されている（第４図版32、第９図版13）。壷は、縄文施文（第７図版７）、匹字文（第４図版７）の資料が出土している。またＫ区から無文の袖珍土器が出土している（第12図版２）。Ｄ区２層から出土した壷は（第11図版６）、口縁部に細い隆帯による三角連繋文が施され、福島県墓料遺跡第８号土壙８号土器（須藤編 1984）、根古屋遺跡第15号墓坑２号土器（梅宮他 1986）に類例がみられる。

晩期Ⅵ期の資料は、Ｄ・Ｅ・Ｋ区から深鉢・鉢・浅鉢・高杯が出土している。高杯は、山形突起を有し、体部に変形工字文Ａ２型（第９図版９）、Ａ１型（第９図版11）が施されている。鉢には、Ａ１型（第４図版14）、Ｐ型（第４図版25）や匹字文が展開する。匹字文の鉢（第11図版１）は、山王Ⅳl・m層出土土器に類例がみられる。第11図版１（第１号土器埋設土壙出土）は、口縁部がゆるやかに内彎する鉢である。口縁部に匹字文、体部にはＬＲ縄文が施され、器面に朱が塗布されている。埋設された土器の中では最も古い型式である。

弥生時代の資料は、Ⅰ期からⅥ期までのものが出土した。弥生Ⅰ期の資料はＣ・Ｇ・Ｋ区から深鉢・鉢・高杯・壷が出土した。鉢には変形工字文Ａ型が施される（第４図版３）。高杯の脚部にはＡ２型（第11図版８）、Ｃ１型（第11図版５）が施文されている。Ａ２型は山王Ⅳa・k層出土の高杯脚部に、Ｃ１型は青木畑遺跡出土土器（加藤 1982）、岩手県花泉町中神遺跡出土土器（須藤 1987、96）に類例がみられる。頸部に焼成前の穿孔を有する壷が１点確認された（第11図版12）。第12図版３（第３号土器埋設土壙出土）は、低い突起をもつ小型の深鉢で、口縁部に４条の平行沈線、内面に１条の沈線がめぐり、体部にはＲ無節縄文が施される。

弥生時代Ⅱa期の資料は、Ｇ・Ｋ区から甕・鉢・高杯・壷が出土した。鉢には変形工字文Ｃ１型が施されている。高杯の体部にもＣ１型（第８図版15、17）が展開し、脚部には波状文（第８図版18）が施されている。壷は、口縁部がゆるやかに外彎しながら立ち上がる器形である（第９図版４）。第11図版２（第２号土器埋設土壙出土）は、体部に粗いＬＲ縄文が横走する甕であり、体部下半から底部にかけて残存し、外面に煤が付着している。

弥生Ⅱb期の資料は、Ⅰ・Ｋ区遺物包含層、Ｆ区第２、３号竪穴住居跡、Ｇ区第４、５号土器埋設土壙、第１号配石遺構から検出されている。甕・深鉢・鉢・高杯・壷・蓋が確認されている。鉢には波状文（第７図版23）と変形工字文Ｃ２型（第５図版７、第８図版11）が施される。高杯は、体部にＣ２型（第５図版８、第７図版24、25）、王字文（第７図版11）が展開する。脚部には波状文（第９図版１）、垂下文が単独あるいは重層して（第５図版９）施される。壷にも変形工字文Ｃ２型が飾られる（第８図版１）。この時期の蓋は２点確認されており、いずれも体部が直線的にひろがり、ＬＲ縄文が施されている（第７図版10、第８図版13）。

第２号竪穴住居跡から主体的に出土した弥生Ⅱb期の土器には、甕・深鉢・鉢・高杯・壷がみられる。変形工字文Ｃ２型が施され（第５図版７、８）、横走縄文が多用されている。第５図版19（第４号土器埋設土壙出土）は、ＬＲ横走縄文の施された甕で、内面に炭化物の付着がみられる。第11図版３（第５号土器埋設土壙出土）は、高杯の

脚部で、磨消縄文による垂下文が施され、器面全体に朱が塗布される。第１号配石遺構から出土した土器は、平坦口縁で、口縁部がゆるやかに外彎する甕である。頸部に平行沈線３条、体部には横走縄文が施される（第６図版１）。弥生Ⅱb期の器種構成と文様の特徴は、須藤が明らかにした山王Ⅲ層式の内容と一致する（須藤 1983）。

弥生時代Ⅳ期以後の土器は、Ｆ区６b層、Ｇ区第２号溝跡、Ｋ区７、８層から出土している。弥生Ⅳ期の鉢には連弧文が施される（第７図版22）。第11図版７には焼成前の穿孔がみられる。第11図版13の鉢は底部に沈線文が施されたもので、蓋の可能性も考えられる。類例は、秋田県横長根Ａ遺跡遺構外出土土器（児玉 1984）にみられる。第７図版1は、弥生Ⅳ～Ⅴ期の壷で、半截竹管で弧線文が施され、Ｆ区とＩ区出土の破片が接合している。この土器型式は、境ノ目Ａ遺跡出土壷（太田他 1982）と共通する。第６図版23はこれと類似する壷で、半截竹管による波状文が施されている。（小山、石田、菅原）

b　土　師　器

土師器はＡ、Ｃ～Ｆ区から出土した。とくに第１号竪穴住居跡とピット９では器形と製作手法の明確な一括資料が出土している（第12図版４～12）。

第１号竪穴住居跡出土土師器

カマド付近から３点の杯が出土した。２点の杯は器高が低く底部は比較的平坦である（第12図版４、５）。さらに他の１点は比較的器高が高く、底部がかるく丸みを帯びる（第12図版６）。いずれも体部外面下位に段を有し、口縁部は内彎気味にひろがる。第12図版４は口縁部端面内側に稜をもつ。３点とも体部上半の外面はヨコナデ、内面は全面ヘラミガキ、黒色処理が施されている。この土器の器形と調整は御駒堂遺跡出土土師器（小井川他 1982）と類似しており、その年代は７世紀末から８世紀前半に属すると推定される。

ピット９出土土師器

ピット９から一括出土した土師器は、杯１点、椀１点、甕３点、台付甕１点で構成される。杯（第12図版７）は丸底で体部外面に段を有し、ほぼ直立した口縁部をもつ。外面調整は上部をヘラミガキ、下部はヘラケズリの後にヘラミガキが施されている。内面調整は全面ヘラミガキである。内外面ともに黒色処理が施されている。椀（第12図版11）は体部から口縁部にかけてゆるやかに内彎する器形である。外面調整は口縁部ではヨコナデの後にヘラミガキ、体部ではヘラケズリの後に上半にヘラミガキ、下半にハケメが施されている。内面調整は全面ヘラミガキ、黒色処理が施されている。第12図版９、10は甕の口縁部である。９は摩滅のため内外面の調整は不明である。10は口縁部内面に稜があり、内外面にヨコナデが施されている。第12図版12は頸部に段を有する長胴甕である。口縁部は外反し、内外面にヨコナデが施されている。体部は内外面ともに不調整で接合痕が明瞭である。第12図版８は台付甕の台部である。中央部でゆるやかに膨らみ、裾部が外方に開く。調整は外面にヘラケズリの後、裾部内外面にナデが施される。この土器は御駒堂遺跡の第２群土器（小井川他 1982）に伴う関東地方の真間式系土器に類似しており、年代は７世紀末から８世紀前半に属すると考えられる。（荻原）

c　中 世 陶 器

中世の擂鉢の口縁部破片がＧ区第２号溝跡から出土した（第12図版13）。表面は赤褐色を呈し、内外面をヨコナデ調整している。胎土や色調などから在地系の窯の製品と考えられる。（荻原）

2）土　製　品

土製品は土偶１点、土版１点、耳飾り３点、不明土製品が２点、計７点が出土している。

a　土　　偶（第10図１）

K区遺物包含層確認面（７、８層上面）から左顔面を欠損した中実の土偶頭部が出土した。側頭部から頭頂にかけて結髪がブリッジ状に飾られ、側頭部の結髪が垂髪となっている。また、頭頂と結髪には朱が残っており、両耳には径３㎜の焼成前穿孔がみられる。山王囲遺跡から出土した晩期Ⅴ期の中空土偶（伊東他 1985）は、頭部の結髪がブリッジとなっている点、側頭部に垂髪がみられる点、朱が塗られている点など今回の出土土偶とよく類似している。これらの土偶と秋田県鐙田遺跡（晩期Ⅴ期終末～Ⅵ期）、地蔵田Ｂ遺跡（弥生Ⅰ期）、青木畑遺跡（弥生Ⅱa期）、山王囲遺跡Ⅲ層出土の土偶とを比較すると、晩期から弥生時代初頭の時期的な変遷を捉えることができる。

b　土　　版（第10図３）

K区の攪乱坑から小判形と推定される土版が出土した。上端に二個一対の焼成前穿孔がみられる。その下に径２㎜ほどの刺突が並び、さらに細線が中軸線上に施され、その左右に横線８～10条が認められる。

c　耳　飾　り（第10図４、５、６）

K区遺物包含層から出土した。第10図４・５は茸形、６は椎骨形耳飾りである。５・６には朱の残存がみとめられる。これらは、縄文時代晩期中頃から後半の東北地方で一般的な耳飾りである。

d　不明土製品（第10図２、７）

外面に細い工字文が施された土製品（第10図２）がＣ区ピット３から出土した。裏面には接合痕がみられ、大型中空土偶破片の可能性がある。

半球状を呈する土製品（第10図７）はK区ピット191から出土し、縄文時代晩期から弥生時代前期に属する可能性が高い。本体は大きく欠損しており、文様などの装飾はみられず、全面を丁寧にナデで調整している。（鈴木）

3）石器・石製品

Ｅ～Ｊ区の６～10層、K区の７、８層の遺物包含層および遺構から出土した石器、石製品のうち加工の明確なもの100点について属性を抽出し検討を行った。

石　　鏃（第13図版１～25）

石鏃は33点出土し、有茎鏃が30点、無茎鏃が３点（第13図版19、23、24）みられる。左右対称で入念な剥離が施されたものが多い。有茎鏃の形態は多様で、長さ15㎜から40㎜前後、重量0.3ｇから2.4ｇと幅がある。石材は鉄石英が多く、他に頁岩、黒曜石などがみられる。18の関（まち）部に着柄の痕跡である微量のピッチがみられる。使用の際に生じたと考えられる基部・先端部の折れや衝撃剥離痕は、36点中14点に認められる。

石　　錐（第13図版26、29）

明確なつまみをつくり出したもの（第13図版26、29）が３点、つまみのないものが１点出土している。剥片の一端を加工して錐部を作り出し、つまみにはわずかに二次加工が施されている。石材は頁岩・凝灰岩・鉄石英である。29の先端はかるく摩滅している。

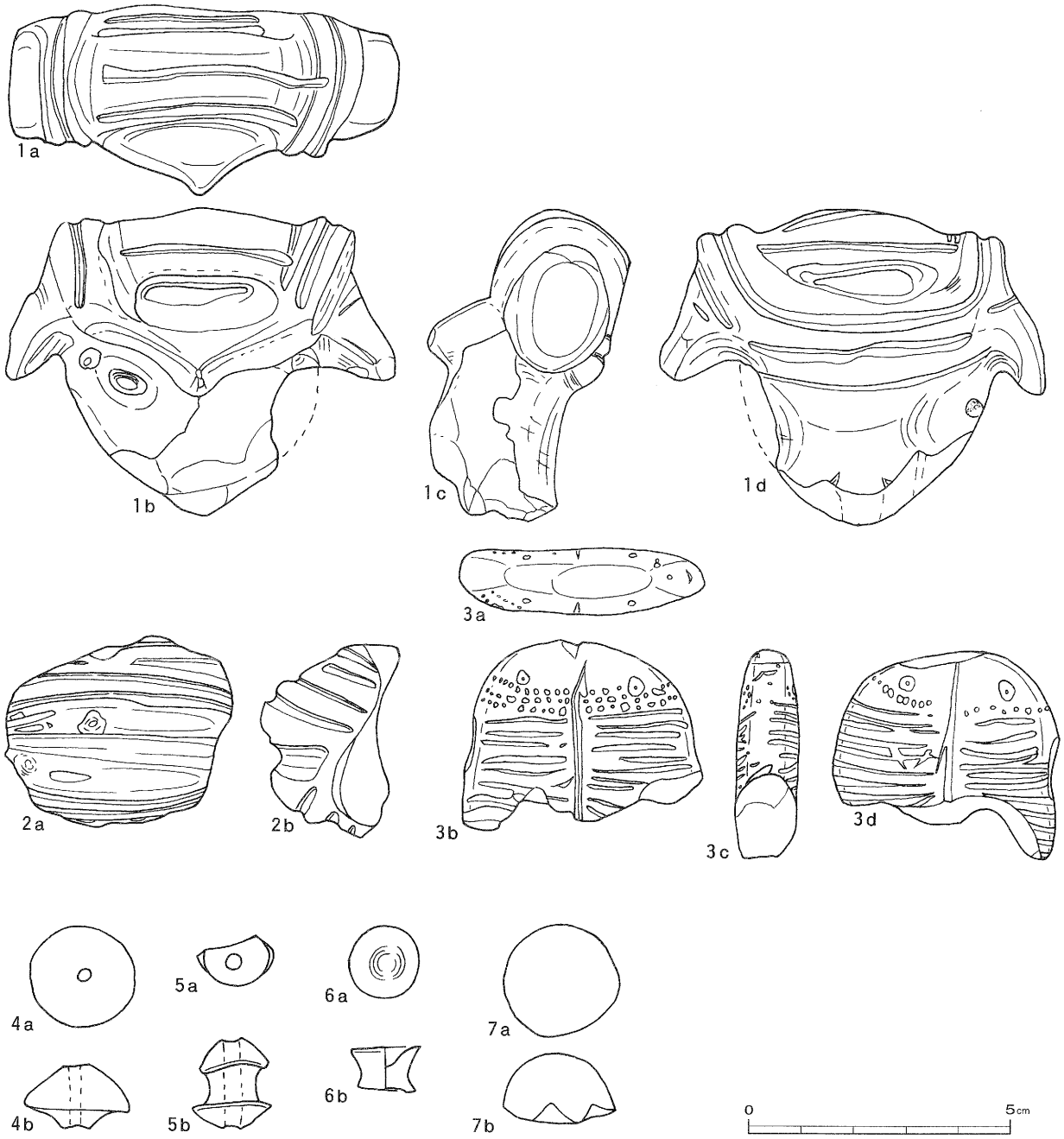


図 No.	出土地点	層　位	遺　構	時　期	種　別	計測値（cm）	重さ（g）	付着物	備　　考	写真 No.
1	K	遺構確認面		晩期Ⅴ期	土　偶	高さ　5.6 幅　7.3 厚さ　3.4	84.4	朱	中実の結髪土偶　結髪は側頭部から頭頂にかけてブリッジ状　顔はやや上向き　目のくぼみは篦による押圧　鼻と眉は隆帯貼付　耳に貫通孔　左顔面は欠損	8－1
2	C		ピット３	晩期Ⅴ期	不　明	高さ　3.9 幅　3.9 厚さ　1.9	26.3	無	大型中空土偶腰部の可能性あり　細い隆帯による匹字状工字文　風化が激しい　粘土紐接合痕あり	8－6
3	K		撹乱坑	晩期Ⅴ期	土　版	高さ　3.2 幅　4.3 厚さ　1.3	18.3	無	小判形土版　半分欠損　上端に２つの貫通孔あり　刺突列，細線による縦中心線，横線あり	8－7
4	K	包含層		晩期Ⅴ期	耳　栓	高さ　1.6 幅　2.0	2.7	無	茸形耳飾り　基部と軸部を欠く　中心に貫通孔　ナデ調整	8－2
5	K	包含層		晩期Ⅴ期	耳　栓	高さ　1.6 最大径　1.4	1.2	朱	茸形耳飾り　半面欠損　中心に貫通孔　ナデ調整	8－5
6	K	包含層		晩期Ⅴ期	耳　栓	高さ　0.8 最大径　1.3	0.9	朱	椎骨形耳飾り　下部は破損　ナデ調整 調整	8－4
7	K		ピット191	晩期Ⅴ期	不　明	径　2.2	3.8	無	半分を欠損する　ナデ仕上げ　装飾はみられない	8－2

第10図　山王囲遺跡出土土製品

Clay object from the Sanno-gakoi site

石　　匙（第13図版27）

この石匙は頁岩製で、わずかな加工が施されているが明確ではない。縁辺には微小剥離痕が観察され、刃部として用いられたと推定される。つまみを作り出すために27b面右側縁に樋状の剥離が加えられている。

楕円形両面加工石器（第13図版28）

この石器は頁岩製で、比較的厚い剥片を素材としている。先端部には微小剥離あるいは調整痕がみられ、刃部が形成されたと考えられる。

石　　刀（第13図版30、第14図版31）

第13図版30は粘板岩製で、両端を破損している。敲打後研磨によって一側縁は鋭角に刃部が作り出され、他の側縁は丸く整形されている。刃部には整形の際の敲打痕が集中している。第14図版31も粘板岩製で、両端を破損している。整形の際の敲打痕をほとんど残さず、丁寧に研磨され両側面は平坦に作り出されている。

独　鈷　石（第14図版32）

粘板岩製で、両端を破損している。中央の隆帯は丸みを帯び、周辺に整形の際の敲打痕と擦痕が観察される。

磨 製 石 斧（第14図版33～35）

第14図版33は蛇紋岩製の小型石斧である。刃部には摩滅や刃こぼれがみられ、刃部に垂直方向の明瞭な擦痕が観察され使用痕と考えられる。34は凝灰質砂質頁岩製で、刃部を欠損している。破損面には敲打痕が集中しており、敲石に転用されたと考えられる。35は砂質凝灰岩製の蛤刃石斧とみられる。刃部には刃こぼれが観察される。34、35ともに整形時の敲打痕を多く残している。

打 製 石 斧（第14図版36、第15図版37）

第14図版36は頁岩製で、片面加工である。第15図版37はやや小型で撥形を呈し、石英安山岩製である。刃部にはわずかに摩滅がみられる。

円盤状石製品（第15図版38、39）

第15図版38は砂質頁岩製である。周縁は両面から剥離され、刃部は刃角70°前後に作り出される。縁辺には不明瞭な敲打痕がある。39は石英安山岩製である。周縁は両面から加工されており、部分的に90°を超す剥離がなされている。

石　　錘（第15図版40）

石英安山岩製で短軸方向に対称に剥離による抉りを有する。

磨　　石（第15図版41）

ひろい磨面が認められる石器を磨石と分類した。

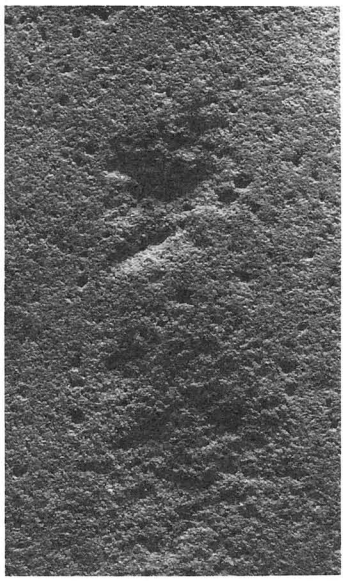
41は石英安山岩を素材とし、台形に近い形態で、ｅ面に磨面が認められる。他にａ面にもｅ面より弱い磨面が確認できる。この磨石はａ、ｃ、ｄ、ｅ面に敲打痕が確認され、特にａ、ｃ、ｅ面に、局部的に敲打が集中する（第11図：敲打痕）。ｄ面の敲打痕は頂部にほぼ円形の平坦面を形成している点で、ａ、ｃ、ｅ面と異なる。

敲　　石（第15図版43）

礫の先端部などに敲打を残すものや、凹石とは異なり、敲打の位置が一定しないものを敲石と分類した。この敲石は石英安山岩を素材とする。長楕円形の礫の両端に敲打痕が顕著である。

凹　　石（第15図版42、44、45、第16図版46～49）

礫の中央部に集中して敲打が加えられたものを凹石と分類した。第15図版42は長楕円形を呈する。ａ、ｃ面には２カ所ずつ敲打痕の集中が認められる。それぞれの凹みのひろがりと深さの程度は異なる。第15図版44は、ほぼ円形であり、ａ、ｃ、ｄ面に凹みが認められる。さらにａ面には磨面が形成され、不明瞭であるが線条痕が観察される。ｃ面には敲打痕の集中と、横断面がＶ字状の細長い凹みが複合している。第15図版45、第16図版46、47 は、楕円形であり、両面に敲打痕の集中が認められる。第16図版48、49は大型品であり、凹みは石器の中央部付近に認められる。自然礫を用い、整形のための調整は施されていない。図示された凹石はすべて石英安山岩製である。



第11図　敲打痕
（径２～５㎜の敲打痕が集中する）
Pecked mark

石　　皿（第16図版50、第17図版52）

比較的大型の礫を素材とし、ひろい磨面をもつものを石皿と分類した。第16図版50は比較的緻密な安山岩を素材としている。長楕円形の自然礫の平坦面を磨面としている。一部に長軸に平行する線条痕が認められる。裏面は中央部に一カ所発達の弱い敲打痕が認められる。第17図版52は多孔質の石英安山岩質凝灰岩を素材とし、ほぼ円形に加工されている。磨面には不明瞭であるが線条痕がみられる。約３分の１が破損し、一部が火を受けて赤褐色に変色している。

線　刻　礫（第16図版51）

扁平な石英安山岩を素材としている。線刻は表裏に施されており、横方向に数本単位で幅0.1～0.2㎜の細い線刻が施された後、縦方向に幅0.3～0.5㎜の線刻がなされる。

石　　核（第17図版53～57）

第17図版53は珪化凝灰岩で、主要作業面はａ面である。打面を固定して数回の剥離を行っている。54、56は鉄石英が素材である。54は自然面を多く残している。56は比較的良質の鉄石英を素材とし、同一面から数回の剥離がなされ、打面転移が頻繁に行われている。57は、周縁から剥離が行われ、円形を呈している。さらにその作業面を打面とし、剥離を行っている。石材はいずれも今回の調査で出土した剥片石器と共通しており、遺跡内でそれらが製作されたことを示唆している。

（玉橋、高橋、池谷）

第5章　結　　語

本年度の調査は、山王囲遺跡の立地する広々とした自然堤防上に縄文時代の集落がどのように営まれていたのか、遺跡の構造を明らかにすることが主要な調査目的であった。ことに縄文時代の人々の生活域、居住域がどのようにひろがっていたのか、居住域を構成する竪穴住居はどのような構造と規模をもっていたのか、膨大な遺物を出土する包含層がどのようにひろがるのか、さらに、死者を葬る墓域がどこに営まれたのか、その墓域はどのような構造をもつのかといった点を明らかにし、晩期集落の構造と規模を把握することにつとめた。また、集落を取り囲む泥炭層の範囲と、それを保護している地下水の状況についても発掘調査によって可能なかぎり情報を確保することを目指した。そのため、東西長200m、幅150mを超す自然堤防上に1550㎡に達する調査区を設定し、遺構と包含層の検出を進めた。

2カ月間の調査で、晩期縄文時代の集落を構成する竪穴住居跡群、それを覆う包含層のひろがりが確認された。さらに、弥生時代の竪穴住居跡群、土器埋設土壙群、配石遺構、古墳時代の土器埋設土壙、古代の竪穴住居跡など多数の遺構が明らかになった。

第一次調査の最も重要な成果は、微高地のほぼ中央に設定したK区で検出された多数の柱穴群である。この遺構群を検討した結果、第5、6、7号竪穴住居跡の3棟の住居跡の存在が明らかにされた。第5号竪穴住居跡は、5カ所の柱穴が弧状に並び、直径6m前後の円形に主柱穴のめぐる竪穴住居と推定された。中央に焼けた石皿1点と炉跡とみられる焼土のひろがりが認められた。第6号竪穴住居跡は9カ所の柱穴が環状にめぐり、径6m程の円形に主柱穴がめぐる竪穴住居の存在が推定された。

また、K区の東北隅で、1958年に調査された狩野文朔氏の発掘区と、住居跡の壁とみられる遺構が検出された。この遺構を第7号竪穴住居跡とした。これらの住居以外に多数のピットが検出され、それを覆う包含層からは、晩期中葉から後半の縄文土器、石器が出土した。このように、微高地のほぼ中央に晩期縄文集落が営まれていたことが確認された。この居住域、生活域がどのようにひろがっているのか、また、集落がどのような推移をたどったのか、集落の構造とその変遷の解明が今後の課題である。

また、K区とD区から縄文時代の陥穴が5基発見された。これらの遺構は、大規模な集落が営まれる以前にこの自然堤防が利用されていた状況を知る手掛かりとなった。

今回の重要な調査成果のひとつに、F区における弥生時代の竪穴住居跡の発見がある。第2、3号竪穴住居跡は、第5～7号竪穴住居跡から約50m程北にあり、弥生時代になると、晩期縄文時代の居住域からやや北西に移動し、自然堤防の微高地の北西縁辺で人々の生活がくりひろげられたことが明らかになった。

第2号竪穴住居跡は、径約6m、不整円形で4本柱、中央に地床炉（F1）1基をもつ。柱穴は3カ所（P1～3）が確認されている。いずれも焼土を含んでおり、焼失後に柱を移し、ほぼ同規模（P4～6）で建て替えている。さらに、後に規模を拡大して径9m程の不整楕円形の大型住居に建て替えている。この第3号竪穴住居跡は6本柱で5カ所の柱穴（P7～11）が確認されている。炉跡1基（F2）、壁溝が1ないし2条めぐる。この大型住居跡も改修1回が認められる。第2、3号竪穴住居跡の床面から弥生時代前期後半の山王Ⅲ層式土器が出土して

おり、住居が営まれた時期は前期後半である。この住居の下層に第4号竪穴住居跡が検出されている。地床炉1基と2カ所の柱穴が検出され、壁の立ち上がりが確認されている。この柱穴から晩期終末から弥生時代Ⅰ期の土器が出土している。今後、このF・H区付近において晩期終末から弥生時代前期の竪穴住居跡が他にも検出されると予想される。また、弥生時代住居域の西側のG区では、土器埋設土壙4基、配石遺構1基が発見されている。いずれも山王Ⅲ層式土器が出土している。弥生時代の墓域がこの地域にひろがっている可能性が高い。

第3の成果として、泥炭層が自然堤防の北西に広範囲にひろがっていることが確認された。泥炭層の最上層で山王Ⅲ層式の土器片が検出されており、弥生時代の動植物遺存体が包含されている可能性が高く、今後の精査が必要である。

昭和40年度の調査区から、今回の調査区まで150m程の距離があり、縄文時代、弥生時代の生活域は、東西約150m、南北80mおよび、さらに、弥生時代の墓域の存在も認められ、大規模な集落であったことが明らかになった。今回確認された弥生土器は、前期から中期中葉、後半、そして後期におよび、集落が晩期から弥生時代後期まで長期にわたって存続したことが明確になった。

さらに、微高地東南部のA・B・C区では古墳時代のピット9に5点の土師器が一括で埋設され、注目された。A区西南部では7世紀後半から8世紀初頭の竪穴住居跡が1棟検出され、この遺跡が縄文時代から古代まで断続的ではあるが、長期にわたって利用され続けた複合遺跡であることが明らかになった。

遺物では、縄文時代晩期Ⅳ期の大洞C2式土器、晩期Ⅴ期の大洞A式土器、Ⅵ期の土器（大洞A′式相当）がK区で多数出土している。また、弥生土器は、山王Ⅲ層式が豊富に出土するが、桝形囲式、岩出山町境ノ目A遺跡出土土器群と共通する中期後半の土器群、天王山式土器などが確認されている。また、石器や、土偶、土版などの土製品が多数共伴した。これらの資料によって縄文時代終末から弥生時代にかけての物質文化の変遷がよく理解できるようになった。とくに土偶については、晩期終末から前期弥生時代の山王Ⅲ層式期への形態変遷が明らかとなった。その変遷は、きわめて漸移的である。

このように多くの貴重な成果が得られた。①縄文時代晩期の居住域と生活域が自然堤防のほぼ中央にあり、多数の遺構が確認され、②微高地の北西側縁辺で弥生時代の竪穴住居群と墓域が隣接して営まれ、③古墳時代、古代の遺構が南東部で検出されており、各時代の複合遺跡であることが確認された。とくに弥生時代については、山王Ⅲ層式期の包含層が予想以上にひろく分布し、また、中期中葉の桝形囲式、後半の土器群、後期の土器も発見され、きわめて長い期間、集落が存続したことが明らかになった。このような成果から、山王囲遺跡はこの地域の基幹集落であったということがあらためて確認された。

今後の課題として、①縄文時代の住居域の範囲をより具体的に捉える。②縄文時代晩期の竪穴住居の構造を明確にする。③縄文時代の墓域の位置を明らかにする。④弥生時代の集落構造、住居構造を明らかにする。⑤弥生時代墓域構造を解明する、ことなどが必要である。とくに1965年調査の包含層と今年度調査区との間の未調査区を中心に、確認調査を進める必要がある。さらに、泥炭層調査の予備的調査が必要といえる。

なお、本年度のⅠ区調査で、泥炭層とそれを覆う灰白色シルトの洪水層、あるいは畦状の高まりが検出されたが、弥生水田とのかかわりでこの地区の精査が必要といえる。　（須藤）

引　用　文　献

一迫町教育委員会　1976　史跡山王囲遺跡保存管理計画書（一迫町教育委員会）
伊東信雄、須藤　隆　1982　瀬野遺跡（東北考古学会）
伊東信雄、須藤　隆　1985　山王囲遺跡調査図録（宮城県一迫町教育委員会）
岩手県立博物館　1982　岩手の土器 県内出土資料の集成（岩手県立博物館）
梅宮　茂他 1986　霊山根古屋遺跡の研究－福島県霊山町根古屋における再葬墓群
遠藤勝博　1981　二戸市上田面遺跡 大渕遺跡 火行塚遺跡（岩手県埋蔵文化財センター）
太田昭夫他 1982　宮城県岩出山町境ノ目Ａ遺跡の出土遺物 籾 4 pp.11-60
小川淳一　1980　塩沢北遺跡 東北自動車道遺跡調査報告書 Ⅲ 宮城県文化財調査報告書第69集 pp.277-347
小田野哲憲、高橋義介　1991　上村貝塚発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書158集
加藤道男　1982　青木畑遺跡 宮城県文化財調査報告書第85集（宮城県教育委員会）
加藤道男　1989　宮城県における土師器研究の現状 考古学論叢 Ⅱ（芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会）pp.277-329
堅田　直　1965　岸和田市春木八幡山遺跡の研究 帝塚山大学考古学研究室報告第１輯（帝塚山大学考古学研究室）
狩野義章　1959　宮城県栗原郡一迫町山王遺跡調査　一迫町古代史第三輯
木村剛朗　1970　縄文時代石器における機能上の実験(1),(2) 考古学ジャーナル43 pp.23-26, 50 pp.22-24
木村剛朗　1971　縄文時代石器における機能上の実験(3) 考古学ジャーナル54 pp.22-23
興野義一　1965　宮城県山王遺跡出土の弥生式土器について 日本考古学協会第31回総会 研究発表要旨 pp.７-８
興野義一　1976a　第二編 考古学からみた高清水 高清水町史 pp.69-100
興野義一　1976b　第二篇・第一章 原始期 一迫町史 pp.45-100
桐生正一他 1986　湯舟沢遺跡 滝沢村文化財調査報告書 第２集
工藤利幸他 1986　馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書 岩手県文化事業団埋蔵文化財調査報告集第99集
小井川和夫他 1982　御駒堂遺跡 東北自動車道遺跡調査報告書 Ⅵ 宮城県文化財調査報告書 第83集 pp.307-589
児玉　準他 1984　横長根Ａ遺跡（若美町教育委員会）
佐藤信行他 1978　上ノ原Ａ遺跡－弥生後期の住居跡－ 宮城県一迫町文化財調査報告書第３集（一迫町教育委員会）
佐藤信行　1984　宝領遺跡 宮城県一迫町文化財調査報告書第４集（一迫町教育委員会）
白鳥良一　1980　多賀城跡出土土器の変遷 研究紀要 Ⅶ pp.1-40（宮城県多賀城跡調査研究所）
菅原俊行、安田忠市　1986　地蔵田Ｂ遺跡 秋田市新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 pp.11-261
須藤　隆　1976　亀ヶ岡文化の終末と東北地方における初期弥生土器の成立 考古学研究 23-2 pp.25-50
須藤　隆　1983　東北地方の初期弥生土器－山王Ⅲ層式－ 考古学雑誌 68-3 pp.1-53
須藤　隆　1984　東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開 宮城の研究１ 考古学篇 pp.238-303（清文堂出版）
須藤　隆　1986　弥生時代・続縄文時代 図説発掘が語る日本史 1 北海道・東北編 pp.113-148
須藤　隆　1987　東日本における弥生文化の受容 考古学雑誌 73-1 pp.1-42
須藤　隆　1990　東北地方における弥生文化 考古学・古代史論巧 pp.243-322（伊東信雄先生追悼論文集刊行会）
須藤　隆　1996　亀ヶ岡文化の発展と地域性 日本文化研究所研究報告別巻第33集 pp.93-132
須藤　隆編 1984　福島県会津若松市墓料遺跡（会津若松市教育委員会）
須藤　隆編 1995　縄文時代晩期貝塚の研究２ 中沢目貝塚Ⅱ（東北大学文学部考古学研究会）
芹沢長介　1996　旧石器時代研究の回顧 考古学ジャーナル 400号 pp.8-13
芹沢長介編 1979　聖山 北海道亀田郡七飯町峠下縄文時代遺跡出土資料（東北大学文学部考古学研究会）
田中則和、主浜光郎　1984　山口遺跡Ⅱ 仙台市文化財調査報告書第61集（仙台市教育委員会）
手塚　均　1980　山ノ上遺跡 東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ 宮城県文化財調査報告書第69集 pp.461-499（宮城県教育委員会、日本道路公団）
東京帝国大学　1928　日本石器時代遺物発見地名表 p.83
野村　崇　1983　石剣・石刀　縄文文化の研究 9 pp.181-196（雄山閣）
芳賀英一、小暮伸之　1994　六郎次遺跡・塩喰岩陰遺跡 東北横断自動車道遺跡調査報告25（福島県教育委員会）
花山村史編纂委員会　1978　花山村史 第二編・第一章 原始、古代 pp.47-72
古川一明　1987　色麻古墳群の再検討 北奥古代文化 第18号 pp.25-31
町田　洋、新井　房夫、森脇　広　1981　日本海を渡ってきたテフラ 科学 51 pp.562-569
町田勝則　1993　第３章第３節(2) 石器 北村遺跡 長野県中央道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 11 pp.187-215（長野県埋蔵文化財センター）
御堂島正　1991　石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離 古代 92 pp.79-96
宮 城 県　1991　土地分類基本調査 岩ヶ崎（宮城県企画部土地対策課）
宮城県、一迫町、基礎地盤コンサルタンツ株式会社　1992　平成４年度 一迫小学校建設工事に伴う地質調査委託報告書
宮城県教育委員会　1993　宮城県遺跡地図 宮城県文化財調査報告書第152集（宮城県教育委員会）
宮城県教育委員会文化財保護課　1977　巻堀遺跡（一迫町教育委員会）
明治大学考古学博物館　1991　明治大学考古学博物館蔵品図録２ 縄文晩期の世界 pp.86,87
柳沢和明他 1991　摺萩遺跡 宮城県文化財調査報告書第132集（宮城県教育委員会、宮城県土木部水資源開発課）
山本暉久　1983　石棒 縄文文化の研究 9 pp.170-180（雄山閣）

附章　山王囲遺跡における古環境変遷

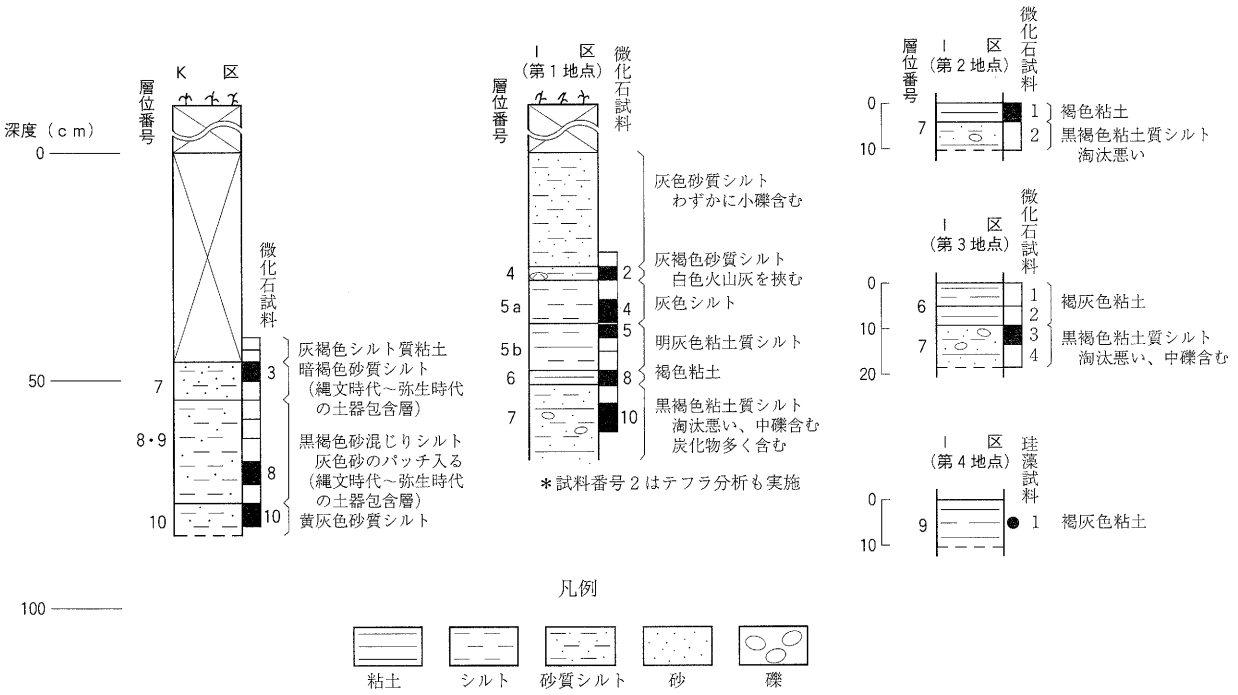
パリノ・サーヴェイ株式会社

は　じ　め　に

本報告では、縄文時代晩期から弥生時代前期の古植生復元、本遺跡における稲作の消長および弥生時代前期末葉から中期初頭の稲作の検証、弥生時代前期末葉に構築された竪穴住居跡の構築年代を確認することを目的として、テフラ分析・^{14}C年代測定・珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を行い、その結果に基づいて分析目的に対する解析を行う。

第1節　分　析　試　料

珪藻・花粉・植物珪酸体の各分析では、前述した分析目的を考慮して、K区とＩ区から採取した土壌を選択した（第12図）。また、Ｆ区で確認された弥生時代前期末葉から中期初頭の竪穴住居跡から検出された炭化材の^{14}C年代測定を行う。



第12図　K区・Ｉ区（第１地点～第４地点）試料採取模式柱状図
図中の●あるいは■は分析に用いた試料である。

第2節　分　析　方　法

各分析方法については、一迫町教育委員会が保管する「平成7年度山王囲遺跡　自然科学分析報告」を参照されたい。^{14}C年代測定は学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。

第3節　縄文時代晩期から弥生時代前期の古環境変遷

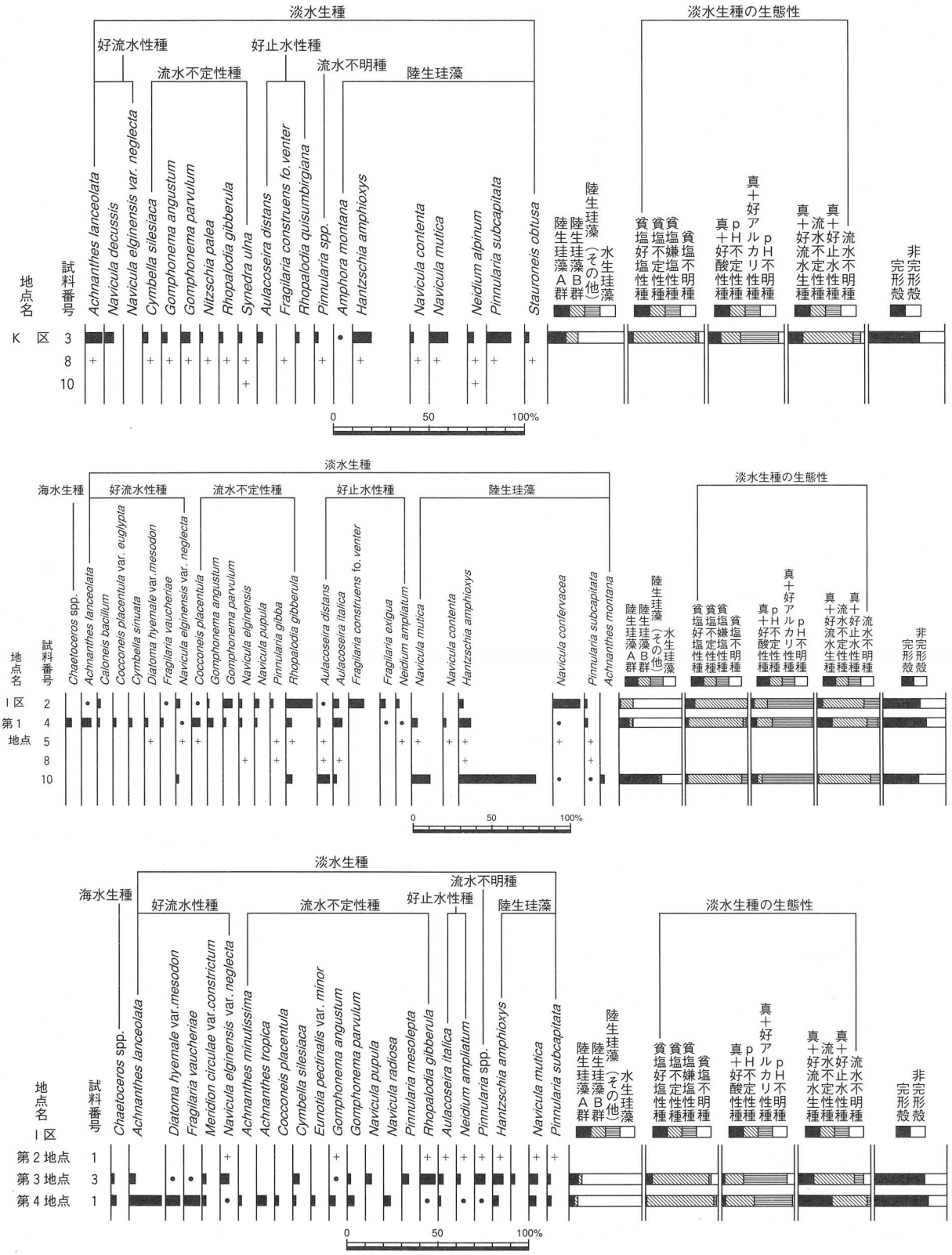
1）　堆積環境について

K区の縄文時代晩期から弥生時代前期の砂質シルト層（試料番号3）からは陸生珪藻を主体として好流水性種と好止水性種を伴う珪藻化石群集が認められた（第13図）。このように好流水性種と好止水性種、水生珪藻と陸生珪藻など相反する生態性を示す種群が同一に産出する場合は混合群集と考えられる。この特徴として最も重要な要素は流水に対する適応性で相反する種群（好流水性種と好止水性種）が認められることで、次に産出した分類群の数が多いことやそれぞれの種の産出率がいずれも高くないこと等が挙げられる。本試料の場合、陸生珪藻が特徴的に認められることから、基本的には乾いた場所であったと思われるが、周囲から氾濫などによる流れ込みの影響を少なからず受けているものと考えられる。

I区第1地点では各層によって珪藻化石群集の組成が異なっていることから、各層位毎に群集の特徴と推定される水域環境を述べる（第13図）。最下位の礫混じり黒褐色粘土質シルト層では陸生珪藻が多産し、その占める割合は全体の68％であり、乾いた場所を指標とするA群に属する種群が90％以上を占めている。したがって、本層の堆積時は乾いた裸地のような環境であり、水の影響を受けにくかったと推定される。試料番号8と試料番号5からは珪藻化石の産出率が低いが、産出した種をみると陸生珪藻が卓越することから、乾いた環境であった可能性がある。試料番号4は好流水性種と好止水性種が共にある程度の産出率を示し、個々の種の産出率が全体にばらついていることから典型的な混合群集とみられる。ただし、本試料の場合、好止水性種および陸生珪藻など比較的静穏な環境下に生育する種群が多い。したがって、本層堆積時は乾いた場所も多く存在する湿地から沼沢地のような環境であったと思われるが、河川等からの水の流れ込みの影響も大きいものと推定される。上位の4層はテフラ分析の結果、A.D.915年に十和田カルデラより噴出したTo-aを小ブロック状に含むことから、A.D.915年以降の堆積層と考えられる。この層位の特徴は好止水性種および好塩性種が卓越する点である。したがって、本層準堆積時は沼沢地から湿地のような環境であったが、水の出入りが少ない停滞水域であり、水中の塩類濃度が高くなる状況であった可能性が高い。本地点の弥生時代前期末葉から中期初頭の水田層とされる褐灰色粘土層からは珪藻化石の産出率が低く、種毎の産出率もばらつくが、ほとんどは流水不定性種、好止水性種および陸生珪藻からなる。

以上のことから、本地点は基本的に湿地のような環境であったと推定されるが、乾いた場所も多く存在するような場所であった可能性がある。なお、産出率が低いのは一般的には堆積時に好気的環境下であったために、殻の分解が促進されたためと考えられている。

第3地点の畝を形成する土壌では、産出した種の生態性別にみた種構成と個々の種の産出率が全体にばらついている（第13図）。このような種群の特徴も典型的な混合群集である。本地点の場合、陸生珪藻に加えて好止水性



第13図　K区・I区（第1地点～第4地点）主要珪藻化石群集の変遷

各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として相対頻度で表した。いずれも化石総数が100個体以上検出された試料について示す。なお、● は1％未満は、＋ は産出個体数100個体未満の試料における産出を示す。

の種がやや卓越することから、好気的な部分の多い湿地～沼沢地のような環境であったと考えられるが、周囲から水の流れ込みの影響も大きい場所であったと推定される。

第4地点の試料は水田に伴う水路と推測されている遺構の埋積物であるが、好流水性種が多産することが特徴である（第13図）。流水性種を除けば他の種群は流水不定性種を主として陸生珪藻等も含むやや混合型の群集といえる。多産した好流水性種は *Achnanthes lanceolata* と *Meridion circulae var.constrictum* 等の中～下流性河川指標種群（安藤 1990）に属する種群である。中～下流性河川指標種群とは、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などの地形が見られる部分に集中して出現し、他の地域には出現しなかったり、出現しても主要でないことから、この地域の環境を指標する可能性が大きい種群とされる（安藤 1990）。これらのことから遺構埋積物は流水の影響によって堆積した可能性が高い。

表1　花粉分析結果

種　類	地点	K区			I区 第1地点					I区 第2地点	I区 第3地点
	試料番号	3	8	10	2	4	5	8	10	1	3
木本花粉											
モミ属		-	-	-	-	-	-	4	-	1	-
ツガ属		-	-	-	-	-	6	10	-	7	2
トウヒ属		-	-	-	-	1	1	6	-	1	-
マツ属		1	-	-	-	2	4	7	-	2	-
スギ属		-	-	-	1	-	-	2	-	1	-
クマシデ属－アサダ属		-	1	-	2	-	-	2	-	1	-
カバノキ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属		-	-	-	1	2	-	-	-	1	-
ブナ属		-	-	-	2	3	3	5	1	4	-
コナラ属コナラ亜属		-	-	-	4	2	-	2	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
シナノキ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ツツジ科		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
草本花粉											
イネ科		-	-	-	3	9	3	-	-	2	2
カヤツリグサ科		-	-	-	6	2	-	-	-	2	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ナデシコ科		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
オナモミ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タンポポ亜科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明花粉											
不明花粉		1	1	-	5	3	2	8	8	5	-
シダ類胞子											
シダ類胞子		5	-	-	51	173	61	16	1	25	26
合　計											
木本花粉		1	2	1	10	10	15	39	1	18	2
草本花粉		1	0	0	9	12	3	0	0	4	4
不明花粉		1	1	0	5	3	2	8	8	5	0
シダ類胞子		5	0	0	51	173	61	16	1	25	26
総計（不明をのぞく）		7	2	1	70	195	79	55	2	47	32

2）古植生について

縄文時代晩期から弥生時代前期の試料では花粉化石がほとんど検出されなかったため、この時期の古植生に関する資料を得ることはできなかった（第1表）。そこでI区第1地点の弥生時代前期末から中期初頭の水田層と推測されている層位からTo-a降灰層位で得られた花粉化石の種類について、本遺跡周辺地域の潜在自然植生との比較・検討を行う。

潜在自然植生では低地部はオニスゲ－ハンノキ群集のような湿地林の分布域である（宮脇他 1987）。また、平野から標高300m内外の丘陵地帯は、暖温帯性の落葉広葉樹と冷温帯性の落葉広葉樹の推移帯にあたり、いわゆる中間温帯林としてのモミ・イヌブナ群集ほかが分布する。さらに上流の山地帯では、ブナに代表される冷温帯性落葉広葉樹林が分布する。今回検出された花粉化石の多くは、中間温帯林または冷温帯性落葉広葉樹林の構成要素であり、丘陵地帯から山地帯の潜在自然植生と調和的である。本遺跡は河川沿いに発達した谷状の沖積低地であるため、得られた花粉化石は後背地の植生を反映しているものと思われる。一方、現存自然植生調査の結果

（宮脇、奥田 1987）では、遺跡の立地する低地部は開発が進んで、ウリカワーコナギ群集やサジオモダカ群集といった水田雑草群落に変化しており、ハンノキ林は山野との縁辺部にわずかに残るのみである。辻ら（1983）は千葉県の村田川流域における研究で、イネ出現開始とほぼ同時か多少遅れてハンノキ属の花粉が急減する傾向について、低湿地利用のための人間による湿地林の破壊を示唆するとしている。

今回は統計的に扱えるだけの花粉化石が得られなかったため、出現率の変化から本遺跡周辺の森林植生変遷を捉えることはできなかった。今後の低地部の調査において、花粉化石の保存の良好な試料が得られれば、本遺跡周辺地域の人間活動とそれによる植生変化について明らかにすることができると期待される。一方、本遺跡周辺のイネ科植生については、縄文時代晩期および弥生時代前期よりTo-a降灰層位までイネ属の産状を除いて大きな組成の違いは認められず、タケ亜科やウシクサ族・ヨシ属などのイネ科植物が生育していたのであろう。しかし、堆積物が氾濫堆積物と考えられることから、これら植物珪酸体は二次的に混入した可能性がある。

第4節　稲作の消長について

K区の縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物包含層中からは僅かながらイネ属の植物珪酸体が検出された（第14図）。また、Ⅰ区第1地点のTo-aを含む層位からはイネ属が高率に検出される。さらに弥生時代前期末から中期前半の水田層と推測されている粘土層や畝を形成する土壌中からも僅かに検出される（第14図）。

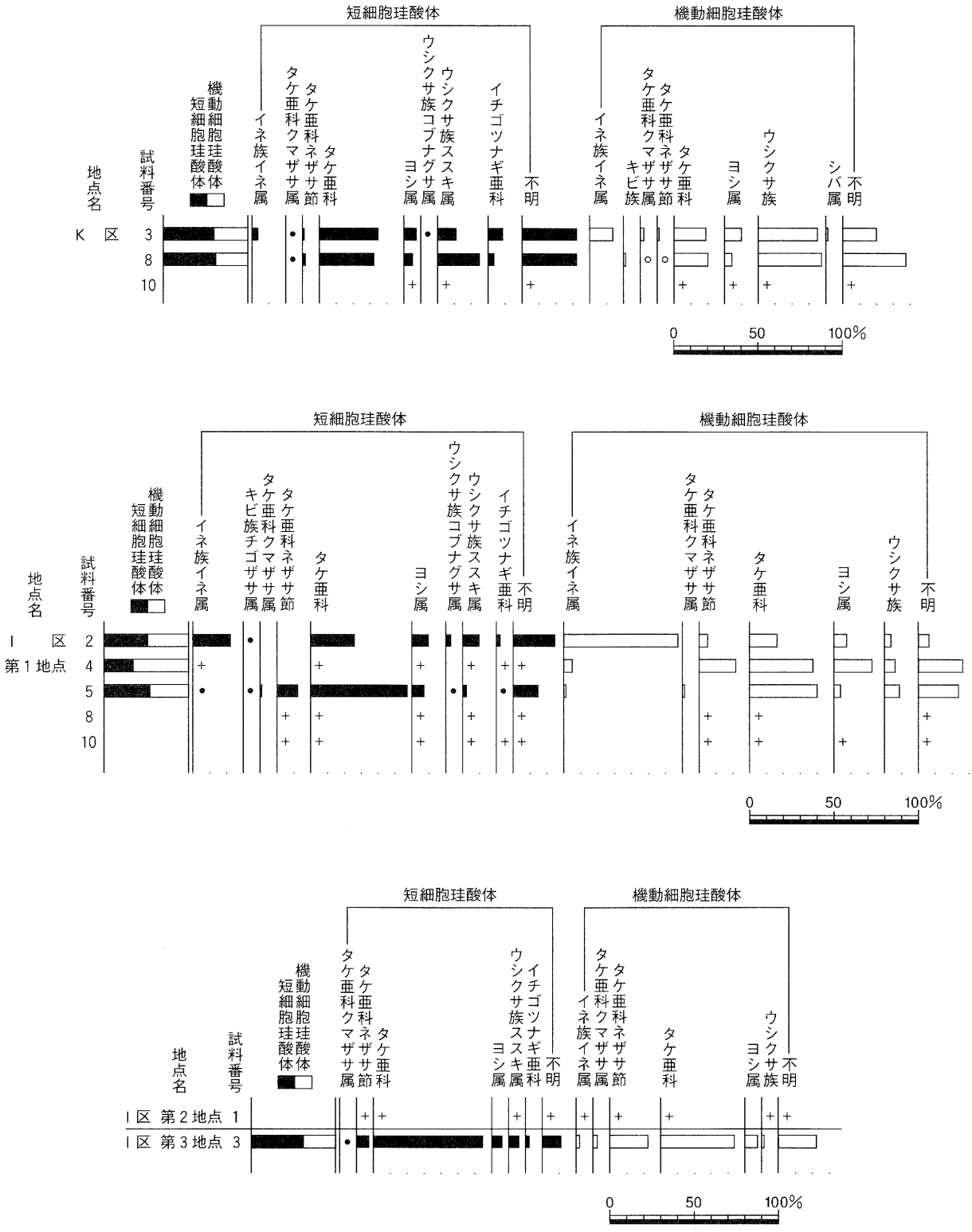
珪藻化石の産状から、K区の縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物包含層は氾濫堆積物と判断され、縄文時代晩期から弥生時代前期の層位に含まれるイネ属は他の場所から二次的に混入した可能性があり、本地点で当時稲作が行われていたと判断することは難しい。

Ⅰ区第1地点ではTo-aを挟む灰褐色砂質シルトでイネ属が多産した。とくに機動細胞珪酸体の出現率は60％を越え、現在の水田耕土（イナワラ堆肥を500kg／10ａ／年の割合で8年間連用）の表層ではイネ属機動細胞珪酸体の出現率が16％を示す調査例（近藤 1988）と比較しても著しく高い。本層は珪藻化石の産状から停滞水域と推測され、氾濫などによる攪乱の影響は考えにくい。この堆積環境を考慮すれば、本層堆積時には本遺跡周辺で稲作が行われていた可能性がある。ただし、本層の上位では近・現代に水田耕作が行われ、上位からの落ち込みが考えられることや発掘調査により水田遺構を示唆する畦畔などが確認されていない。そのため、今後の発掘調査所見を考慮して改めて検討しなければならない。

弥生時代前期末から中期初頭の水田跡ではないかと推測されるⅠ区第2地点・第3地点でもイネ属の植物珪酸体は検出される（第14図）。しかし、その出現率はきわめて少ないために、この地点で稲作が行われていた可能性は少ない。また、水田層とされる第2地点では珪藻化石の産状が悪いために、堆積環境を推定することは難しいが、畝部の第3地点の珪藻化石の産状より周囲からの流れ込みが考えられるため、検出されたイネ属は異地性のものなのかもしれない。この点については、さらに水田層を対象にして面的な分析調査を行って検証を続けたい。

第5節　第3号竪穴住居跡の^{14}C年代測定結果について

測定結果は1,560±120y.B.P.（A.D.390）（Gak-19073）であり、第3号竪穴住居構築時期とされる弥生時代前期末から中期初頭としては、やや新しい年代を示す。



第14図 K区・I区（第1地点～第4地点）植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1％未満の種類、＋はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞で100個未満の試料で検出された種類を示す。

第6節　総　　括

分析調査課題のひとつである縄文時代晩期頃の古植生復元については、花粉化石の保存状態が悪いために、今回は詳細に検討することができなかった。ただし、試料中にわずかながら保存される花粉化石の種類と東北地方の潜在自然植生から本遺跡周辺地域の古植生の概略は捉えることはできた。花粉化石の保存状態が悪い原因は、今回の調査区が河岸段丘上に立地し、好気的環境下で堆積したために花粉化石が保存されにくかったと考えられる。今後当該期の古植生を検討・復元するためには、花粉化石が比較的良好に保存される低地堆積物（泥炭層など）が有効であり、低地の調査が実施された際に堆積物を採取して分析調査を試みたいと考えている。

弥生時代前期末から中期初頭の稲作については、堆積物中にイネ属が検出されるものの、周囲からの混入の可能性があり、調査区内で稲作が行われていたと考えることは難しい。なお、今回はトレンチ調査による限られた範囲での結果である。今後の発掘調査で広い範囲で面的に遺構の検出状態を明らかにした上で同様の分析調査を応用し、改めて稲作について考えていきたい。また、To-a降灰層位からはイネ属が高率に検出されたが、発掘調査では畦畔などが検出されていない。この点は層相の検討結果を考慮して評価する必要があり、今後の課題である。

参　考　文　献

安藤一男　1990　淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用
東北地理 Vol.42 pp.73-88 （aNN. Tohoku Geogr. Assoc.）

近藤錬三　1988　十二遺跡の植物珪酸体分析
鋳師屋遺跡群十二遺跡－長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書
pp.377-383 （御代田町教育委員会）

町田　洋、新井房夫　1992　火山灰アトラス p276 （東京大学出版会）

宮脇　昭、藤原一絵、中村幸人、大野啓一、村上雄秀、鈴木伸一　1987　東北地方の潜在自然植生図
日本植生誌　東北 （至文堂）

宮脇　昭、奥田重俊　1987　東北地方の現存植生図 日本植生誌　東北 （至文堂）

辻誠一郎、南木睦彦、小池裕子　1983　縄文時代以降の植生変化と農耕－村田川流域を例として－
第四紀研究 22 pp.251-266

付表１　山王囲遺跡出土土器観察表(1)

Attribute list of pottery from the Sanno-gakoi site (1)

個体No.	出土地点	遺　構	層位	時　期	器種	口縁部の特徴	主要文様の特徴	縄文・器面調整の特徴	備　考	図版No.	写真No.
1	C-AX74	ピット３	埋　土	弥Ⅱa期	壷	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ　無文（ミガキ） Ⅲ　縄文，沈線文	沈線文・ＬＲ斜行縄文・ミガキ		4 - 1	9 -1- 1
2	C-AX74	ピット３	埋土１	弥Ⅱa期	鉢	平坦口縁・突起（Ａ突起）	Ⅰ　無文（ナデ），口唇部に沈線 Ⅲ　変形工字文Ｃ１	ナデ・沈線文，(内) ナデ		4 - 2	9 -1- 2
3	C-AX74	ピット３	埋　土	弥Ⅰ期	鉢	―	Ⅲ　変形工字文Ａ	ナデ・沈線文，(内) ナデ		4 - 3	9 -1- 3
4	C-AX74	ピット３	埋　土	晩Ⅴc期	台付浅鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅲ　無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ， (内) ヨコミガキ		4 - 4	9 -1- 4
5	C-BD75	ピット８	埋　土	晩Ⅵ期	深鉢？	平坦口縁・突起（Ａ突起）	Ⅰ　平行沈線文 Ⅱ　無文	沈線文・ナデ (内) ヨコミガキ		4 - 5	9 -1- 5
6	C-BD75	ピット８	埋　土	晩Ⅴ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅱ　無文（ミガキ）	ナデ・沈線文，(内) ナデ		4 - 6	9 -1- 6
7	C-BD75	ピット８	埋　土	晩Ⅴc期	壷	―	Ⅱ　匹字文，Ⅲ　縄文	LR縄文・沈線文・ミガキ (内) ヨコミガキ		4 - 7	9 -1- 8
8	C-BD75	ピット９	埋土３	晩Ⅴ期	壷	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅱ　無文（ミガキ）	ヨコミガキ，(内) ヨコナデ		4 - 8	9 -1- 7
9	C-BD75	ピット９	埋土３	晩Ⅴa期	甕	平坦口縁	Ⅰ　無文（ナデ），平行沈線文， 口唇部に刺突列，Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・沈線・ナデ (内) ヨコナデ	炭化物	4 - 9	9 -1- 9
10	C-BD74	ピット12	埋土４	弥Ⅱ期	鉢	平坦口縁・突起（山形突起）	Ⅰ　平行沈線文，口唇部に沈線 Ⅲ　波状文	ヨコナデ・沈線・ミガキ (内) ミガキ		4 -10	9 -2- 1
11	C-AY74	第４号溝跡	埋　土	晩Ⅵ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　ミガキ Ⅲ　平行沈線文	沈線・ミガキ，(内) ミガキ		4 -11	
12	D-AW71	ピット14	埋土１	晩Ⅵ期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅲ　匹字文	ナデ・沈線文・ミガキ (内) ミガキ		4 -12	9 -2- 2
13	D-AW71	ピット14	埋　土	晩Ⅵ期	台付浅鉢	山形突起	Ⅰ・Ⅱ　無文（ミガキ） Ⅲ　匹字文	ナデ・沈線文・ミガキ (内) ミガキ	26に接合	4 -13	9 -2- 3
14	D-AW71	ピット14	埋土１	晩Ⅵ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅲ　変形工字文Ａ１	ナデ・沈線文・ミガキ (内) ミガキ		4 -14	9 -2- 9
15	D-AW71	ピット14	埋　土	晩Ⅵ期	深　鉢	平坦口縁	不明	ナデ・沈線文・ミガキ (内) ミガキ		4 -15	9 -2- 4
16	D-AW71	ピット14	埋　土	晩Ⅵ期	浅　鉢	―	Ⅲ　変形工字文Ａ	ナデ・沈線文・ミガキ (内) ミガキ		4 -16	9 -2- 5
17	D-AW71	ピット14	埋　土	晩期	鉢	―	Ⅲ　平行沈線文	ナデ・沈線文，(内) ナデ		4 -17	9 -2- 6
18	D-AW71	ピット14	埋　土	晩期	深鉢（鉢）	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ平行沈線文	ナデ・沈線文，(内) ナデ		4 -18	9 -2- 7
19	D-AW71	ピット14	埋　土	晩Ⅴb期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ　無文（ナデ） Ⅲ　平行沈線文，縄文	ＬＲ斜行縄文・沈線文		4 -19	9 -2- 8
20	D-AW71	ピット14	埋　土	晩Ⅴ期	壷	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅱ・Ⅲ　無文（ナデ）	ナデ・沈線文，(内) ナデ		4 -20	9 -2-11
21	D-AW71	ピット14	埋土１	晩期	広口壷	小波状口縁	Ⅰ　無文（ナデ） Ⅲ　縄文	ナデ・LR縄文，(内) ナデ		4 -21	9 -2-10
22	D-AW72	ピット42	埋土１	弥Ⅱ期	高　杯	平坦口縁	Ⅴ　波状文？	沈線文・ミガキ，(内) ナデ		4 -22	9 -2-13
23	D-AW72	ピット42	埋土２	晩Ⅵ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅲ　斜行縄文？	ＬＲ斜行縄文・ミガキ (内) ヨコミガキ		4 -23	9 -2-12
24	D-AW72	ピット42	埋土２	晩Ⅴ期～弥Ⅰ期	広口壷		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　無文（ケズリ）	ケズリ，(内) ナデ		4 -24	9 -2-16
25	D-AW72	ピット42	埋土１	晩Ⅵ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅲ　変形工字文Ｐ	沈線文・ミガキ (内) 沈線文・ナデ		4 -25	9 -2-14
26	D-AW72	ピット42	埋土２	晩Ⅵ期	高　杯	平坦口縁・突起（山形突起）	Ⅰ　無文，口唇部に沈線，Ⅱ　無文（ミガキ），Ⅲ　変形工字文Ａ	沈線文・ミガキ (内) ヨコミガキ・沈線文		4 -26	9 -2-15
27	D-AW72	ピット42	埋土２	晩Ⅴa期	甕	小波状口縁	Ⅰ・Ⅱ　無文（ミガキ） Ⅲ　斜行縄文	ＬＲ斜行縄文・ミガキ (内) ナデ		4 -27	10-1- 1
28	D-AZ72	第４号溝跡	埋　土	弥Ⅰ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文	沈線・ヨコミガキ (内) ミガキ		4 -28	10-1- 3
29	D-AZ72	第４号溝跡	埋　土	弥？	深　鉢	―	Ⅲ　条線（タテ）	条線，(内) ナデ		4 -29	10-1- 4
30	D-AZ72	第４号溝跡	埋　土	晩Ⅴ期	壷	―	Ⅲ　縄文	ＬＲ斜行縄文，(内) ナデ		4 -30	10-1- 2
31	D-AZ72	第４号溝跡	埋　土	晩Ⅴ～Ⅵ期	壷	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅱ　無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ		4 -31	10-1- 9
32	D-AZ72	第４号溝跡	埋　土	晩Ⅴ期	台付浅鉢	―	Ⅴ　匹字文	沈線文・ミガキ (内) ヨコミガキ		4 -32	10-1-10
33	D-AZ72	第４号溝跡	埋　土	晩Ⅵ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ・Ⅱ　無文（ナデ）	ナデ，(内) ナデ		4 -33	10-1- 5
34	D-AZ72	第４号溝跡	埋　土	晩Ⅳ期	深　鉢	山形波状口縁	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅲ　縄文	ＬＲ縄文・ミガキ，(内) ナデ		4 -34	10-1- 7
35	D-AZ72	第４号溝跡	埋　土	晩Ⅳ期	不　明	山形突起	Ⅰ　平行沈線文 口唇部に刺突	沈線文・ナデ，(内) ナデ		5 - 1	10-1- 6
36	D-AZ72	第４号溝跡	埋　土	不　明	甕	―	Ⅲ　平行沈線文＋縄文	ナデ・ＲＬ斜行縄文・沈線文・ミガキ，(内) ミガキ	補修孔	5 - 2	10-1- 8
37	E-BA60	ピット37	埋土１	不　明	浅　鉢	―	Ⅲ　平行沈線文	ナデ・沈線文，(内) ナデ		5 - 3	10-1-11
38	F-BF57	第２号竪穴住居跡	覆　土	弥Ⅱb期	深　鉢	―	Ⅲ　縄文＋沈線文	ＬＲ斜行縄文・沈線文・ミガキ，(内) ナデ		5 - 4	10-1-12
39	F-BG57	第２号竪穴住居跡	覆　土	弥Ⅱb期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　縄文	ＬＲ横走縄文，(内) ミガキ		5 - 5	10-1-13
40	F-BG57	第２号竪穴住居跡	床　直	弥中～後期	深鉢？	平坦口縁	Ⅰ　無文（ナデ），Ⅲ　縄文？	ナデ・縄文？，(内) ナデ		5 - 6	10-1-14
41	F-BG57	第２号竪穴住居跡	覆　土	弥Ⅱb期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　沈線文 Ⅱ　変形工字文C2	ナデ・沈線文，(内) ナデ		5 - 7	10-1-15
42	F-BG58	第２号竪穴住居跡	覆土１	弥Ⅱb期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ　沈線文 Ⅲ　変形工字文C2，縄文	ＬＲ横走縄文・沈線文・ミガキ，(内) 沈線文・ミガキ		5 - 8	10-2- 1
43	F-BG57	第２号竪穴住居跡	第２号炉内	弥Ⅱb期	高　杯	―	Ⅴ　波状文＋垂下文？＋縄文	ＬＲ横走縄文・沈線文・ミガキ，(内) ナデ		5 - 9	10-2- 2
44	F-BG57	第２号竪穴住居跡	覆土１	弥Ⅱb期	壷	平坦口縁・突起（Ａ突起）	Ⅰ　沈線文，Ⅱ　無文（ナデ）， Ⅲ　沈線文＋縄文	ＬＲ斜行縄文・沈線文 (内) ナデ		5 -10	10-2- 3
45	F-BG57	第２号竪穴住居跡	覆土１	晩Ⅵ期～弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ　無文（ナデ） Ⅲ　縄文	ＲＬ斜行縄文，(内) ナデ		5 -11	10-2- 4
46	F-AZ57	ピット46	埋　土	弥Ⅰ期	高　杯	山形突起（頂部に沈線）	Ⅰ　無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ，(内) ミガキ		5 -12	10-2- 5
47	F-BD59	ピット47	埋　土	弥Ⅱb期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文	沈線文・ナデ，(内) ナデ	朱	5 -13	10-2- 7
48	F-AZ57	ピット155	埋　土	晩Ⅴ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ　平行沈線文	ナデ・沈線文・ＬＲ縄文 (内) ナデ		5 -14	10-2- 9
49	F	第４号溝跡	埋　土	弥Ⅱa期	鉢	―	Ⅲ　変形工字文C1	沈線文・ナデ，(内) ナデ		5 -15	10-2- 6
50	F	第４号溝跡	埋　土	晩Ⅴ期	壷	山形突起	Ⅰ　無文（ナデ） Ⅱ　平行沈線文	沈線文・ナデ，(内)		5 -16	10-2- 8
51	H-BE56	ピット152	埋土２	晩Ⅵ期～弥Ⅱa期	深　鉢	平坦口縁・突起（Ａ突起）	Ⅰ　平行沈線文 Ⅲ　縄文	ＬＲ斜行縄文，(内) ナデ		5 -17	10-2-11
52	H-BE56	ピット152	埋　土	晩Ⅴ期	壷	―	Ⅲ　平行沈線文＋刺突列	沈線文・刺突，(内) ナデ		5 -18	10-2-10
53	G-BD52	第４号土器埋設土壙	埋　土	弥Ⅱb期	甕	―	Ⅱ　ミガキ，Ⅲ　縄文	(内) ミガキ・ケズリ・ナデ	炭化物	5 -19	11-1- 1
54	G-BB52	ピット162	埋　土	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	浅　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ　平行沈線文＋変形工字文Ａ	沈線文・ミガキ (内) ナデ・ミガキ		5 -20	11-1- 2
55	G	第１号配石遺構	9	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ）＋平行沈線文	沈線文・ミガキ，(内) ナデ		5 -21	11-1- 3
56	G-BH52	第１号配石遺構	9	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ　ミガキ＋平行沈線文	ＬＲ横走縄文・沈線文・ミガキ，(内) ナデ・ヨコミガキ	炭化物	6 - 1	11-2- 1
57	G-BB51	第２号溝跡	埋　土	弥Ⅱ期	壷	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ　無文（ナデ） Ⅲ　縄文	ＬＲ縄文，(内) ナデ		6 - 2	11-2- 2
58	K-AS51	ピット156	埋　土	晩終末？	壷	小波状口縁	Ⅰ　無文（ナデ），Ⅲ　縄文	ＬＲ横走縄文・ナデ，(内) ナデ		6 - 3	11-2- 3
59	K-AS51	ピット156	埋　土	晩Ⅳ期	深鉢（甕）	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文，口唇部に刺突	ＬＲ縄文・沈線文・ミガキ (内) ナデ		6 - 4	11-2- 4
60	K-AS58	ピット187	埋　土	弥Ⅳ期	小型鉢	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅲ　変形工字文＋沈線文	沈線文・ナデ (内) ヨコミガキ		6 - 5	12-1- 3

付表１　山王囲遺跡出土土器観察表(2)

Attribute list of pottery from the Sanno-gakoi site (2)

個体No.	出土地点	遺　構	層位	時　期	器種	口縁部の特徴	主要文様の特徴	縄文・器面調整の特徴	備　考	図版No.	写真No.
61	K-AS58	ピット187	埋　土	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ　無文（ナデ），Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ナデ （内）ヨコナデ	炭化物	6 - 6	12-1- 1
62	K-AS58	ピット187	埋　土	弥Ⅱ期	鉢 （高杯）	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文，口唇部に沈線	沈線文・ナデ，（内）ナデ	朱	6 - 7	12-2- 4
63	K-AR53	ピット189	埋　土	不　明	甕 （深鉢）	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　無文（ナデ）	ナデ，（内）ナデ		6 - 8	12-1- 2
64	K-AS52	ピット190	埋　土	晩Ⅴ期	深　鉢	平坦口縁・突起 （２個一対のA突起）	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　無文（ナデ）	ナデ，（内）ミガキ		6 - 9	12-1- 5
65	K-AS53	ピット192	埋　土	不　明	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ・Ⅲ　無文（ナデ）	ナデ，（内）ナデ		6 -10	12-1- 6
66	K-AR52	ピット196	埋　土	晩Ⅳ～Ⅴ期	鉢 （高杯）	—	Ⅲ　工字文	沈線文，（内）不明		6 -11	12-1- 7
67	K-AR54	ピット198	埋　土	晩Ⅴ期～弥Ⅱ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ　無文（ナデ） Ⅲ　沈線文	ナデ，（内）ナデ		6 -12	12-1- 8
68	K-AR55	ピット200	埋　土	晩Ⅴ期	鉢	平坦口縁・刻み	Ⅰ　無文，Ⅱ　無文＋平行沈線文，Ⅲ　縄文？	沈線文，（内）ナデ		6 -13	12-1- 9
69	K-AS56	ピット202	埋　土	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	浅　鉢	山形突起	Ⅰ　無文，口唇部に沈線 Ⅱ　沈線文	沈線文，（内）不明		6 -14	12-1-10
70	K-AS56	ピット204	埋　土	晩Ⅴ～Ⅵ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　縄文	LR斜行縄文，（内）ナデ		6 -15	12-2- 2
71	K-AR57	ピット205	埋　土	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅳ　平行沈線文	沈線文・ミガキ，（内）ミガキ		6 -16	12-2- 3
72	K-AS56	ピット206	埋　土	晩Ⅳ期	甕	平坦口縁・突起 （A突起）	Ⅰ　無文（ミガキ），口唇部に沈線，Ⅲ　縄文	LR縄文・沈線文・ミガキ （内）ミガキ		6 -17	12-2- 1
73	K-AS58	ピット214	埋　土	晩Ⅳ期	甕	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ），口唇部に刺突，Ⅲ　縄文	LR縄文・ミガキ，（内）ナデ		6 -18	12-2- 5
74	K-AS59	ピット216	埋　土	不　明	鉢	平坦口縁・刻み	Ⅰ　平行沈線文	沈線文・ナデ，（内）ナデ	炭化物，朱	6 -19	12-2- 4
75	C-RB75, AW75	包含層	2	晩Ⅴb期	鉢	山形波状縁	Ⅰ　口唇部に沈線 Ⅲ　匹字文	沈線・ヨコミガキ （内）ヨコミガキ		6 -20	12-2- 6
76	E-BF61	包含層		晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	壷	—	Ⅲ　変形工字C１	LR斜行縄文・沈線文 （内）ナデ		6 -21	12-2- 7
77	E	包含層	9	晩期後葉	鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　匹字文	沈線文・ナデ，（内）ナデ	朱	6 -22	12-2- 8
78	F	包含層	6b	弥Ⅴ期	壷	—	Ⅲ　沈線間刻み目，波状文（半截竹管）	RL斜行縄文・沈線文・刻み		6 -23	12-2-10
79	F.I	包含層		弥Ⅳ～Ⅴ期	壷	—	Ⅲ　弧線文（半截竹管）	LR斜行縄文・沈線文		7 - 1	12-2- 9
80	F-BG57	包含層	9	弥Ⅱ期	高　杯	—	Ⅴ　沈線文	RL横走縄文・沈線文 （内）ナデ	朱	7 - 2	12-2-11
81	F-BE58	包含層		弥Ⅰ期	高　杯	—	Ⅲ　工字文	ナデ・沈線文，（内）ナデ		7 - 3	12-2-12
82	F-BD58	包含層	6b	弥Ⅰ期	高　杯	—	Ⅳ　平行沈線文	沈線文・ナデ，（内）ヨコミガキ		7 - 4	13-1- 2
83	F-BG58	包含層		晩Ⅴ期	鉢	—	Ⅲ　工字文	沈線文，（内）不明瞭		7 - 5	13-1- 1
84	H	包含層	８～９	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ　無文（ナデ），Ⅲ　縄文	ケズリ・ナデ・LR縄文 （内）ケズリ		7 - 6	13-1- 3
85	H	包含層	８～９	晩Ⅴb期	壷	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ　無文（ミガキ） Ⅲ　沈線文	沈線文・LR縄文・ミガキ （内）ミガキ		7 - 7	13-1- 4
86	G	包含層		晩Ⅵ期	壷	—	Ⅱ　平行沈線文 Ⅲ　縄文	LR縄文・ミガキ・沈線文 （内）ナデ	朱	7 - 8	13-1- 7
87	G	包含層	10	晩Ⅴ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ），Ⅱ　沈線文，Ⅲ　変形工字文A	沈線文・ミガキ，（内）ミガキ		7 - 9	13-1- 8
88	I	包含層	9	弥Ⅱb期	蓋	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　縄文	LR斜行縄文，（内）ナデ	炭化物	7 -10	13-1- 5
89	I-BE47	包含層		弥Ⅱb期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅲ　王字文	沈線文・LR縄文・ミガキ （内）不明	炭化物	7 -11	13-1- 6
90	I-BD49	包含層		弥Ⅱ期	浅　鉢	平坦口縁・突起 （A突起）	Ⅰ・Ⅲ　縄文	LR斜行縄文，（内）ナデ	炭化物	7 -12	13-2- 1
91	I-BD50	包含層		弥Ⅰ～Ⅱa期	蓋	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　縄文	LR斜行縄文，（内）ミガキ	炭化物	7 -13	13-2- 2
92	I-BD50	包含層		弥Ⅱb期	壷	—	Ⅲ　王字文	沈線文・LR縄文・ミガキ （内）ナデ		7 -14	13-2- 3
93	I-BD50	包含層		弥Ⅰ～Ⅱa期	壷	—	Ⅲ　平行沈線文	ナデ・沈線文，（内）ナデ		7 -15	13-2- 5
94	I	包含層		弥Ⅰ～Ⅱa期	深　鉢	—	Ⅱ　平行沈線文 Ⅲ　縄文	LR縄文・沈線文，（内）ナデ	炭化物	7 -16	13-2- 6
95	I	包含層	9	弥Ⅱa期	浅　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　平行沈線文	LR縄文・沈線文・ミガキ （内）ミガキ		7 -17	13-2- 4
96	J-BN49	包含層	9	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	深　鉢	平坦口縁・突起 （A突起）	Ⅰ　無文（ナデ） Ⅲ　縄文	ナデ・LR斜行縄文 （内）ナデ		7 -18	13-2- 7
97	J	包含層	６～７	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	浅　鉢	—	Ⅲ　平行沈線文	ナデ・沈線文，（内）ナデ		7 -19	13-2- 9
98	J-BN49	包含層	9	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	高　杯	山形突起	Ⅰ　平行沈線文	（内）ナデ		7 -20	13-2- 8
99	K	包含層確認面		弥Ⅳ期	鉢	—	Ⅱ　無文（ミガキ） Ⅲ　平行沈線文，縄文	沈線文・LR斜行縄文・ミガキ （内）ミガキ		7 -21	14-1- 1
100	K	包含層確認面		弥Ⅳ期	鉢	—	Ⅲ　連弧文	LR縄文・沈線文・ミガキ （内）ミガキ	朱	7 -22	14-1- 2
101	K	包含層確認面		弥Ⅱb期	鉢	—	Ⅲ　波状文，縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ （内）ナデ		7 -23	13-2-10
102	K	包含層確認面		弥Ⅱb期	高　杯	平坦口縁	Ⅲ　変形工字文C２	沈線文・ミガキ （内）ヨコミガキ		7 -24	14-1- 9
103	K	包含層確認面		弥Ⅱb期	高　杯	平坦口縁	Ⅲ　変形工字文C２	沈線文・ミガキ （内）ヨコミガキ		7 -25	14-1- 5
104	K	包含層確認面		弥Ⅱb期	壷	—	Ⅲ　変形工字文C２	沈線文・ミガキ （内）指頭圧痕，ナデ		8 - 1	14-1- 3
105	K	包含層確認面		弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅲ　縄文	LR縄文，（内）ヨコミガキ	炭化物	8 - 2	14-1- 4
106	K	包含層確認面		弥Ⅰ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅱ　平行沈線文，Ⅲ　縄文	LR縄文・沈線文・ミガキ （内）ナデ		8 - 3	14-1- 6
107	K	包含層確認面		弥Ⅰ期	高　杯	—	Ⅲ　平行沈線文	沈線文・ナデ，（内）ナデ	朱	8 - 4	14-1- 7
108	K	包含層確認面		晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	鉢？	—	Ⅲ　変形工字文A	沈線文・ミガキ，（内）ミガキ		8 - 5	14-1- 8
109	K	包含層確認面		晩Ⅴ期？	高　杯	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　縄文	沈線文，（内）ナデ		8 - 6	14-1-10
110	K	包含層確認面		晩Ⅵ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅱ　平行沈線文，縄文	沈線文・LR縄文・ナデ （内）ナデ	朱	8 - 7	14-1-11
111	K	包含層確認面		晩Ⅳ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ　口唇部に刺突，Ⅱ　無文（ミガキ），Ⅲ　沈線文	RL・LR羽状縄文・沈線文・ミガキ，（内）ヨコミガキ		8 - 8	14-2- 1
112	K	包含層確認面		晩Ⅳ～Ⅴa期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ　口唇部に刺突 Ⅱ　平行沈線文，Ⅲ　縄文	縄文・沈線文，（内）ナデ		8 - 9	14-2- 2
113	K-AS	包含層		弥Ⅳ期	壷	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅲ　平行沈線文	LR縄文・沈線文・ナデ （内）ナデ	朱	8 -10	14-2- 3
114	K-AR59	包含層		弥Ⅱb期	鉢 （高杯）	平坦口縁・突起 （A突起）	Ⅰ　平行沈線文 Ⅱ　変形工字文C２	沈線文・ミガキ，（内）ナデ		8 -11	14-2- 4
115	K-AR58	包含層		弥Ⅱb～Ⅲ期	壷	—	Ⅲ・Ⅳ　入組文	LR縄文・沈線文・ミガキ （内）ナデ	朱	8 -12	14-2- 5
116	K-AR	包含層		弥Ⅱb期	蓋	—	Ⅰ・Ⅲ　沈線文	LR斜行縄文，（内）ミガキ		8 -13	14-2- 6
117	K-AR56	包含層		弥Ⅰ～Ⅱ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅱ　無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ （内）ヨコミガキ		8 -14	14-2- 8
118	K-AR56	包含層		弥Ⅱa期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅲ　変形工字文C１	沈線文・ミガキ？ （内）ミガキ？	炭化物	8 -15	14-2- 7
119	K-AR59	包含層		弥Ⅰ～Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅲ　平行沈線文，縄文	LR縄文・沈線文・ミガキ （内）鳳ナデ		8 -16	15-1- 1
120	K-AR	包含層		弥Ⅱa期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅲ　変形工字文C１	沈線文・縄文・ミガキ		8 -17	15-1- 3
121	K-AS	包含層		弥Ⅱa期	高　杯	—	Ⅴ　波状文	沈線文・ナデ？，（内）ナデ		8 -18	15-1- 2
122	K-AR56	包含層		弥Ⅱb期	高　杯	—	Ⅴ　波状文	沈線文・ミガキ，（内）ナデ		9 - 1	15-2- 5

付表1　山王囲遺跡出土土器観察表(3)
Attribute list of pottery from the Sanno-gakoi site (3)

個体No.	出土地点	遺　構	層位	時　期	器種	口縁部の特徴	主要文様の特徴	縄文・器面調整の特徴	備　考	図版No.	写真No.
123	K-AR56	包含層		弥Ⅱ期	高　杯	—	Ⅴ　波状文	沈線文・ミガキ,(内)ミガキ(上ケズリ)		9-2	15-2-4
124	K-AR57	包含層		晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	鉢	平坦口縁	Ⅲ　平行沈線文,Ⅳ　縄文	LR縄文・沈線文・ミガキ(内)ミガキ		9-3	16-1-6
125	K-AR58	包含層		弥Ⅱa期	壷	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅱ　無文(ミガキ)	沈線文・ミガキ (内)ヨコミガキ		9-4	15-2-2
126	K-AS	包含層		晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	鉢	—	Ⅲ　変形工字文A3	沈線文・ナデ,(内)ナデ		9-5	15-2-3
127	K-AS	包含層		晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	鉢	平坦口縁・突起(A突起)	Ⅲ　変形工字文A1	沈線文・ナデ (内)ヨコミガキ		9-6	16-1-1
128	K-AS	包含層		弥Ⅰ期?	鉢	平坦口縁	Ⅲ　変形工字文A2	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ (内)ヨコミガキ		9-7	16-1-5
129	K-AR58	包含層		晩Ⅳ期～弥Ⅱa期	深　鉢	平坦口縁・突起(A突起)	Ⅰ・Ⅱ　平行沈線文＋瘤 Ⅲ　縄文	LR縄文・沈線文・ミガキ (内)ナデ	朱	9-8	15-2-1
130	K-AR56	包含層		晩Ⅵ期	高　杯	山形突起?	Ⅰ　無文(ミガキ) Ⅲ　変形工字文A	沈線文・ミガキ,(内)ナデ		9-9	16-1-3
131	K-AR56	包含層		晩Ⅵ期	高　杯	山形突起(頂部が肥大する)	Ⅰ　無文(ナデ) Ⅲ　変形工字文A	沈線文・ミガキ? (内)ヨコミガキ		9-10	16-1-4
132	K-AR56	包含層		晩Ⅵ期	高　杯	山形突起(頂部に刻みを有す粘土粒Ⅲ 変形工字文Bが縦に2個付く)	Ⅰ　無文(ミガキ)	沈線文・ミガキ (内)ヨコミガキ		9-11	16-2-2
133	K-AR59	包含層		晩Ⅴa期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文＋B突起 Ⅲ　工字文	沈線文・ミガキ? (内)ミガキ		9-12	16-2-1
134	K-AR56	包含層		晩Ⅴb～c期	高　杯(浅鉢)	平坦口縁	Ⅰ　無文(ミガキ) Ⅲ　匹字文	沈線文・ミガキ,(内)ナデ		9-13	16-1-2
135	K-AR59	包含層		晩Ⅳ期	深　鉢	平坦口縁・刻み・突起(2個一対のA突起)	Ⅱ　平行沈線文	RL縄文・沈線文・ミガキ (内)ヨコミガキ		9-14	16-2-3
136	K-AR58	包含層		晩Ⅳ期	深　鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ　無文(ミガキ)＋平行沈線文,Ⅲ・Ⅳ　縄文	LR・RL羽状縄文・沈線文・ミガキ,(内)ミガキ		10-1	16-2-4
137	K-AR57	包含層		晩Ⅳ期	深　鉢	平坦口縁・刻み・突起(A突起)	Ⅰ　無文(ミガキ),Ⅱ　平行沈線文,Ⅲ　縄文	LR・RL羽状縄文・沈線文・ミガキ,(内)ナデ		10-2	17-1-1
138	K-AR56	包含層		晩Ⅳ期	深　鉢	平坦口縁・刻み	Ⅰ　刻目,平行沈線文,縄文	ミガキ,(内)ナデ		10-3	17-1-2
139	K-AS	包含層		晩Ⅳ期	浅　鉢	平坦口縁・刻み・突起(B突起)	Ⅱ　平行沈線文 Ⅲ　雲形文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ,(内)ヨコミガキ		10-4	17-1-4
140	K-AR58	包含層		晩Ⅳ期	浅　鉢	平坦口縁・刻み	Ⅰ　平行沈線文,Ⅱ　平行沈線文＋B突起,Ⅲ　雲形文	LR縄文・沈線文・ミガキ (内)ナデ		10-5	17-1-6
141	K-AR59	包含層		晩Ⅳ期	鉢	平坦口縁・刻み	Ⅰ　平行沈線文,刻み Ⅲ　平行沈線文	LR縄文・沈線文・ナデ (内)ナデ		10-6	17-1-3
142	K-AR59	包含層		晩Ⅳ期	浅　鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文,Ⅱ　平行沈線文＋B突起,Ⅲ　雲形文(C字文)	LR縄文・沈線文・ミガキ (内)ヨコミガキ		10-7	17-1-5
143	K-AR59	包含層		晩Ⅳ期	浅　鉢	平坦口縁・突起(B突起・A突起)	Ⅰ　沈線文	沈線文・ナデ,(内)ナデ		10-8	17-1-7
144	K-AR59	包含層		晩Ⅳ期	鉢	平坦口縁・突起(B突起)	Ⅰ・Ⅱ　無文(ミガキ),平行沈線文,Ⅲ　雲形文	LR縄文・沈線文・ミガキ (内)ヨコミガキ		10-9	17-2-1
145	K-AS	包含層		晩Ⅳ～Ⅴa期	壷	平坦口縁	Ⅲ　平行沈線文	LR・RL羽状縄文・沈線文・ミガキ,(内)ミガキ,ナデ		10-10	17-2-2
146	K-AR59	包含層		晩Ⅳ期	壷	—	Ⅲ　雲形文	LR縄文・沈線文,(内)ナデ	朱	10-11	17-2-3
147	K-AR56	包含層		晩Ⅳ期	注　口	平坦口縁	Ⅳ　平行沈線文＋瘤,雲形文	LR縄文・沈線文・ミガキ (内)ヨコミガキ		10-12	17-2-4
148	K	遺構検出面		晩Ⅴ期～弥Ⅰ期	壷	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文	沈線文・ナデ,(内)ナデ		10-13	17-2-5
149	K	遺構検出面		晩Ⅳ期	深　鉢	平坦口縁・突起(B突起)	Ⅲ　刻み,平行沈線,縄文	LR縄文・沈線文・ミガキ (内)ヨコミガキ	炭化物	10-14	17-2-6
150	K	遺構検出面		晩Ⅳ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ・Ⅱ　無文(ミガキ) Ⅲ　縄文	LR・RL羽状縄文・ミガキ (内)ヨコミガキ		10-15	17-2-7
151	E-AZ60	第1号土器埋設土壙		晩Ⅵ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　匹字文,Ⅲ・Ⅳ　縄文	沈線文・LR斜行縄文・ミガキ,(内)ミガキ	口径36.6cm 底径9.6cm	11-1	6-1
152	G-BB51	第2号土器埋設土壙		弥Ⅱa期	甕	—	Ⅲ・Ⅳ　縄文	ナデ・LR斜行,横走縄文 (内)ナデ	炭化物	11-2	6-2
153	G-BH52	第5号土器埋設土壙		弥Ⅱb期	高　杯	—	Ⅴ　垂下文,縄文	LR縄文・沈線文・ミガキ (内)ナデ	朱	11-3	6-4
154	K-AR56	ピット209	埋　土	晩Ⅴ期	高　杯	—	Ⅴ　平行沈線文	ナデ・沈線文,(内)ナデ		11-4	
155	K-AS51	ピット156	埋　土	弥Ⅰ期	高　杯	—	Ⅴ　平行沈線文,変形工字文C1	沈線文,(内)ミガキ,ナデ		11-5	6-5
156	D-AW72	包含層	2	晩Ⅴ期	壷	山形波状口縁	Ⅰ　細い隆帯による三角連繋文,Ⅱ　無文,Ⅲ　流水(入組)工字文	沈線文・ミガキ,(内)ナデ		11-6	5-3
157	G-BB51	第2号溝跡	埋　土	弥Ⅳ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文,Ⅲ　縄文 Ⅳ　平行沈線文	LR縄文・沈線文・ナデ (内)ナデ	口径4.3cm 穿孔	11-7	6-6
158	G-BG56	包含層	9上面	弥Ⅰ期	高　杯	—	Ⅴ　変形工字文A2	沈線文・ミガキ,(内)ナデ		11-8	5-7
159	K-AS57	包含層		晩Ⅳ期	深　鉢	平坦口縁・押圧	Ⅲ　平行沈線文	LR・RL羽状縄文・沈線文・ミガキ,(内)ヨコミガキ		11-9	5-1
160	K-AS58	包含層		晩Ⅴb期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　無文(ミガキ) Ⅲ　匹字文,Ⅳ　縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ,(内)ヨコミガキ	口径15.6cm	11-10	5-2
161	K-AR	包含層		晩Ⅳ～Ⅴa期	壷	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ　無文(ミガキ) Ⅲ　縄文	LR・RL羽状縄文・ミガキ (内)ナデ,ミガキ		11-11	5-4
162	K-AS50	包含層		弥Ⅰ期	壷	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅱ　平行沈線文＋突起	沈線文・ミガキ, (内)ヨコミガキ	穿孔	11-12	5-6
163	K-AS57	包含層		弥Ⅳ期	鉢(蓋)	—	Ⅳ　平行沈線文,刺突列 Ⅴ　平行沈線文	ナデ・沈線文,刺突 (内)ナデ		11-13	5-8
164	K-AR53	第6号竪穴住居跡		晩Ⅵ期	甕(深鉢)	平坦口縁	Ⅰ～Ⅳ　無文(縄文)	LR斜行縄文・ミガキ (内)ナデ,ヨコミガキ	炭化物	12-1	7-1
165	K-AR	包含層		晩Ⅴ期	壷	平坦口縁	Ⅰ～Ⅲ　無文(ナデ)	ナデ,(内)ナデ	袖珍土器	12-2	5-5
166	G-BC52	第3号土器埋設土壙		弥Ⅰ期	深　鉢	平坦口縁＋突起	Ⅰ　平行沈線文 Ⅲ・Ⅳ　縄文	RL横走縄文・沈線文 (内)ミガキ		12-3	6-3

凡例：1.「時期」の弥は弥生時代を、晩は縄文時代晩期を示す。
2.「主要文様の特徴」のⅠ～Ⅴは、本文中の文様帯の区分と対応する。
3.「備考」の補修孔は焼成後の、穿孔は焼成前のものを示す。

付表2　山王囲遺跡出土土師器観察表
Attribute list of Haji ware from the Sanno-gakoi site

個体No.	出土地点	遺　構	層位	時　期	器種	器面調整の特徴	計測値(推定)	備　考	図版No.	写真No.
167	A-AV84	第1号竪穴住居跡	覆　土	7C末～8C前半	杯	ヨコナデ,(内)ミガキ　黒色処理	口径:(12.2cm)		12-4	7-3
168	A-AV84	第1号竪穴住居跡	覆　土	7C末～8C前半	杯	ヨコナデ,(内)ミガキ　黒色処理	口径:(13.8cm)		12-5	8-3
169	A-AV84	第1号竪穴住居跡	覆　土	7C末～8C前半	杯	ヨコナデ,(内)ミガキ　黒色処理	口径:(12.8cm)		12-6	7-2
170	C-BD75	ピット9	埋土3	7C末～8C前半	杯	体部上半:ミガキ,体部下半:ケズリ・ミガキ 黒色処理,(内)ミガキ　黒色処理	口径:10.6cm 器高:4.0cm		12-7	8-4
171	C-BD75	ピット9	埋　土	7C末～8C前半	台付甕	ケズリ・ナデ,(内)ヨコナデ			12-8	7-6
172	C-BD75	ピット9	埋　土	7C末～8C前半	甕	不明瞭,(内)不明瞭	口径:(15.6cm)		12-9	7-4
173	C-BD75	ピット9	埋　土	7C末～8C前半	甕	口縁部:ヨコナデ,頸部:ナデ (内)口縁部:ヨコナデ,頸部:ナデ	口径:(12.7cm)		12-10	7-5
174	C-BD75	ピット9	埋土3	7C末～8C前半	椀	口縁部:ヨコナデ・ミガキ,体部上半:ケズリ・ミガキ 体部下半:ケズリ・ハケメ,(内)ミガキ　黒色処理	口径:(16.2cm)		12-11	8-2
175	C-BD75	ピット9	埋土3	7C末～8C前半	甕	口縁部:ヨコナデ,頸部:ヨコナデ,(内)不明瞭	口径:(22.4cm)		12-12	8-1

付表 3　山王囲遺跡出土陶器観察表
Attribute list of ceramic ware from the Sanno-gakoi site

個体No.	出土地点	遺　構	層位	時　期	器種	器面調整の特徴	計測値(推定)	備　考	図版No.	写真No.
176	G	第2号溝跡	埋　土	14C	擂　鉢	口縁部～稜：ヨコナデ，稜以下：ナデ (内) 口縁部～稜：ヨコナデ，稜以下：ナデ	口径：(34.8cm)	在地系	12-13	8-5

付表 4　山王囲遺跡出土石器観察表(1)
Attribute list of stone implement from the Sanno-gakoi site (1)

No.	器　種	出土地点	遺　構	層位	石　材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備　考	図版No.	写真No.
1	石鏃	C-AX74	ピット3	埋土2	Sh	18.2	11.9	4.8	0.72	破損	13-1	18-14
2	石鏃	C-BD75	ピット9	埋土1	Ja1	20.6	9.6	4.8	0.73	破損	13-2	18-7
3	石鏃	D-AZ72	第4号溝跡	埋土1	Ja2	26.8	14.8	8.2	2.03	破損	13-3	18-11
4	石鏃	D-AZ72	第4号溝跡	埋土1	Ja2	20.0	9.9	3.3	0.39		13-4	18-2
5	石鏃	E-BD60	ピット		Sil-Tu	20.9	7.7	5.8	0.73	破損	13-5	18-13
6	石鏃	E-BG51			Obs	15.4	11.5	3.8	0.43		13-10	18-12
7	石鏃	F	第3号竪穴住居跡	床面	Ja2	21.5	13.3	7.3	1.38	床面直上		
8	石鏃	F	第2号竪穴住居跡		Ja2	26.2	10.5	4.8	0.86		13-20	18-10
9	石鏃	F-BC57		6b	Sh	24.3	12.4	7.0	1.63		13-6	18-20
10	石鏃	F-BC57		9	Ja2	20.8	7.0	3.3	0.43		13-8	18-5
11	石鏃	F-BF57	第4号溝跡		Ja2	16.8	8.7	3.8	0.29	破損		
12	石鏃	F-BG57	第2号竪穴住居跡	覆土	Sil-Sh	37.1	10.0	6.8	2.24	破損	13-7	18-18
13	石鏃	G	第2号溝跡		Obs	27.8	12.4	4.0	1.06	破損	13-9	18-19
14	石鏃	I			Sh	36.6	16.8	7.3	3.59		13-14	18-25
15	石鏃	I		9	Ja2	29.0	15.6	8.2	3.67			
16	石鏃	I-BD50		6	Ja2	22.1	9.8	4.5	0.61		13-13	18-6
17	石鏃	I-BE49		6	Ja2	18.6	13.5	5.6	0.95		13-12	18-3
18	石鏃	K-AR50	包含層		Ja2	18.9	10.2	4.4	0.55	破損		
19	石鏃	K-AR52	包含層		Sil-Tu	20.6	11.2	4.5	0.76	破損		
20	石鏃	K-AR54	包含層		Ch	27.8	8.6	3.6	0.50		13-25	18-9
21	石鏃	K-AR55	包含層		Sh	24.1	15.3	2.8	0.85	破損	13-24	18-23
22	石鏃	K-AR56	包含層		Ja	15.6	11.6	3.6	0.37	破損		
23	石鏃	K-AR56	包含層		Sh	24.0	11.8	7.8	1.43	付着物有	13-18	18-21
24	石鏃	K-AR56	包含層		Sh	39.7	12.8	6.5	2.26		13-21	18-17
25	石鏃	K-AR57	包含層		Sh	28.2	17.8	4.0	1.57		13-23	18-24
26	石鏃	K-AR57	包含層		Ja2	16.9	6.5	3.8	0.48		13-15	18-15
27	石鏃	K-AR58	包含層		Sh	22.4	13.0	4.6	0.79		13-11	18-4
28	石鏃	K-AR58	包含層		Sh	25.0	12.4	4.0	0.72	破損		
29	石鏃	K-AR59	包含層		Ja2	18.2	15.1	4.0	0.75		13-19	18-16
30	石鏃	K-AR59	包含層		Ja2	13.6	8.3	4.2	0.44		13-16	18-1
31	石鏃	K-AS54	包含層		Sh	27.0	10.5	5.7	1.30			
32	石鏃	K-AS54	包含層		Ch	22.0	8.5	3.3	0.47	破損		
33	石鏃	K-AS57	包含層		Ja2	21.5	13.7	4.2	0.75			
34	石鏃	K-AS57	包含層		Ja2	30.0	11.2	6.8	1.38		13-22	18-22
35	石鏃	K-AS57	包含層		Ja2	20.7	11.8	5.6	0.81	破損		
36	石鏃	K-AS59	第7号竪穴住居跡		Sh	22.8	10.7	4.9	0.82		13-17	18-8
37	石錐	F-BA57		9	Ja2	34.3	13.9	7.0	3.09			
38	石錐	G-AR57	包含層		Sh	44.7	31.0	10.0	13.62		13-26	19-1
39	石錐	K	包含層		Sil-Tu	30.3	28.5	8.9	4.63		13-29	19-2
40	石錐	K-AR52	包含層		Sh	18.5	16.0	8.4	1.87			
41	石匙	F			Sh	53.0	26.9	9.3	8.80		13-27	19-4
42	楕円形石器	K-AS50	包含層		Sh	44.0	16.2	12.3	9.75		13-28	19-3
43	不定形石器	E-BB61	ピット49	埋土1	Sh	42.1	35.0	12.8	13.19			
44	石刀	E-BO61	ピット33	埋土1	Sh	52.1	37.2	7.8	19.48	破損		
45	石刀	K		9	Sl	111.5	31.0	22.8	133.83	破損	13-30	18-31
46	石刀	K-AR50	包含層		Sl	110.6	34.4	12.8	70.52	破損	14-31	18-32
47	石刀	K-AR50	包含層		Sl	77.4	34.2	9.2	24.12	破損		
48	石棒	K-AR57	包含層		Sl	94.0	20.4	13.8	35.34	破損		
49	独鈷石	F-BC57		6b	Sl	69.8	43.8	15.8	52.83	破損	14-32	18-34
50	磨製石斧	E-BI60			Tu-Sa-Sh	137.0	39.6	28.7	237.04	破損	14-34	18-30
51	磨製石斧	G			Sa	66.5	49.6	31.6	156.00			
52	磨製石斧	G-BB51	第2号溝跡	埋土2	Sa-Sh	114.5	41.8	28.0	197.07		14-35	18-29
53	磨製石斧	K-AR59	包含層		Ser	61.2	32.4	12.2	41.58		14-33	18-28
54	打製石斧	F	第2号竪穴住居跡		Da	100.8	63.6	28.0	124.52		15-37	18-26
55	打製石斧	G	第2号溝跡		Sh	121.2	82.4	39.0	427.80		14-36	18-27

付表 4　山王囲遺跡出土石器観察表(2)

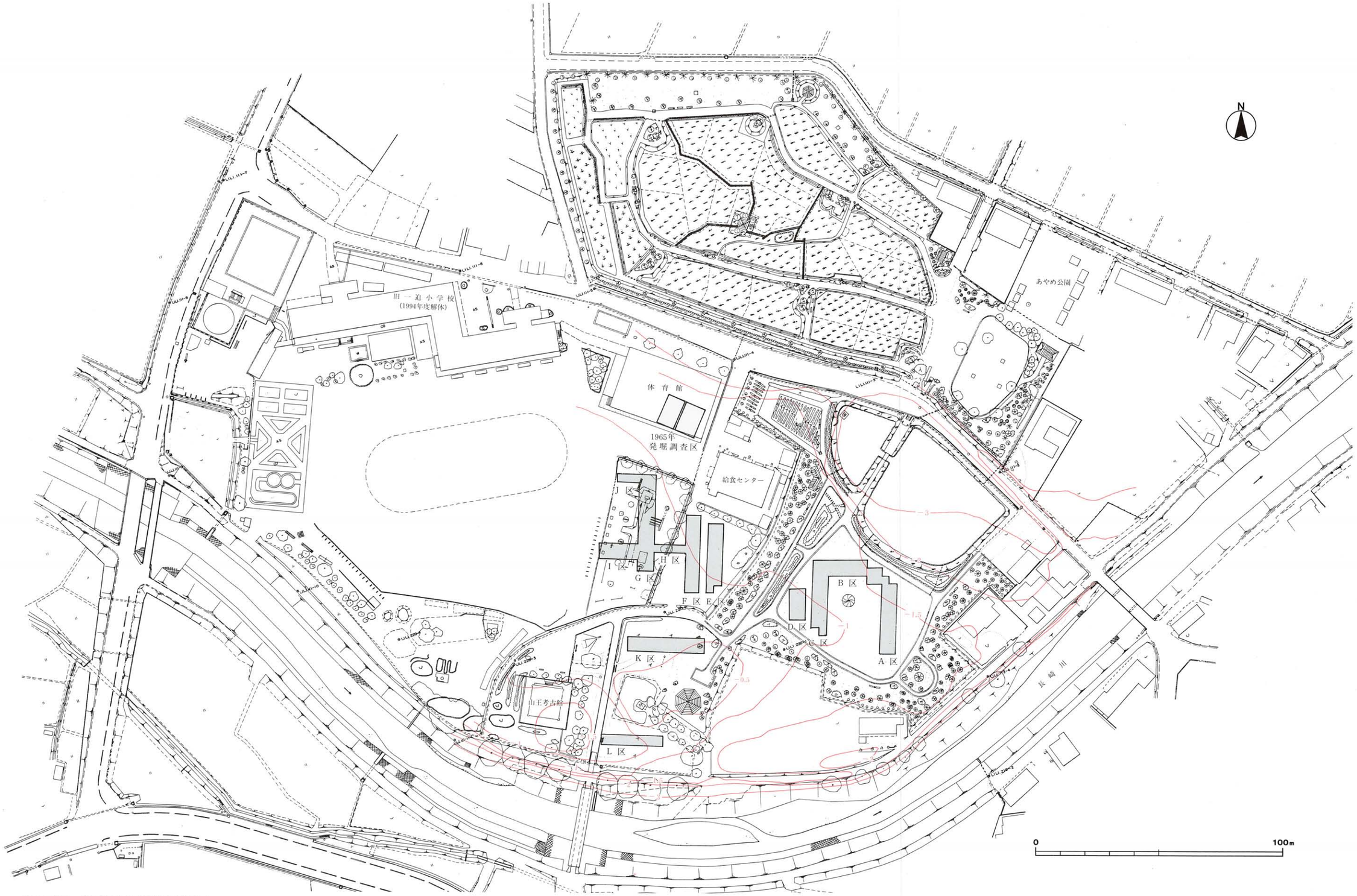
Attribute list of stone implement from the Sanno-gakoi site (2)

No.	器　種	出土地点	遺　構	層　位	石　材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	備　考	図版No.	写真No.
56	打製石斧	H		埋土1	Da-Tu	115.0	72.0	32.7	429.80			
57	円盤状石製品	C-AX74	ピット3	埋土1	And	59.4	57.2	12.0	52.50		15-38	18-36
58	円盤状石製品	K	遺構検出面		Da	50.7	48.6	14.4	59.52			
59	円盤状石製品	K-AR57	包含層		Sa-Tu	67.8	57.0	14.5	106.46			
60	円盤状石製品	K-AR58	包含層		Sa-Sh	60.9	55.0	14.9	66.39		15-39	18-37
61	円盤状石製品	K-AR59	包含層		Da	54.8	54.0	17.0	84.49			
62	円盤状石製品	K-AS50	包含層		Da-Tu	57.6	52.9	18.5	93.24			
63	敲石	E		6b	Da	130.0	92.5	54.4	1053.20			
64	敲石	E-AZ24	ピット24	埋土1	Da	128.3	88.9	38.8	667.00			
65	凹石	F	第2号竪穴住居跡		Da	82.6	72.0	55.7	437.90		15-45	19-16
66	凹石	F	第3号竪穴住居跡		Da	77.8	67.1	27.1	194.63		16-47	19-15
67	敲石	F-AZ57	ピット46		Tu-Sa	100.6	61.9	73.6	669.50			
68	敲石	G		10	Da	87.0	74.6	42.1	380.00			
69	敲石	G	第2号溝跡		And	133.6	115.6	69.0	1706.20			
70	敲石	G-BD51		10	Da	10.2	95.8	68.0	932.10			
71	敲石	H-BE55	ピット221	埋土1	Da	143.8	81.9	54.0	859.10		15-43	19-13
72	凹石	H-BE56	ピット151	埋土1	Da	110.5	57.0	47.1	465.50	受熱	15-42	19-12
73	敲石	K			Da	66.0	64.8	44.2	278.00			
74	敲石	K-AR56	包含層		Da	125.4	92.7	39.3	667.00			
75	凹石	K-AS51	ピット156	埋土1	Da	93.3	78.9	46.0	491.60		16-46	19-11
76	磨石・敲石				Da	129.0	76.5	40.7	545.50			
77	磨石・敲石	F		9	Da	88.3	77.7	33.0	300.20			
78	凹石	F	第2号竪穴住居跡		Da	94.3	92.3	52.9	683.20		15-44	19-14
79	磨石・敲石	F-BD59	ピット47	埋土1	Da	97.4	84.1	53.9	618.30			
80	磨石・敲石	G-BH52	ピット75	埋土1	Da	122.9	96.8	47.2	784.90			
81	磨石	E-BA61		9	Da	72.1	54.7	84.1	609.80	受熱	15-41	19-10
82	磨石・敲石	F-AZ57	ピット46	埋土1	Da	66.3	64.9	86.8	942.80	受熱		
83	敲石・凹石	H-BE55	ピット221	埋土1	Da-Tu	103.1	78.8	46.5	331.30			
84	磨石・凹石	K-AR57	包含層		Da	110.3	81.4	62.1	742.10			
85	石皿	D-AW71	ピット42	埋土2	Da-Tu	125.0	63.2	55.4	366.70	破損		
86	石皿	F-BC57		9	Pum	93.0	73.4	32.0	104.30	破損		
87	石皿	F-BC58		9	Da-Tu	165.1	165.1	73.2	1850.00			
88	石皿	K-AS56	遺構検出面		Da-Tu	349.0	321.0	108.0	11200.00	受熱、破損	17-52	19-20
89	石皿	F-AZ57	ピット46	埋土1	And	343.0	226.0	87.0	9000.00		16-50	19-19
90	凹石	F-AY57		9	And	196.0	171.0	80.0	4000.00		16-49	19-17
91	凹石	H-BE55	ピット151	埋土1	Da	155.0	145.0	84.5	2916.30		16-48	19-18
92	石錘	F-BF57	P11	埋土1	Da	68.0	45.4	15.0	50.25		15-40	19-35
93	線刻礫	K-AR57	包含層		Da	113.0	40.5	10.3	55.86		16-51	19-33
94	石核	E-BI60		9	Sh	32.4	69.0	27.5	57.76		17-55	19- 5
95	石核	F		6b	Sh	87.6	75.9	33.6	292.50		17-57	19- 9
96	石核	F	第2号竪穴住居跡		Ja2	48.2	45.7	46.0	135.48		17-53	19- 6
97	石核	K	包含層		Ja2	27.2	42.8	18.4	20.88			
98	石核	K-AR57	包含層		Ja2	60.0	46.6	31.6	104.55		17-56	19- 8
99	石核	K-AR59	包含層		Sil-Tu	35.6	57.2	25.8	68.77		17-54	19- 7
100	石核	K-AR50	包含層		Sh	34.0	20.6	31.0	22.02			

石材名称の略号は次の通りである。

Sa：砂岩　Sh：頁岩　Sl：粘板岩　Tu：凝灰岩　Ch：玉髄　Ja1：碧玉　Ja2：鉄石英　Ser：蛇紋岩　Obs：黒曜石　And：安山岩　Da：石英安山岩　Pum：軽石
Tu-Sa：凝灰質砂岩　Sil-Sh：珪質頁岩　Sa-Sh：砂質頁岩　Tu-Sa-Sh：凝灰質砂質頁岩　Sil-Tu：珪質凝灰岩　Sa-Tu：砂質凝灰岩　Da-Tu：石英安山岩質凝灰岩

図　　版



第1図版　山王囲遺跡発掘区配置図

Excavated trench in the Sanno-gakoi site

等高線は1962年明治大学考古学研究室作成の測量図による

B区深掘区

層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
501	10Y R3/4 暗褐色	砂	弱	弱		層厚は8cmである
502	10Y R4/6 褐色	砂質シルト	中	中		層厚は4cmである 501層と503層の間にレンズ状に堆積
503	10Y R3/3 暗褐色	砂	弱	弱		層厚は5cmである
504	10Y R4/6 褐色	シルト	中	強		層厚は5cmである
505	10Y R5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	弱	弱		層厚は4cmである
506	10Y R6/5 黄褐色	シルト	中	強	径2～5mmの白色土粒を斑状に含む 径1mm程度のマンガンを斑状に含む	層厚は12cmである
507	10Y R4/6 褐色	シルト	中	強	径10～20mmの白色のブロックを多く含む	層厚は3cmである
508	10Y R6/4 にぶい黄橙色	粘土質シルト	中	強		層厚は9cmである
509	10Y R5/8 黄褐色	砂質シルト	弱	中		層厚は7cmである
510	10Y R5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	弱	中		層厚は10cmである
511	5Y8/2 灰白色	粘土	強	中		層厚は36cmである 沼鉄により上部ほど褐色味が強くなる
512	7.5Y R4/4 褐色	砂	弱	中		層厚は10cmである 沼鉄の影響より土色はかなりまばらである
513	10Y R5/6 黄褐色	砂質シルト	弱	弱		層厚は3cmである
514	7.5Y R3/3 暗褐色	砂	弱	中		層厚は5cmである
515	10Y R5/3 にぶい黄褐色	砂	弱	弱		層厚は3cmである
516	5Y R4/4 にぶい赤褐色	砂	弱	中		層厚は6cmである
517	5Y R3/2 暗赤褐色	砂礫	弱	中	径1～5cmの円礫	層厚は15cmである
518	10Y R5/4 にぶい黄褐色	砂礫	弱	中	径1～10cmの円礫（5cm以上のものは扁平なものが多い）	層厚は40cm以上である

C区西壁

層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
1	10Y R3/1 黒褐色	砂質シルト	弱	中	径約4mmの礫をまばらに含む 径約5mmの炭化物をまばらに含む	層厚は20～25cmである
1b	7.5Y R3/1 黒褐色	シルト	中	中	2層由来の赤色土や灰黄褐色土を少量含む	層厚は12～13cmである
2	5Y R1.7/1 黒色	シルト	中	強	径約5mmの赤色土粒をまばらに含む 10Y R5/2灰黄褐色土をブロック状に含む	層厚は約20cmである
3	10Y R4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	中	強	黒色土を20%程ブロック状に含む	
4	10Y R4/4 褐色	粘土質シルト	中	強		E、F、G、H区での10層に併行する可能性あり

第4号溝跡

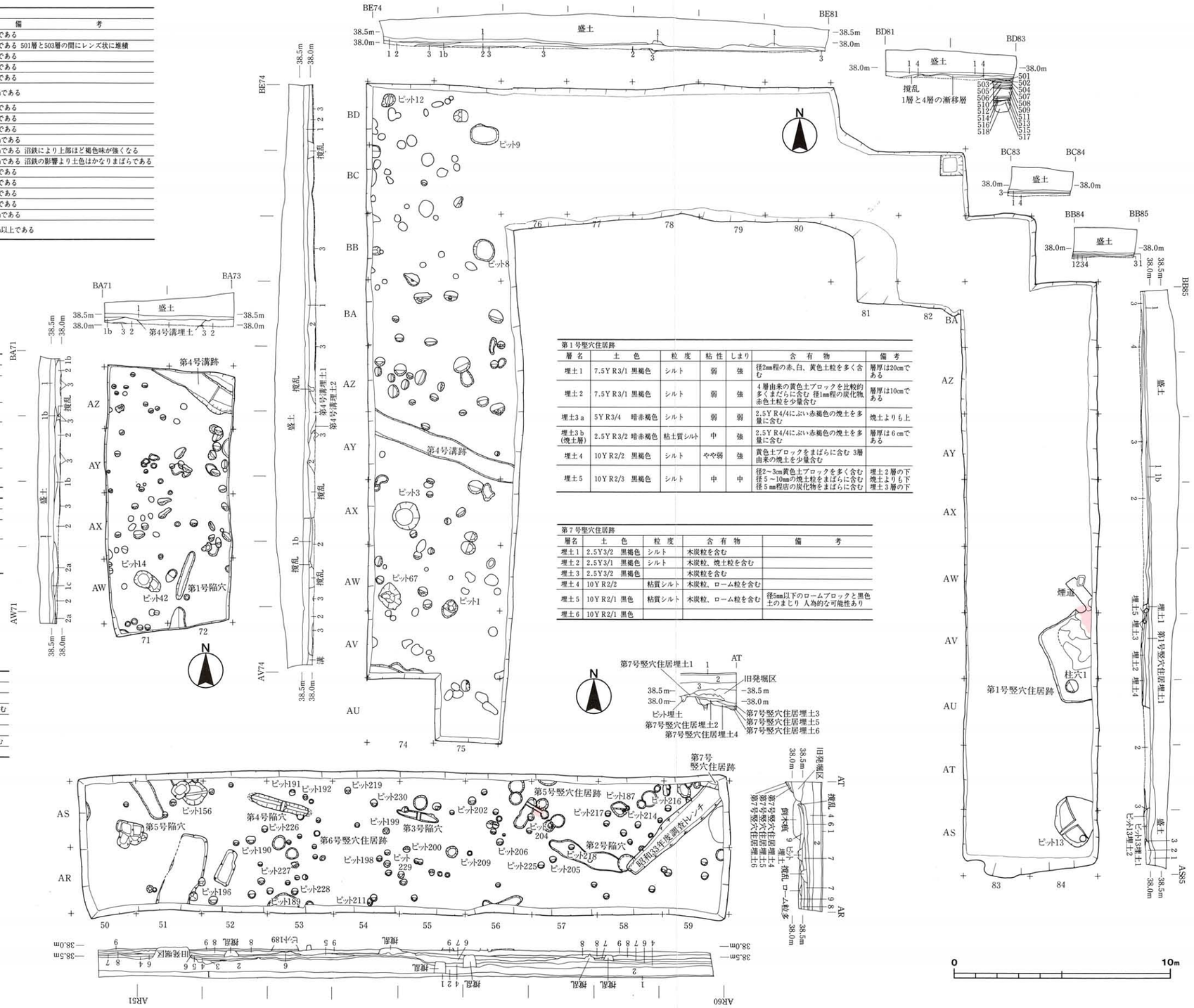
層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
埋土1	10Y R2/3 黒褐色	シルト	弱	強	径3～5mm程度の焼土粒をまばらに含む	土器片を含む
埋土2	10Y R3/3 暗褐色	シルト	弱	中	径3～5mm程度の焼土粒をまばらに含む 径3mm程度の炭化物を少量含む 4層黄色土をブロック状に含む	

D区西壁

層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
1	10Y R3/1 黒褐色	砂質シルト	弱	中	径約5mmの礫と炭化物をまばらに含む
1c	5Y R3/2 暗赤褐色	シルト	弱から中	弱	径約3～5mmの炭化物を少量含む 鉄分を斑状に含む
2a	5Y R1.7/1 黒色	シルト	中	強	鉄分を30%程ブロック状に含む
2	5Y R1.7/1 黒色	シルト	中	強	径約5mmの白色を斑状に含む
3	10Y R4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	中	強	径約1mmの赤色土を微量に含む 褐色土を少量含む
4					黒色土を20%程ブロック状に含む

K区

層名	土色	粘度	含有物	備考
1	10Y R2/2 黒褐色	シルト		公園表土
2	10Y R6/4 にぶい褐色	砂礫		公園造成時盛土
3	10Y R3/4 暗褐色	砂礫と混じりあう		公園造成時盛土
4	10Y R4/3 にぶい黄橙色	シルト		公園造成前表土
5	10Y R2/2 黒褐色	シルト		畑耕作土 西側のみ分布
6	10Y R4/2 灰黄褐色	粘質シルト		畑耕作土 全面に分布
7	10Y R2/2 黒褐色	粘質シルト	木炭粒、焼土粒を含む	しまりは弱い 遺物包含層の上層、E、F区9層の供給源の可能性あり
8	10Y R2/3 黒褐色	粘質シルト	木炭粒、焼土粒を7層より多く含む	遺物包含層の下層、E、F区9層の供給源の可能性あり
9	10Y R3/3 暗褐色	粘質シルト	木炭粒、ローム粒を含む	10層シルト質砂層の漸移層



第1号竪穴住居跡

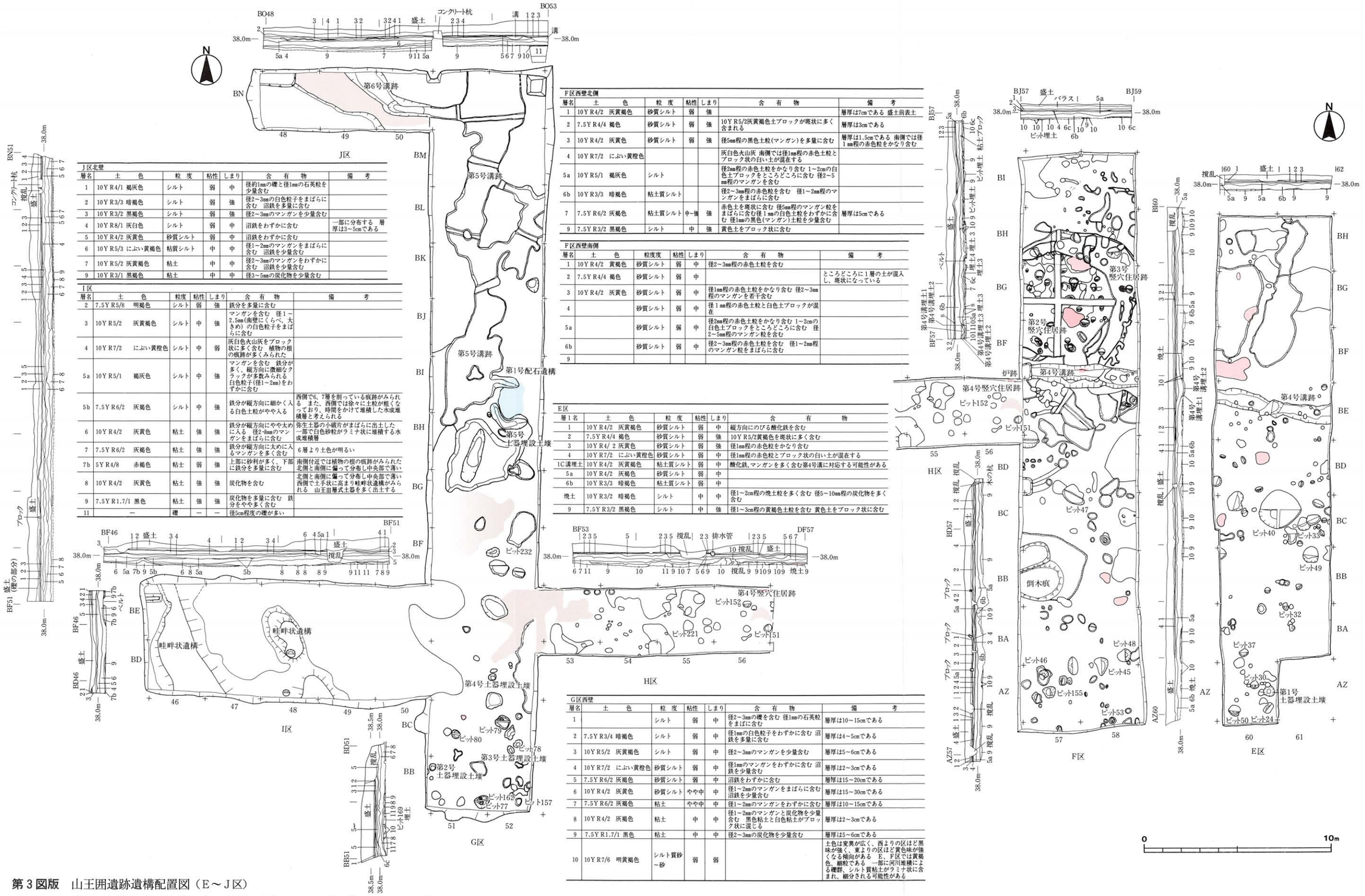
層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
埋土1	7.5Y R3/1 黒褐色	シルト	弱	強	径2mm程の赤、白、黄色土粒を多く含む	層厚は20cmである
埋土2	7.5Y R3/1 黒褐色	シルト	弱	強	4層由来の黄色土ブロックを比較的多くまばらに含む 径1mm程の炭化物、赤色土粒を少量含む	層厚は10cmである
埋土3a	5Y R3/4 暗赤褐色	シルト	弱	弱	2.5Y R4/4にぶい赤褐色の焼土を多量に含む	焼土よりも上
埋土3b（焼土層）	2.5Y R3/2 暗赤褐色	粘土質シルト	中	強	2.5Y R4/4にぶい赤褐色の焼土を多量に含む	層厚は6cmである
埋土4	10Y R2/2 黒褐色	シルト	やや弱	強	黄色土ブロックをまばらに含む 3層由来の焼土を少量含む	
埋土5	10Y R2/3 黒褐色	シルト	中	中	径2～3cm黄色土ブロックを多く含む 径5～10mmの焼土粒をまばらに含む 径5mm程店の炭化物をまばらに含む	埋土2層の下 焼土よりも下 埋土3層の下

第7号竪穴住居跡

層名	土色	粒度	含有物	備考
埋土1	2.5Y3/2 黒褐色	シルト	木炭粒を含む	
埋土2	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	木炭粒、焼土粒を含む	
埋土3	2.5Y3/2 黒褐色		木炭粒を含む	
埋土4	10Y R2/2	粘質シルト	木炭粒、ローム粒を含む	
埋土5	10Y R2/1 黒色	粘質シルト	木炭粒、ローム粒を含む	径5mm以下のロームブロックと黒色土のまじり 人為的な可能性あり
埋土6	10Y R2/1 黒色			

第2図版 山王囲遺跡遺構配置図（A～D、K区）

Plans and sections of archaeological features in the Sanno-gakoi site



J区北壁

層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
1	10Y R4/1 褐灰色	シルト	弱	中	径約1mmの礫と径1mmの石英粒を少量含む	
2	10Y R3/3 暗褐色	シルト	弱	強	径2～3mmの白色粒子をまばらに含む 沼鉄を多量に含む	
3	10Y R3/2 黒褐色	シルト	弱	強	径2～3mmのマンガンを少量含む	
4	10Y R8/1 灰白色	シルト	弱	中	沼鉄をわずかに含む	一部に分布する 層厚は3～5cmである
5	10Y R4/2 灰黄色	砂質シルト	弱	中	沼鉄をわずかに含む	
6	10Y R5/3 にぶい黄褐色	粘質シルト	中	中	径1～2mmのマンガンをまばらに含む 沼鉄を少量含む	
7	10Y R5/2 灰黄褐色	粘土	中	中	径2～3mmのマンガンをわずかに含む 沼鉄を少量含む	
9	10Y R3/1 黒褐色	粘土	中	中	径3～5mmの炭化物を少量含む	

I区

層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
2	7.5Y R5/8 明褐色	シルト	弱	強	鉄分を多量に含む	
3	10Y R5/2 灰黄褐色	シルト	中	強	マンガンを含む 径1～2.5mm(南壁にくらべ、大きめ)の白色粒子をまばらに含む	
4	10Y R7/2 にぶい黄橙色	シルト	中	弱	灰白色火山灰をブロック状に多く含む 植物の根の痕跡が多くみられた	
5a	10Y R5/1 褐灰色	シルト	中	強	マンガンを含む 鉄分が多く、縦方向に微細なクラックが多数みられる 白色粒子(径1～2mm)をわずかに含む	
5b	7.5Y R6/2 灰褐色	シルト	中	強	鉄分が縦方向に細かく入る白色土粒がやや入る	西側で6、7層を削っている痕跡がみられる また、西側では徐々に土粒が粗くなっており、時間をかけて堆積した水成堆積層と考えられる
6	10Y R4/2 灰黄色	粘土	強	強	鉄分が縦方向にやや太めに入る 径2-3mmのマンガンをまばらに含む	弥生土器の小破片がまばらに出土した 一部で白色砂粒がラミナ状に堆積する水成堆積層
7	7.5Y R6/2 灰褐色	粘土	強	強	鉄分が縦方向に太めに入るマンガンを多く含む	6層より土色が明るい
7b	5Y R4/8 赤褐色	粘土	弱	強	上部に砂利が多く、下部に鉄分を多量に含む	南側付近では植物の根の痕跡がみられた 北側と南側に偏って分布し中央部で薄い
8	10Y R4/2 灰黄色	粘土	強	強	炭化物を含む	北側と南側に偏って分布し中央部で薄い 西側で土手状に高まり畦畔状遺構がみられる 山王団層式土器を多く出土する
9	7.5Y R1.7/1 黒色	粘土	強	強	炭化物を多量に含む 鉄分をやや多く含む	
11	—	礫	—	—	径5cm程度の礫が多い	

F区西壁北側

層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
1	10Y R4/2 灰黄褐色	砂質シルト	弱	強		層厚は7cmである 盛土前表土
2	7.5Y R4/4 褐色	砂質シルト	弱	強	10Y R5/2灰黄褐色土ブロックが斑状に多く含まれる	層厚は3cmである
3	10Y R4/2 灰黄色	砂質シルト	弱	強	径5mm程の黒色土粒(マンガン)を多量に含む	層厚は1.5cmである 南側では径1mm程の赤色粒をかなり含む
4	10Y R7/2 にぶい黄橙色				灰白色火山灰 南側では径1mm程の赤色土粒とブロック状の白い土が混在する	
5a	10Y R5/1 褐灰色	シルト			径2mm程の赤色土粒をかなり含む 1～2cmの白色土ブロックをところどころに含む 径2～5mm程のマンガンを含む	
6b	10Y R3/3 暗褐色	粘土質シルト			径2～3mm程の赤色粒を含む 径1～2mm程のマンガンをまばらに含む	
7	7.5Y R6/2 灰褐色	粘土質シルト	中~強	強	赤色土を斑状に含む 径5mm程のマンガン粒をまばらに含む径1mmの白色土粒をわずかに含む 径1mmの黒色(マンガン)土粒を少量含む	層厚は5cmである
9	7.5Y R3/2 黒褐色	シルト	中	強	黄色土をブロック状に含む	

F区西壁南側

層名	土色	粒度度	粘性	しまり	含有物	備考
1	10Y R4/2 黄褐色	砂質シルト	弱	中	径2～3mm程の赤色土粒を含む	
2	7.5Y R4/4 褐色	砂質シルト	弱	中		ところどころに1層の土が混入し、斑状になっている
3	10Y R4/2 灰黄色	砂質シルト	弱	中	径1mm程の赤色土粒をかなり含む 径2～3mm程のマンガンを若干含む	
4		砂質シルト	弱	中	径1mm程の赤色土粒と白色土ブロックが混在	
5a		砂質シルト	弱	中	径2mm程の赤色土粒をかなり含む 1～2cmの白色土ブロックをところどころに含む 径2～5mm程のマンガン粒を含む	
6b		砂質シルト	弱	中	径2～3mm程の赤色土粒を含む 径1～2mm程のマンガン粒をまばらに含む	
9						

E区

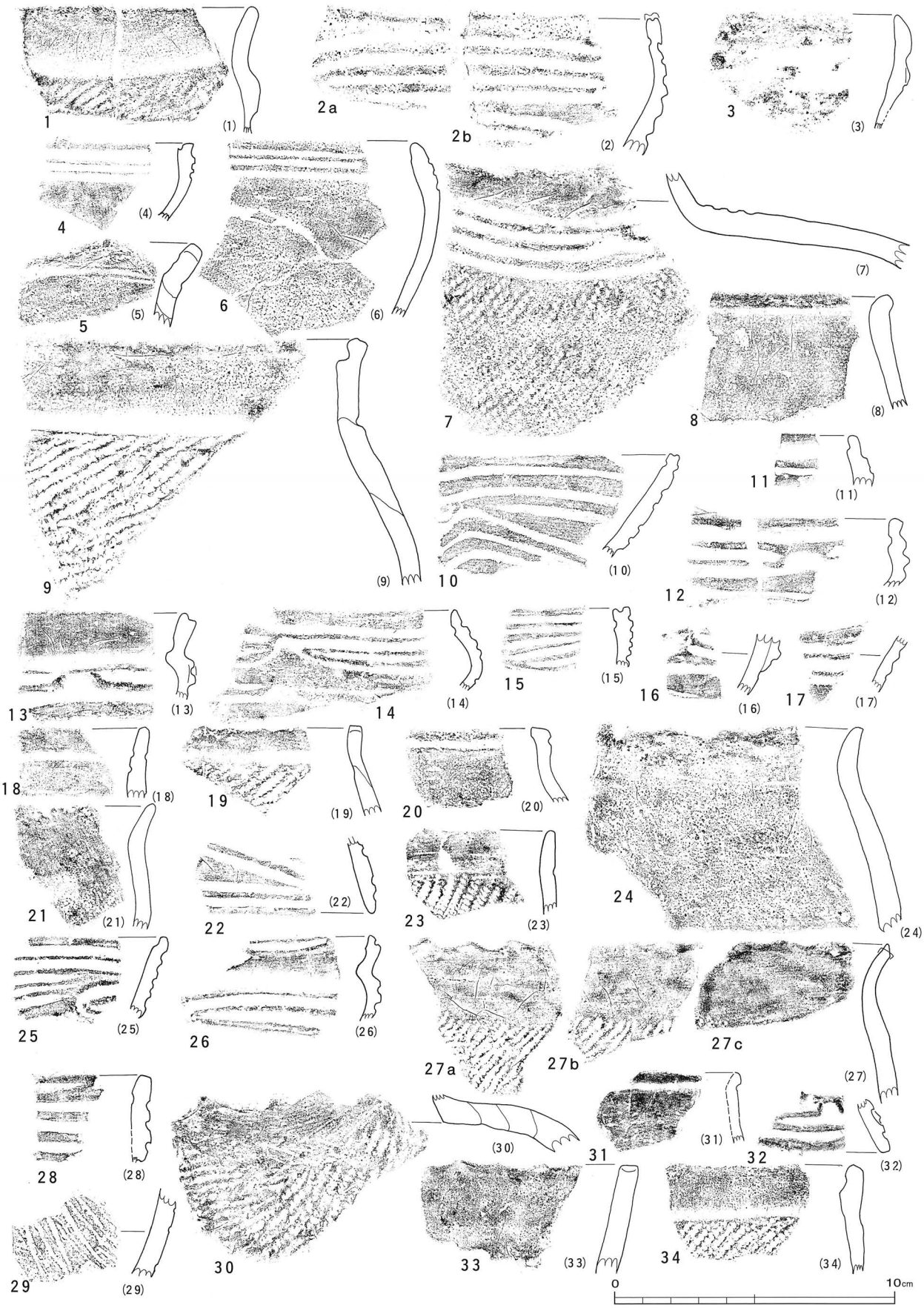
層1名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
1	10Y R4/2 灰黄褐色	砂質シルト	弱	中	縦方向にのびる酸化鉄を含む
2	7.5Y R4/4 褐色	砂質シルト	弱	強	10Y R5/2黄褐色を斑状に多く含む
3	10Y R4/ 2 灰黄色	砂質シルト	弱	強	径1mm程の赤色粒をかなり含む
4	10Y R7/2 にぶい黄橙色	砂質シルト	弱	中	径1mm程の赤色粒とブロック状の白い土が混在する
1C溝埋土	10Y R4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	弱	中	酸化鉄、マンガンを多く含む第4号溝に対応する可能性がある
5a	10Y R4/2 灰褐色	砂質シルト	弱	中	
6b	10Y R3/3 暗褐色	粘土質シルト	弱	中	
焼土	10Y R3/2 暗褐色	シルト	中	中	径1～2cm程の焼土粒を多く含む 径5～10mm程の炭化物を多く含む
9	7.5Y R3/2 黒褐色	シルト	中	強	径1～3cm程の黄褐色土粒を含む 黄色土をブロック状に含む

G区西壁

層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
1		シルト	弱	中	径2～3mmの礫を含む 径1mmの石英粒をまばらに含む	層厚は10～15cmである
2	7.5Y R3/4 暗褐色	シルト	弱	中	径1mmの白色粒子をわずかに含む 沼鉄を多量に含む	層厚は4～5cmである
3	10Y R5/2 灰黄褐色	シルト	弱	中	径2～3mmのマンガンを少量含む	層厚は5～6cmである
4	10Y R7/2 にぶい黄橙色	砂質シルト	弱	中	径1mmのマンガンをわずかに含む 沼鉄を少量含む	層厚は2～3cmである
5	7.5Y R6/2 灰褐色	砂質シルト	弱	中	沼鉄をわずかに含む	層厚は15～20cmである
6	10Y R4/2 灰黄色	砂質シルト	やや中	中	径1～2mmのマンガンをまばらに含む 沼鉄を少量含む	層厚は15～30cmである
7	7.5Y R6/2 灰褐色	粘土	やや中	中	径1～2mmのマンガンをわずかに含む	層厚は10～15cmである
8	10Y R4/2 灰褐色	粘土	中	中	径1～2mmのマンガンと炭化物を少量含む 黒色粘土と白色粘土がブロック状に混じる	層厚は2～3cmである
9	7.5Y R1.7/1 黒色	粘土	中	中	径2～3mmの炭化物を少量含む	層厚は5～6cmである
10	10Y R7/6 明黄褐色	シルト質砂～砂	弱	弱		土色は変異が広く、西よりの区ほど黒味が強く、東よりの区ほど黄色味が強くなる傾向がある E、F区では黄褐色、細粒である 一部に河川堆積による礫群、シルト質粘土がラミナ状に含まれ、細分される可能性がある

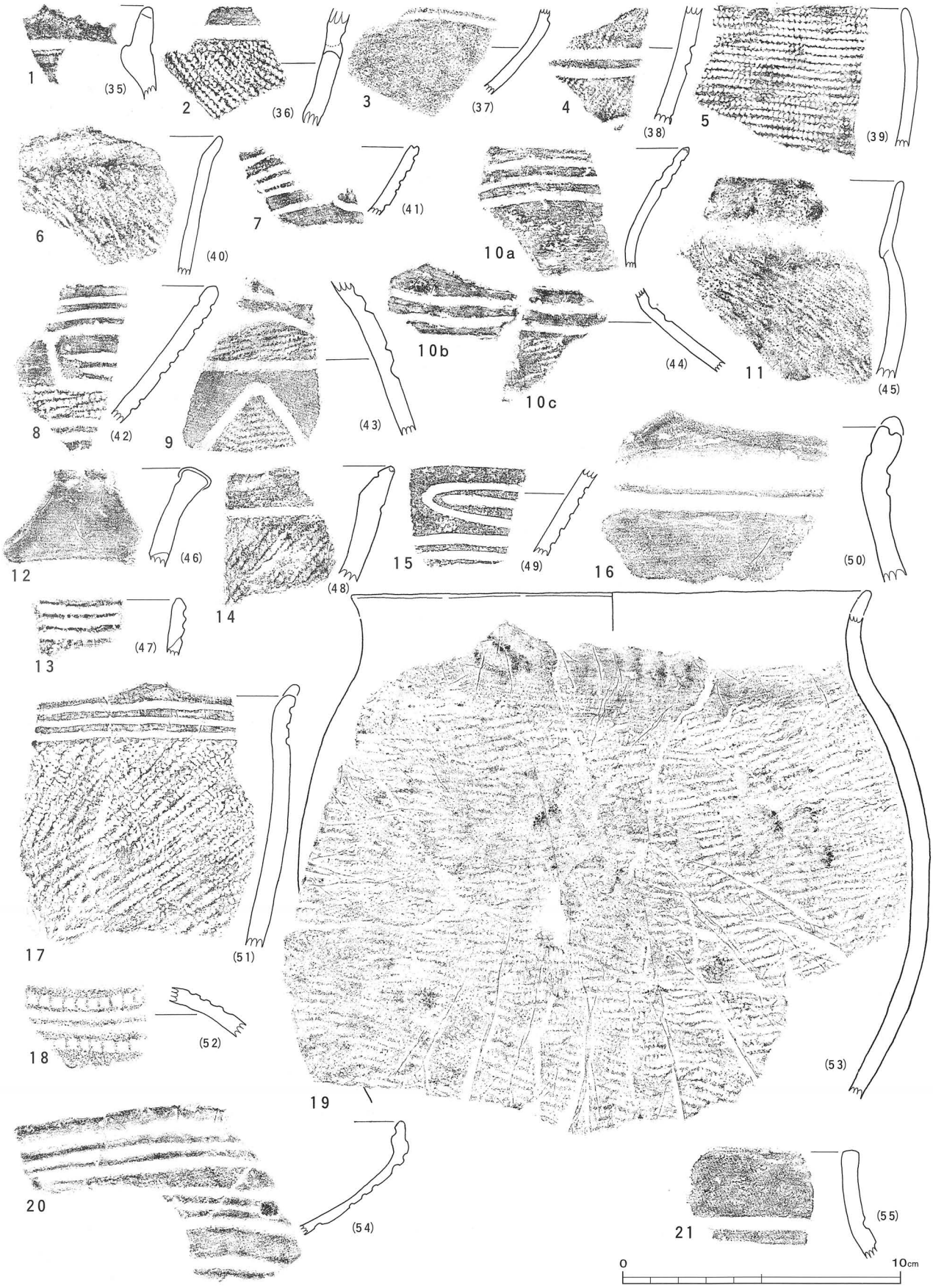
第3図版 山王囲遺跡遺構配置図（E～J区）

Plans and sections of archaeological features in the Sanno-gakoi site



第4図版　山王囲遺跡出土土器拓影（C区、D区）
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

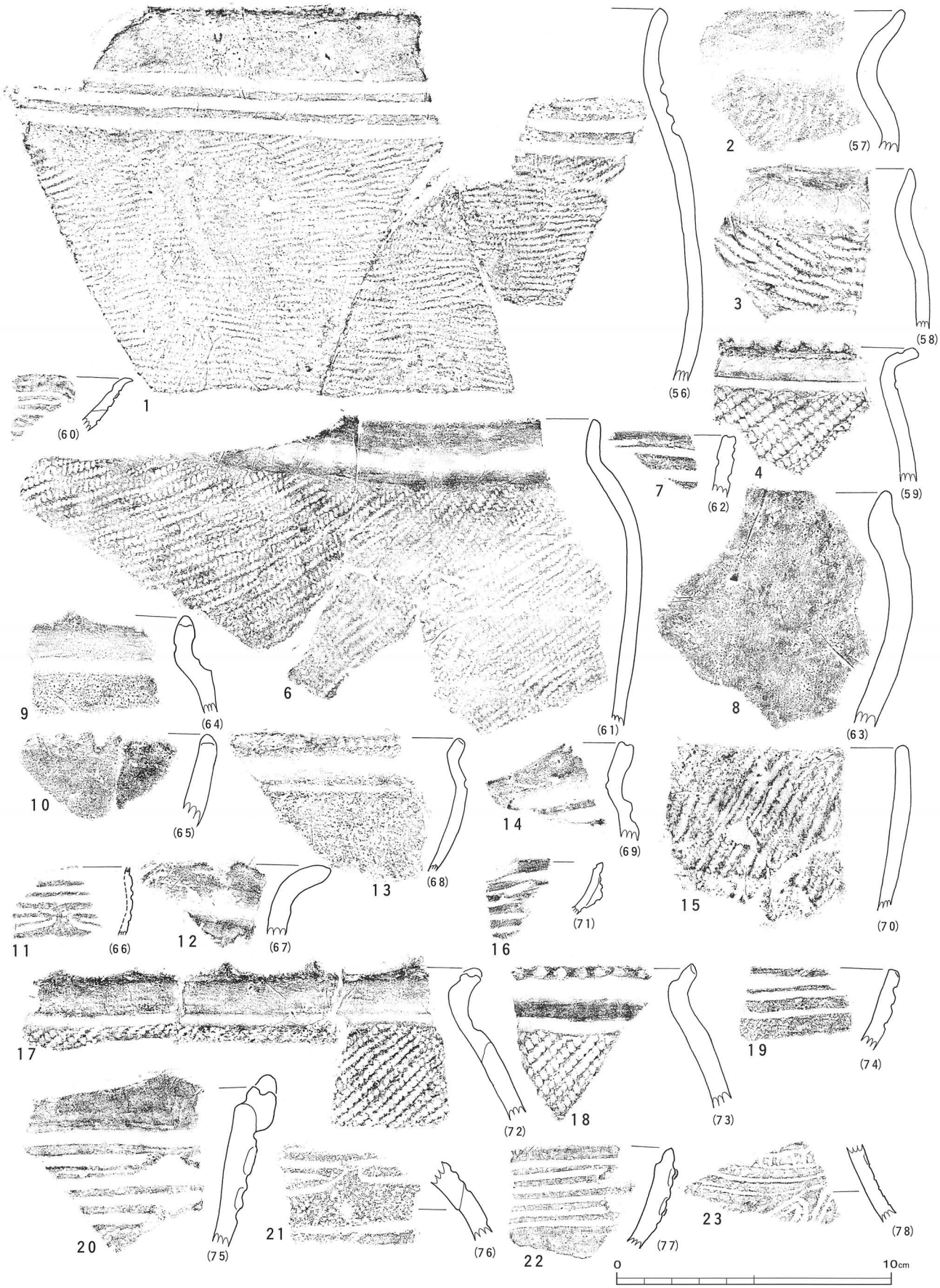
1～4　C区ピット3　5～7　ピット8　8・9　ピット9
10　ピット12　11　C区第4号溝跡　12～21　D区ピット14
22～27　ピット42　28～34　D区第4号溝跡



第5図版　山王囲遺跡出土土器拓影（D～G区）

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

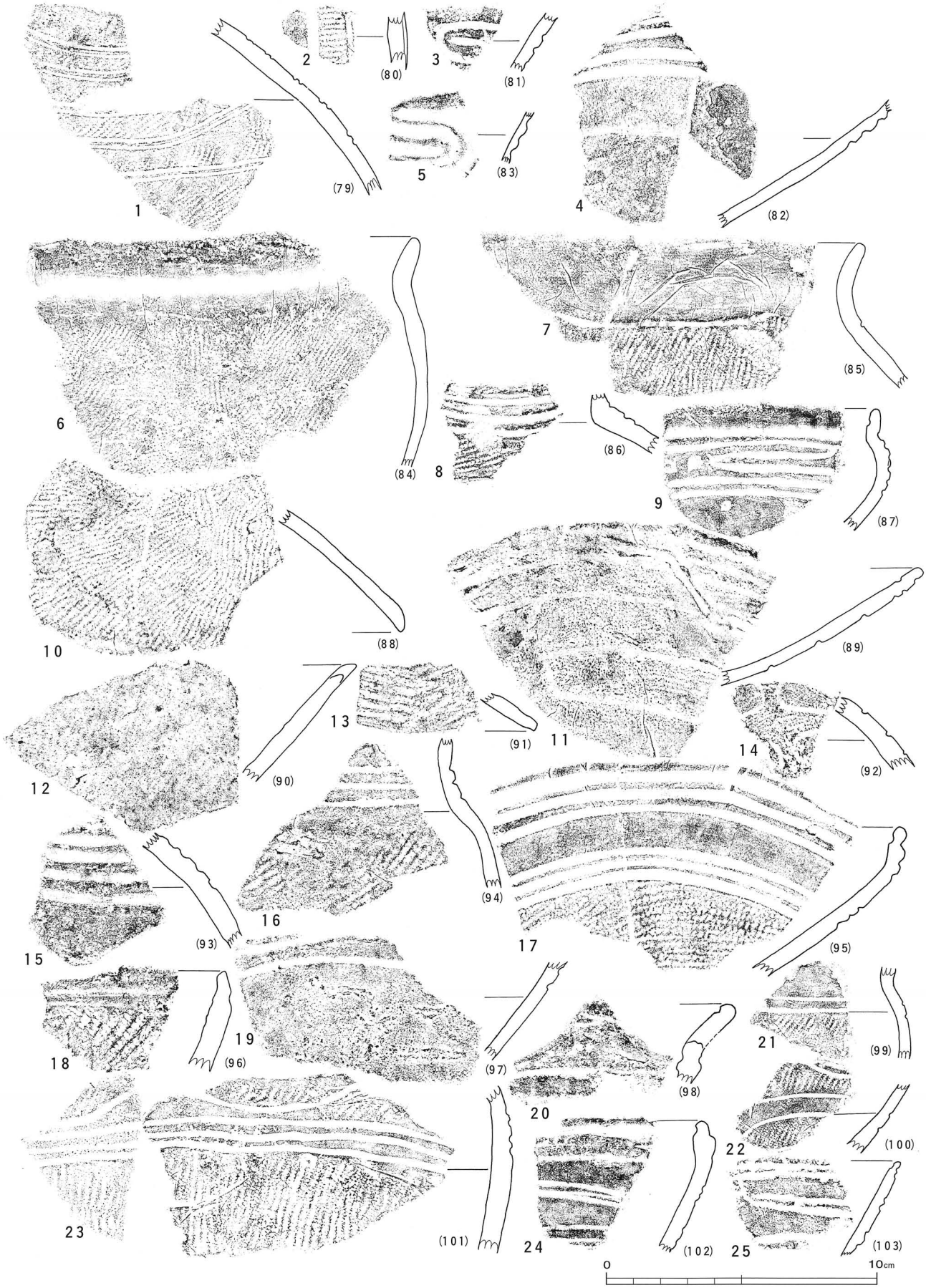
1・2 D区第4号溝跡　3 E区ピット37　4～11 F区第2号竪穴住居跡
12 ピット46　13 ピット47　14 ピット155　15・16 第4号溝跡　17・18 H区ピット152
19 G区第4号土器埋設土壙　20 ピット162　21 第1号配石遺構



第6図版　山王囲遺跡出土土器拓影（C、E～G区、K区）

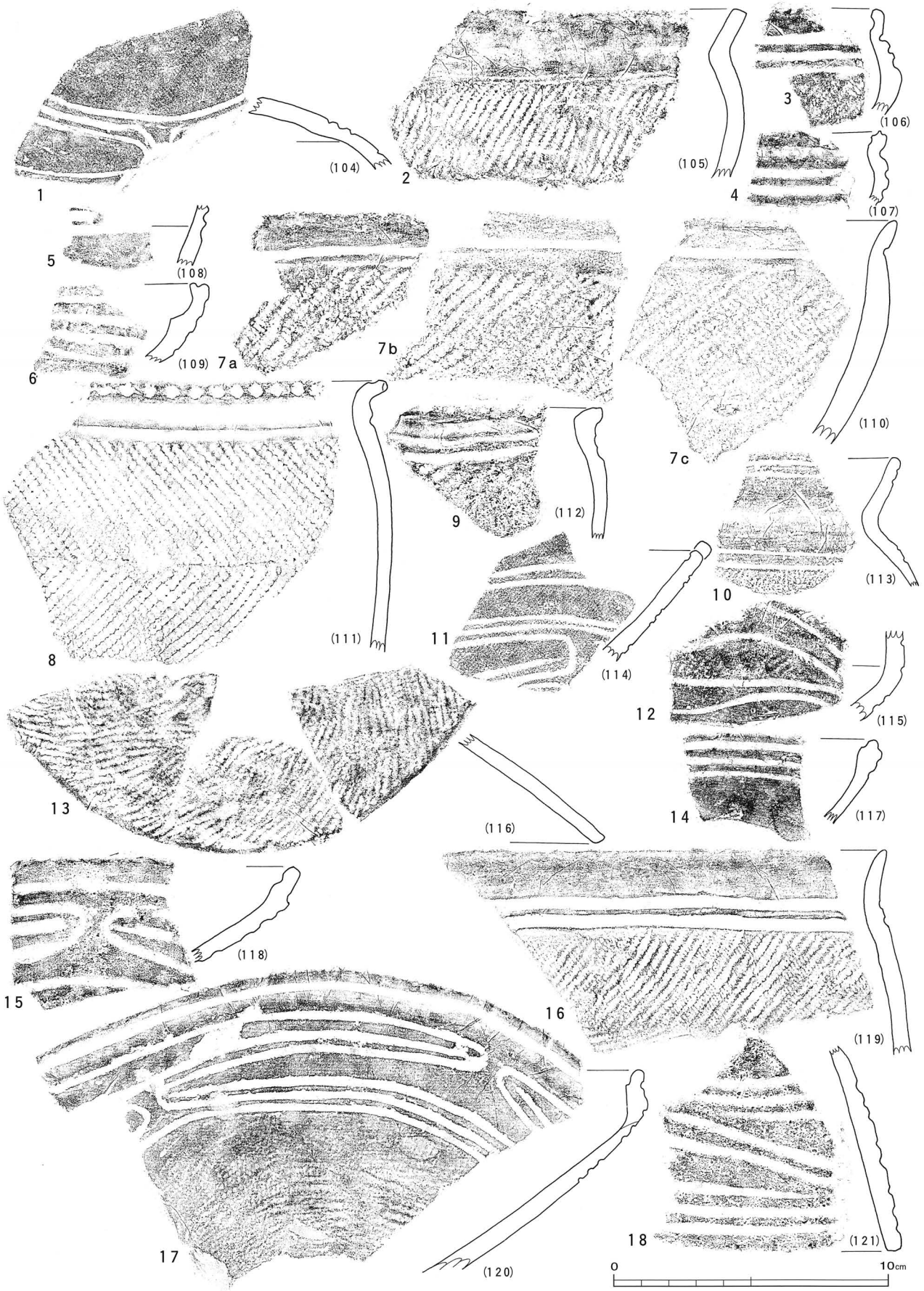
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 G区第1号配石遺構　2 第2号溝跡　3・4 K区ピット156　5～7 ピット187 -8-ピット189
9 ピット190　10 ピット192　11 ピット196　12 ピット198　13 ピット200　14 ピット202
15 ピット204　16 ピット205　17 ピット206　18 ピット214　19 ピット216　20 C区包含層



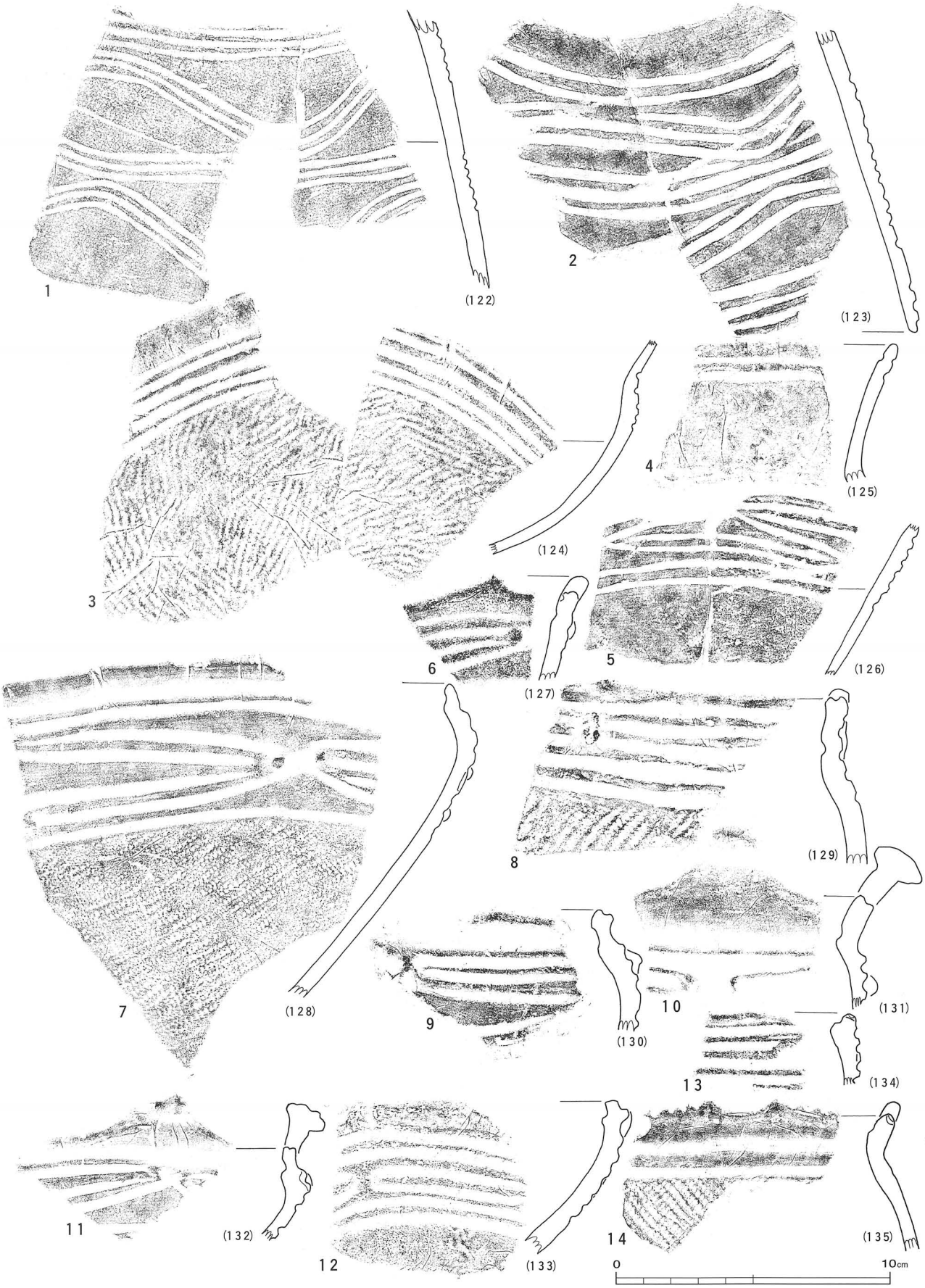
第7図版　山王囲遺跡出土土器拓影（E～K区）
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1～5　F区包含層　6・7　H区包含層　8・9　G区包含層
10～17　I区包含層　18～20　J区包含層
21～25　K区包含層確認面（7、8層の上部）



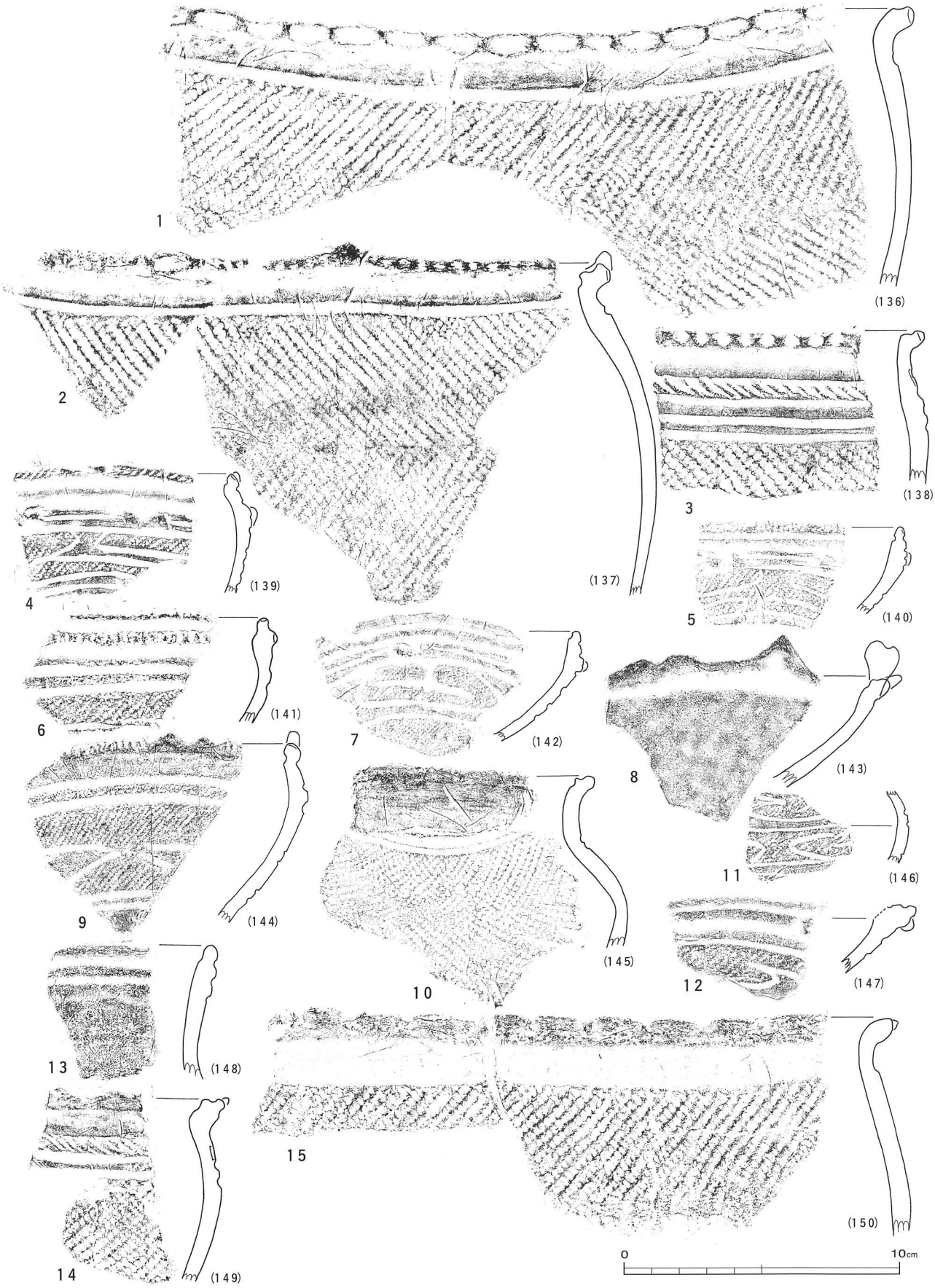
第8図版　山王囲遺跡出土土器拓影（K区）
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1～9　K区包含層確認面（7、8層の上部）
10～18　K区包含層（7、8層）



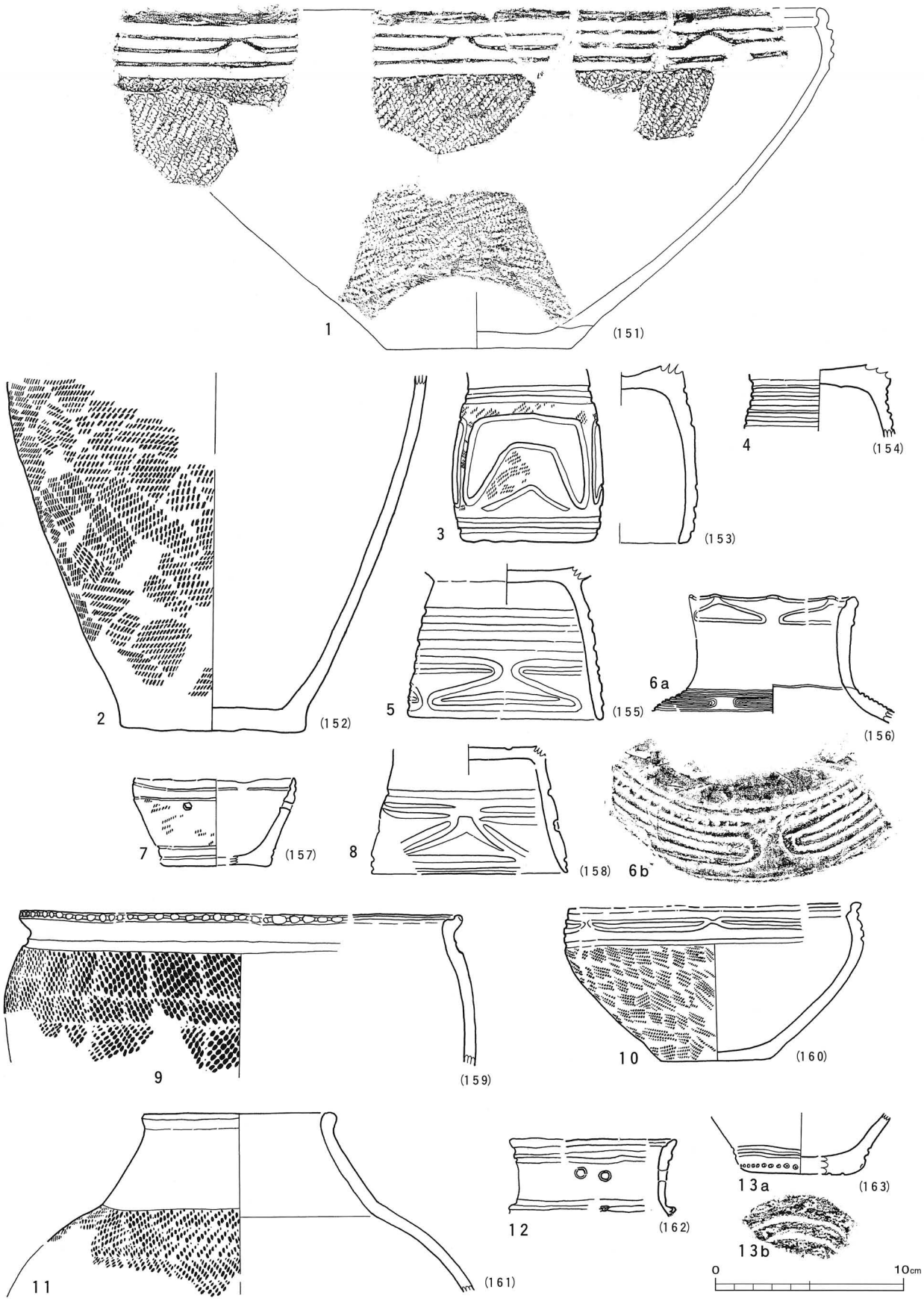
第9図版　山王囲遺跡出土土器拓影（K区）　　1～14 K区包含層（7、8層）

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



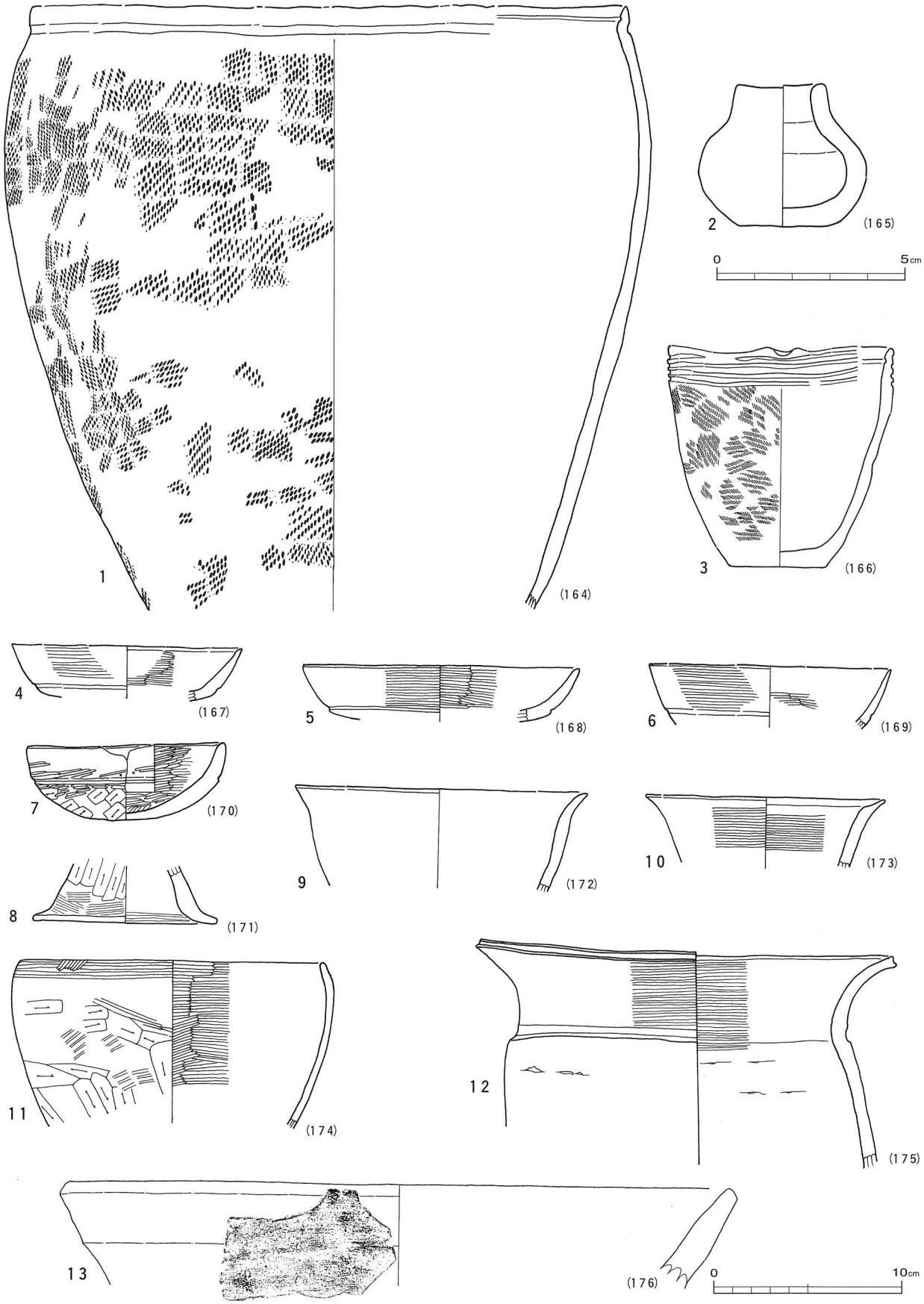
第10図版　山王囲遺跡出土土器拓影（K区）
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1～12 K区包含層（7、8層）
13～15 K区遺構検出面（8層下部から9層）



第11図版　山王囲遺跡出土土器実測図（D、E、G、K区）
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

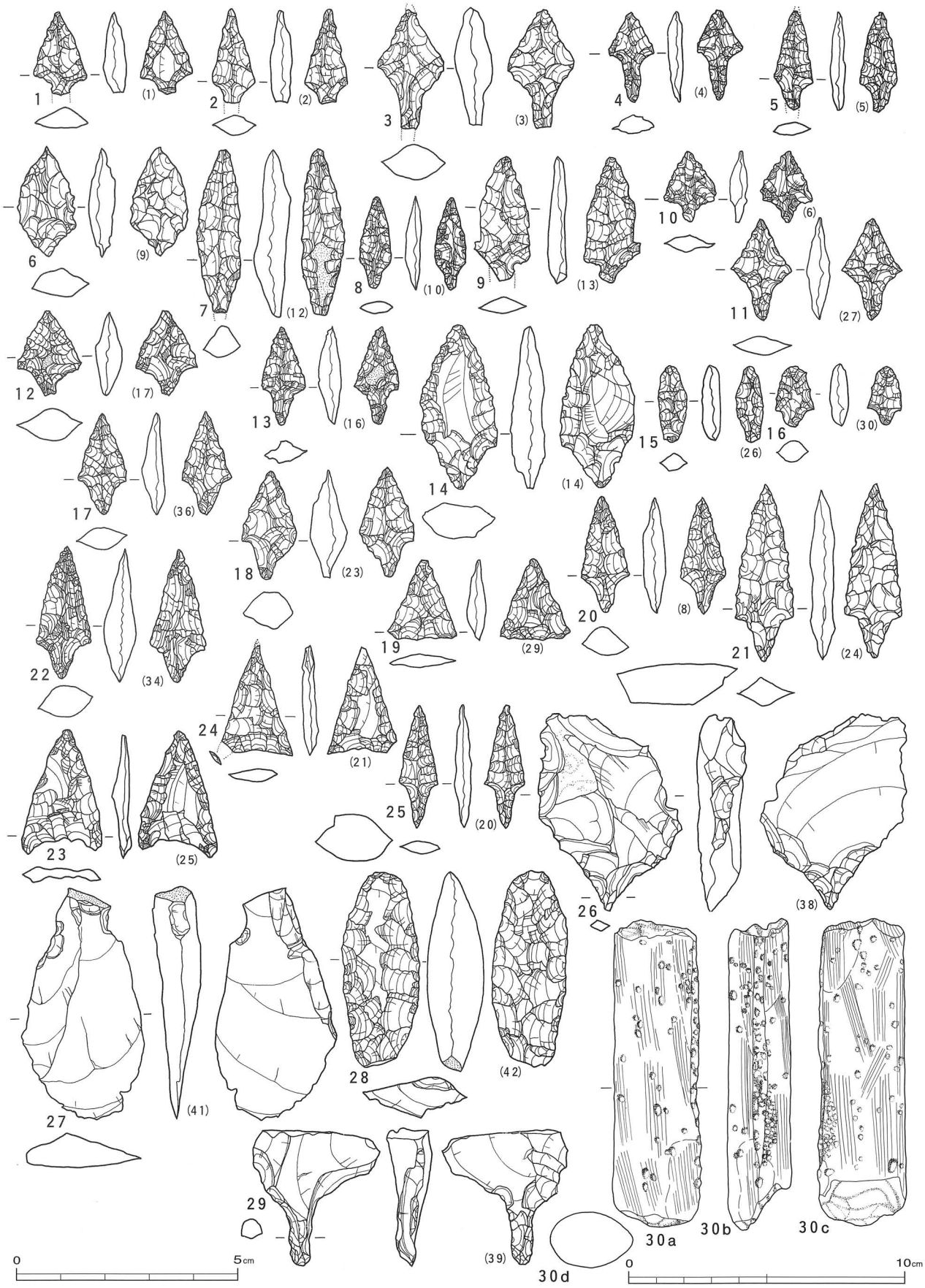
1 E区第1号土器埋設土壙　2 G区第2号土器埋設土壙
3 第5号土器埋設土壙　4 K区ピット209　5 ピット156　6 D区2層
7 G区第2号溝跡　8 G区9層上面　9～13 K区包含層（7、8層）



第12図版　山王囲遺跡出土土器実測図（A、C、G、K区）

Jomon and Yayoi pottery, Haji and ceramic ware from the Sanno-gakoi site

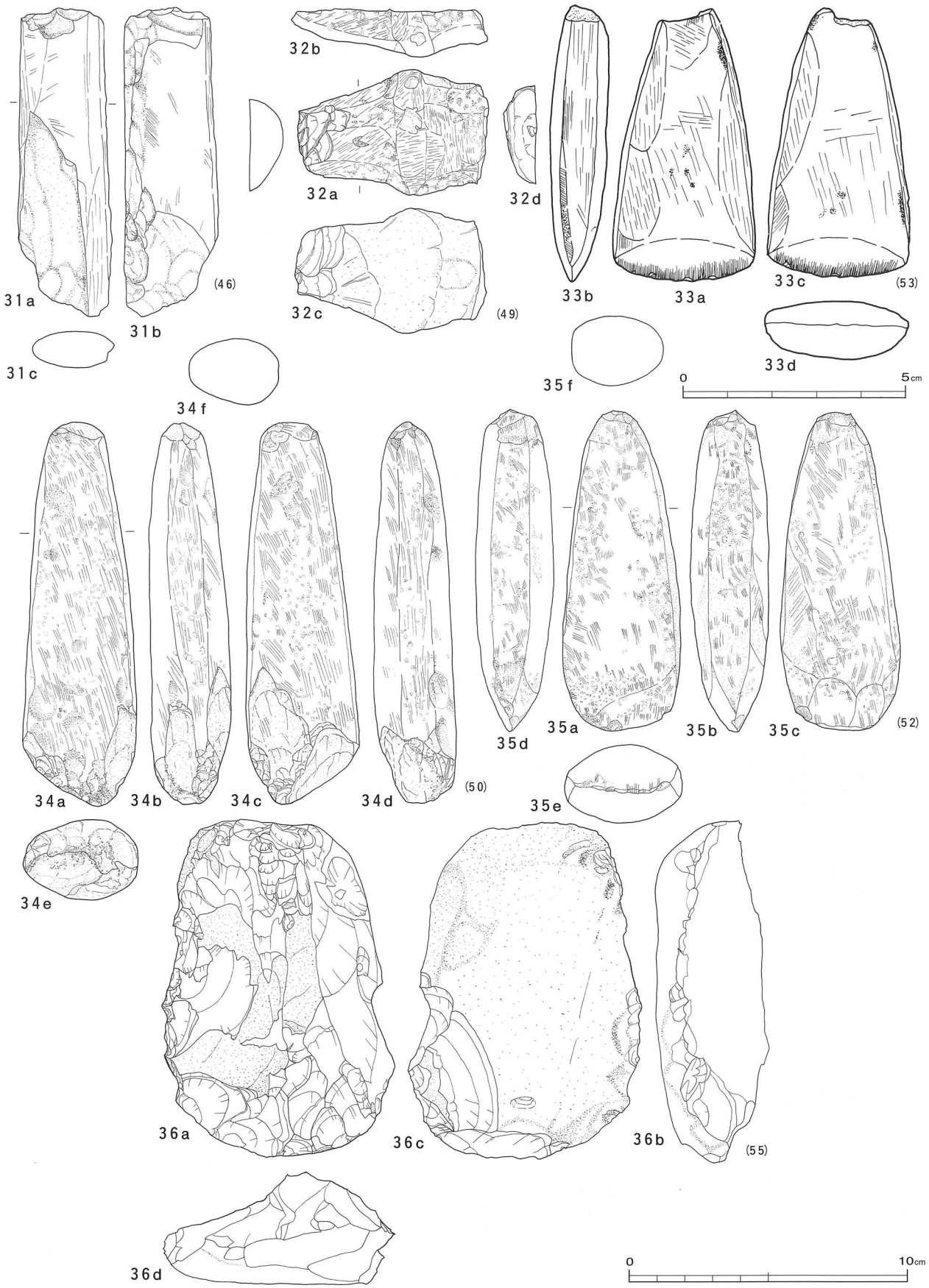
1 K区第6号竪穴住居跡　2 K区包含層（7、8層）
3 G区第3号土器埋設土壙　4～6 A区第1号竪穴住居跡
7～12 C区ピット9　13 G区第2号溝跡



第13図版　山王囲遺跡出土石器

Stone implement from the Sanno-gakoi site

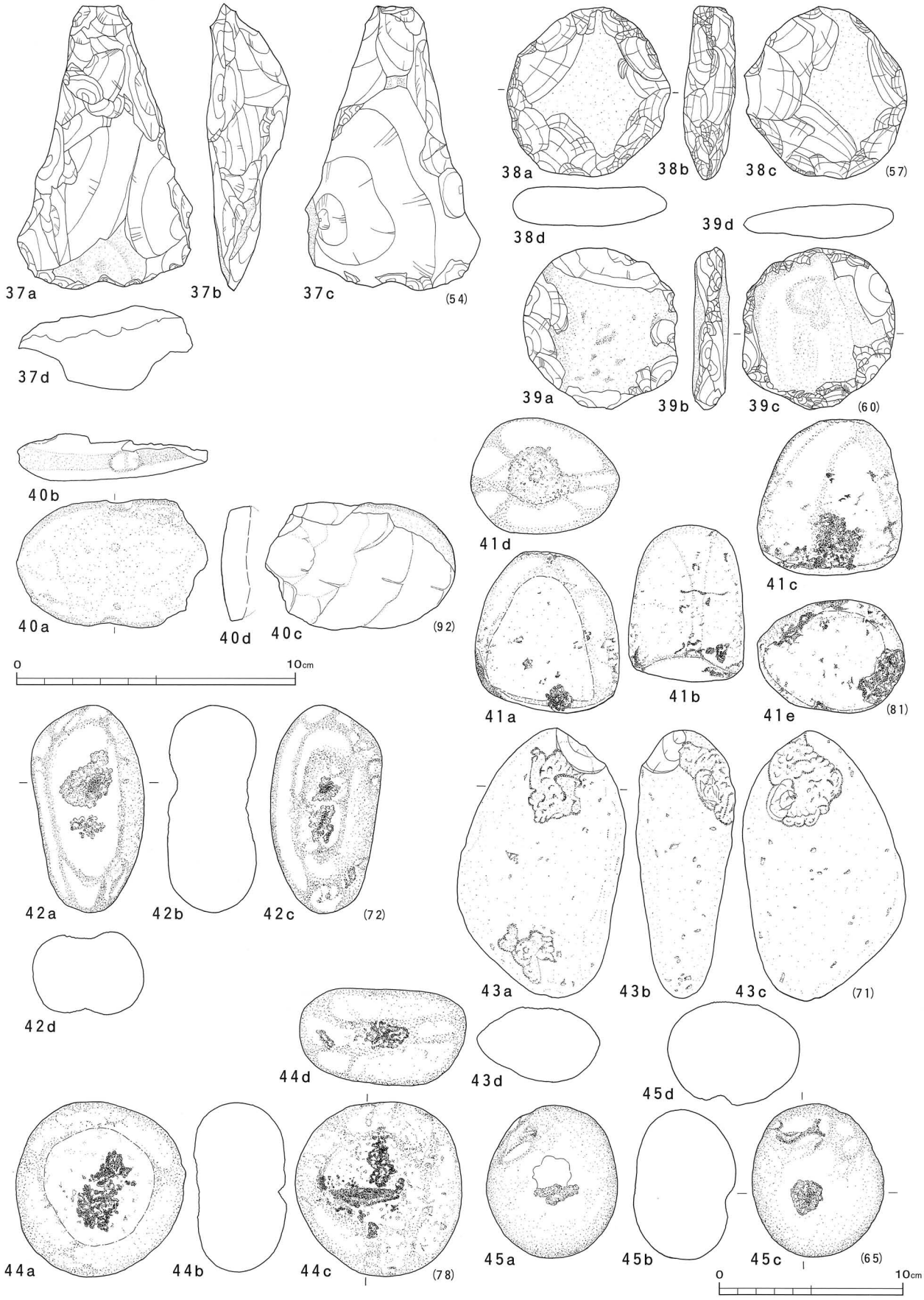
1～25 石鏃 arrowhead　26•29 石錐 drill
27 石匙 tanged stone scraper　28 楕円形両面加工石器 oval biface
30 石刀 sword-shaped stone implement



第14図版　山王囲遺跡出土石器

Stone implement from the Sanno-gakoi site

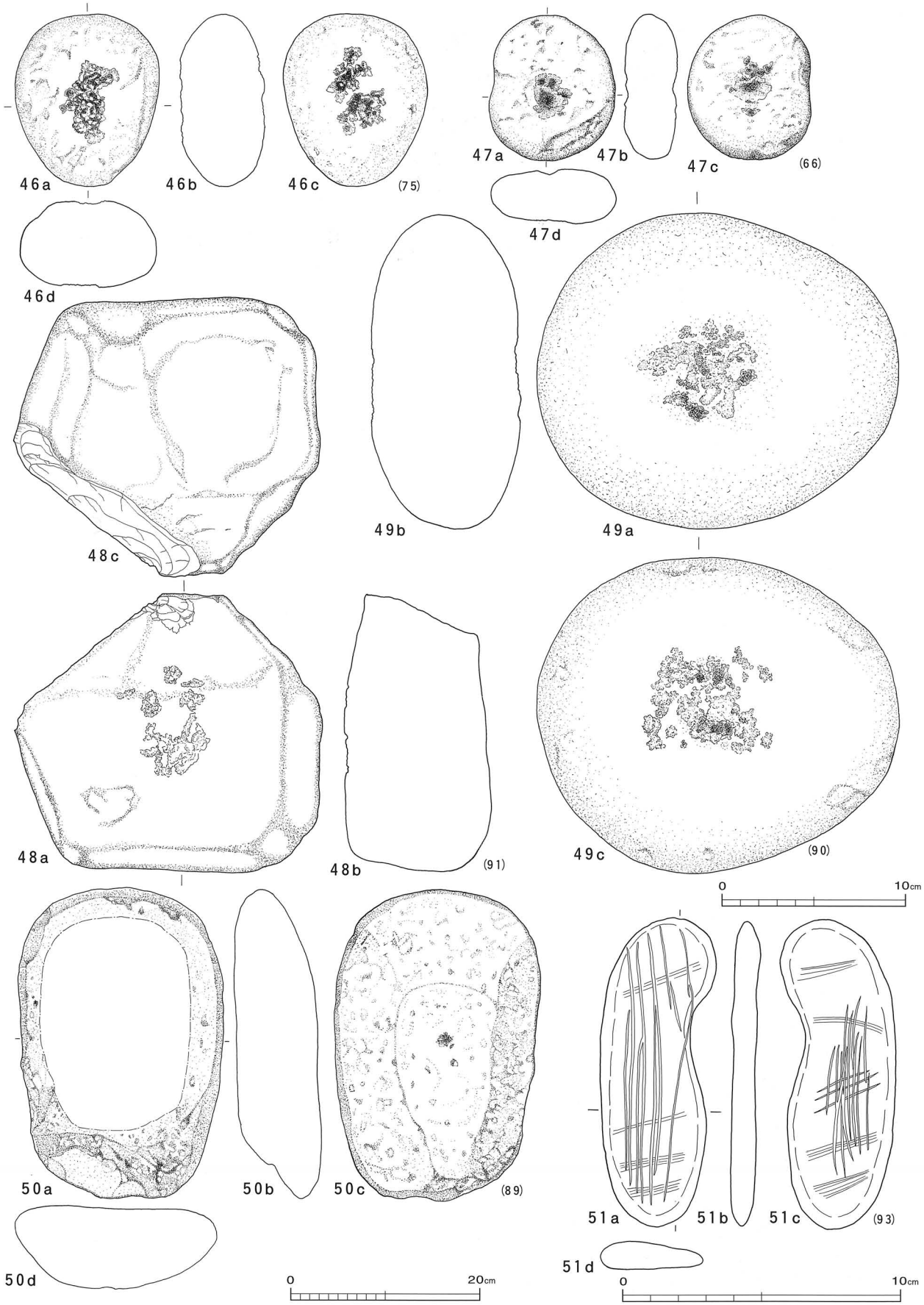
31 石刀 sword-shaped stone artifact　32 独鈷石 double-edged stone axe
33～35 磨製石斧 grinding stone axe　36 打製石斧 chipped stone axe



第15図版　山王囲遺跡出土石器

Stone implement from the Sanno-gakoi site

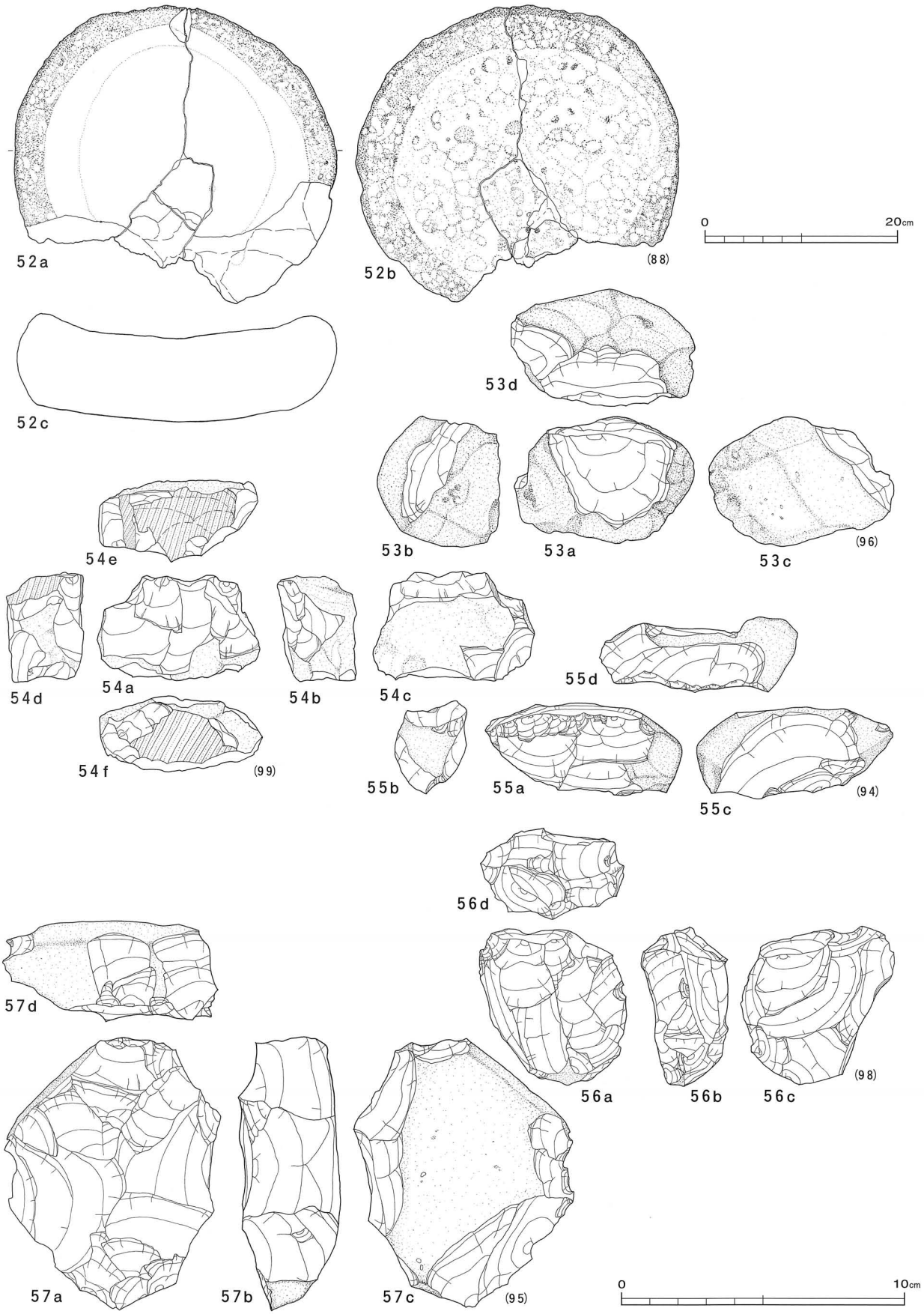
37 打製石斧 chipped stone axe　38•39 円盤状石製品 disc-shaped stone artifact
40 石錘 stone weight　41 磨石 grinding stone
42•44•45 凹石 cobbles with indention　43 敲石 hammerstone



第16図版　山王囲遺跡出土石器

Stone implement from the Sanno-gakoi site

46～49 凹石 cobbles with indention
50 石皿 grinding slab　51 線刻礫 engraved pebble



第17図版　山王囲遺跡出土石器

Stone implement from the Sanno-gakoi site

52 石皿 grinding slab　53～57 石核 core

写　真　図　版

写真図版縮尺

PL. 5　山王囲遺跡出土土器
1・2　2/3　5　1/3　4～7　3/5　8　4/5

PL. 6　山王囲遺跡出土土器
1　2/5　2～6　1/2

PL. 7　山王囲遺跡出土土器
1　1/2　2～6　1/2

PL. 8　山王囲遺跡出土土器、土製品
1　3/5　2　1/2　3・4　3/5　5　1/2
6～12　1/1

PL. 9～17　山王囲遺跡出土土器
1・2　5/9

PL. 18　山王囲遺跡出土石器
1～25　1/1　26～30　1/2　31～37　1/2

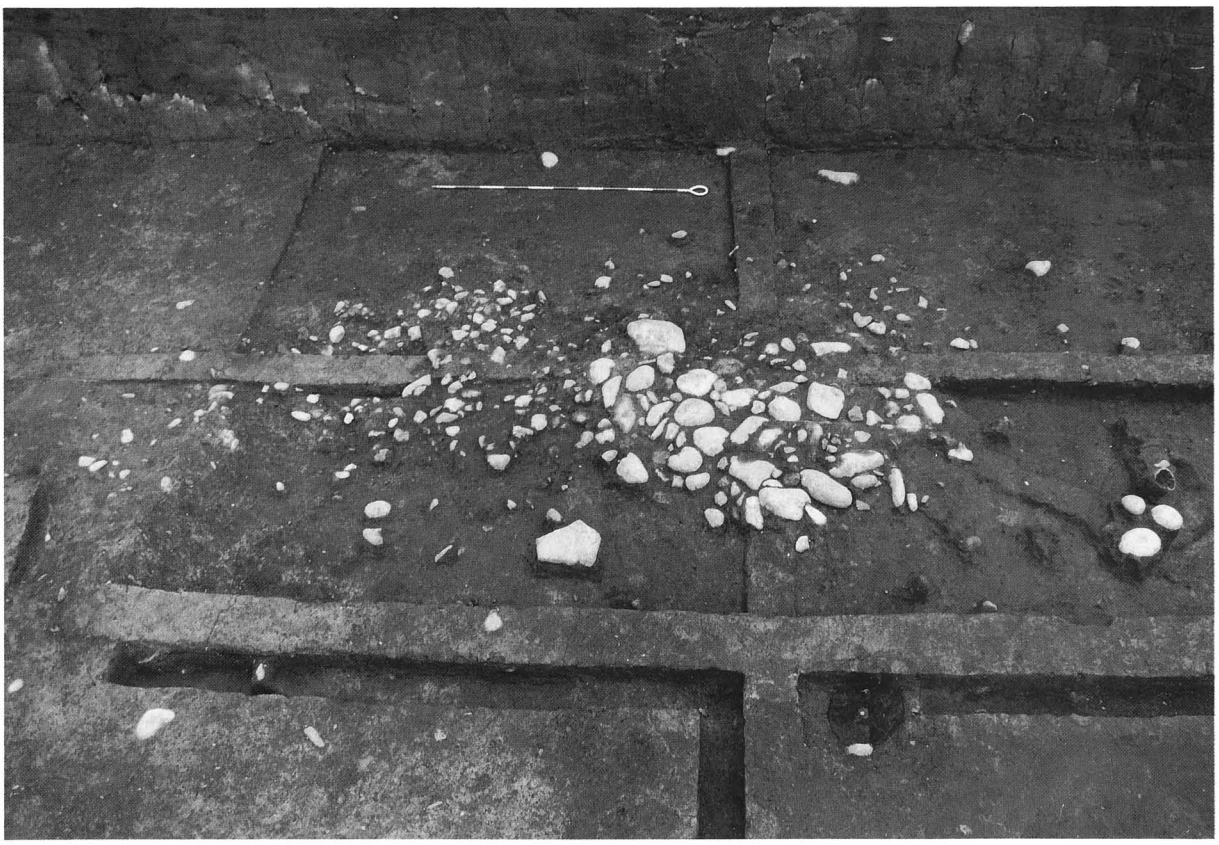
PL. 19　山王囲遺跡出土石器
1～4　4/5　5～9　1/2　10～18　1/3
19・20　1/4

1　山王囲遺跡航空写真（南から）

2　F区第２、３号竪穴住居跡（東から）

PL. 1　山王囲遺跡航空写真及び第２、３号竪穴住居跡
Aerial photograph of the Sanno-gakoi site and pit dwelling 2 and 3

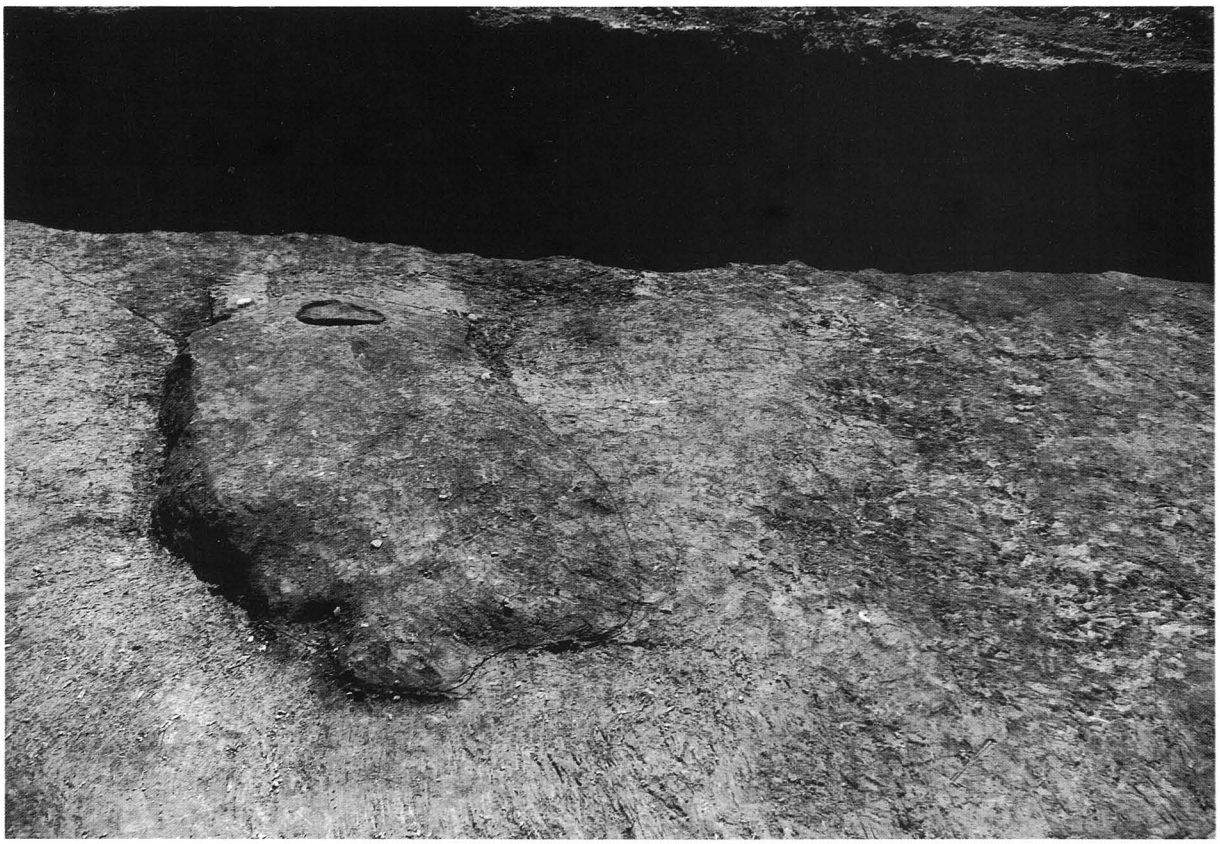
1　G区全景（南から）



2　G区第１号配石遺構（西から）

PL. 2　G区全景及び第１号配石遺構
View of excavated trench and stony feature 1

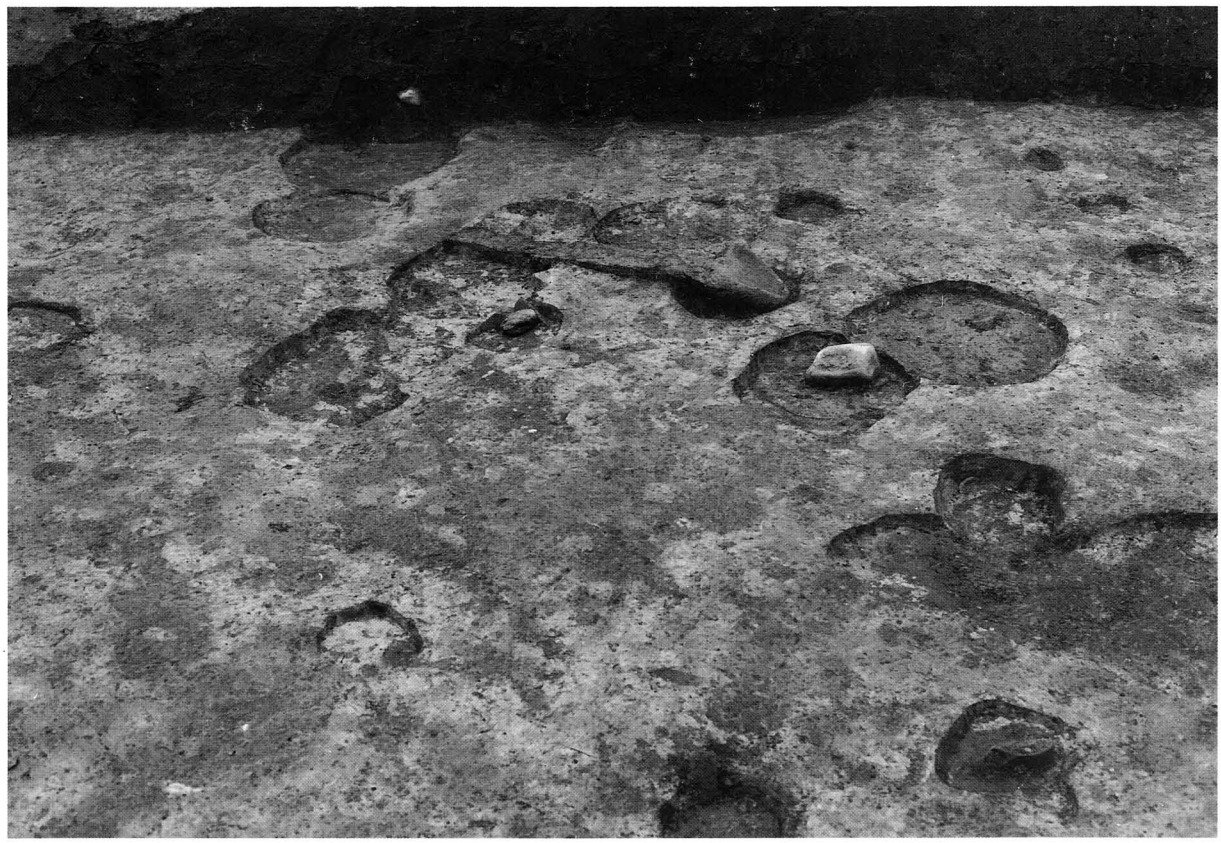
1　Ⅰ区全景（西から）



2　畦畔状遺構（北から）

PL. 3　Ⅰ区全景及び畦畔状遺構
View of excavated trench and the levee-like feature

1　K区全景（西から）



2　第5号竪穴住居跡（南から）

PL. 4　K区全景及び第5号竪穴住居跡
View of excavated trench and pit dwelling 5

PL. 5　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1・2・4～6・8　K区包含層　3　D区包含層
7　G区包含層

1 (151)

2 (152)

4 (153)

3 (166)

5 (155)

6 (157)

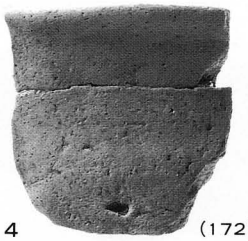
PL. 6　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1　E区第1号土器埋設土壙　2　G区第2号土器埋設土壙
3　第3号土器埋設土壙　4　第5号土器埋設土壙
5　K区ピット156　6　G区第2号溝跡

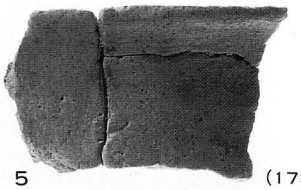
1 (164)

2 (169)

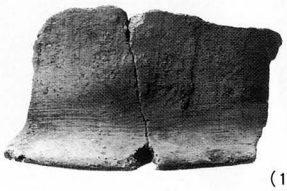
3 (167)



4 (172)



5 (173)



6 (171)

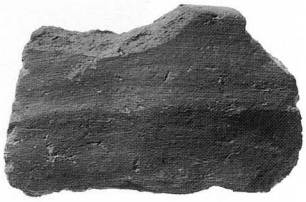
PL. 7 山王囲遺跡出土土器
Jomon pottery and Haji ware from the Sanno-gakoi site

1 K区第6号竪穴住居跡 2・3 A区第1号竪穴住居跡
4～6 C区ピット9

1 (175)

2 (174)

4 (170)



5a

3 (168)

5b (176)

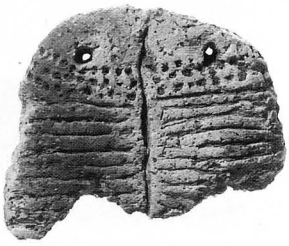
6

7

8

9 10

11

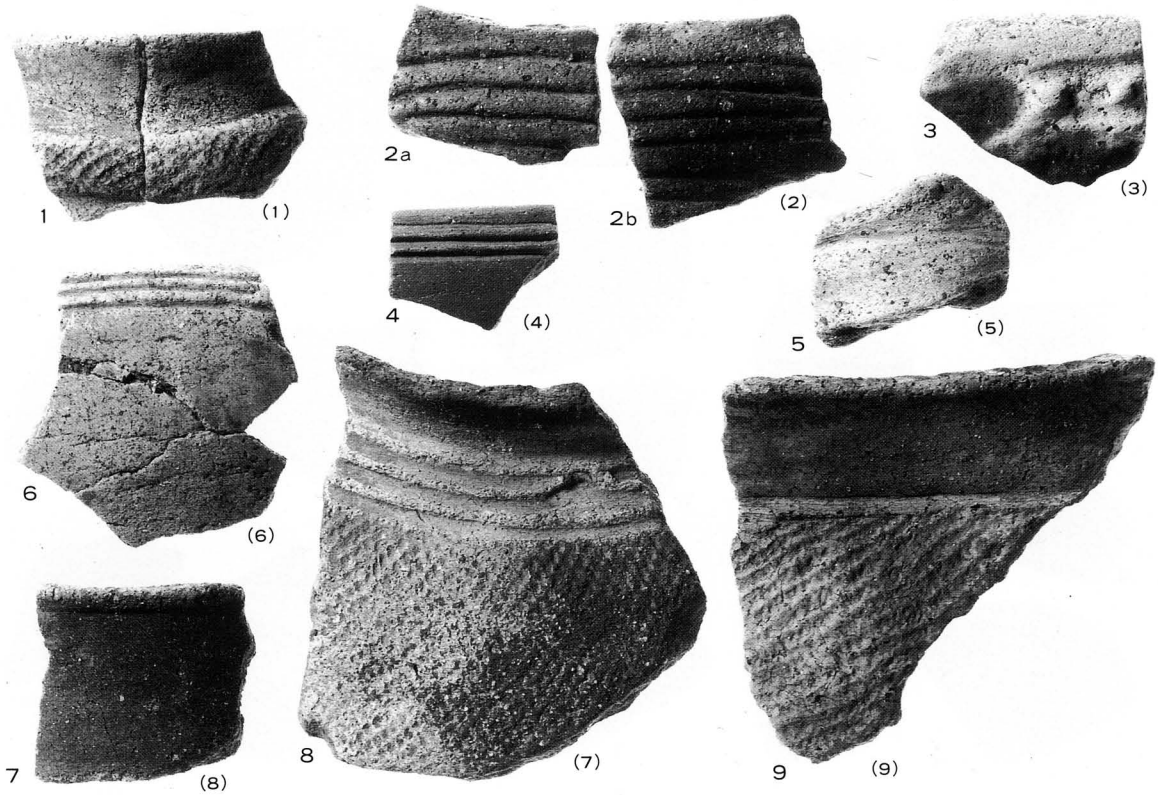


12

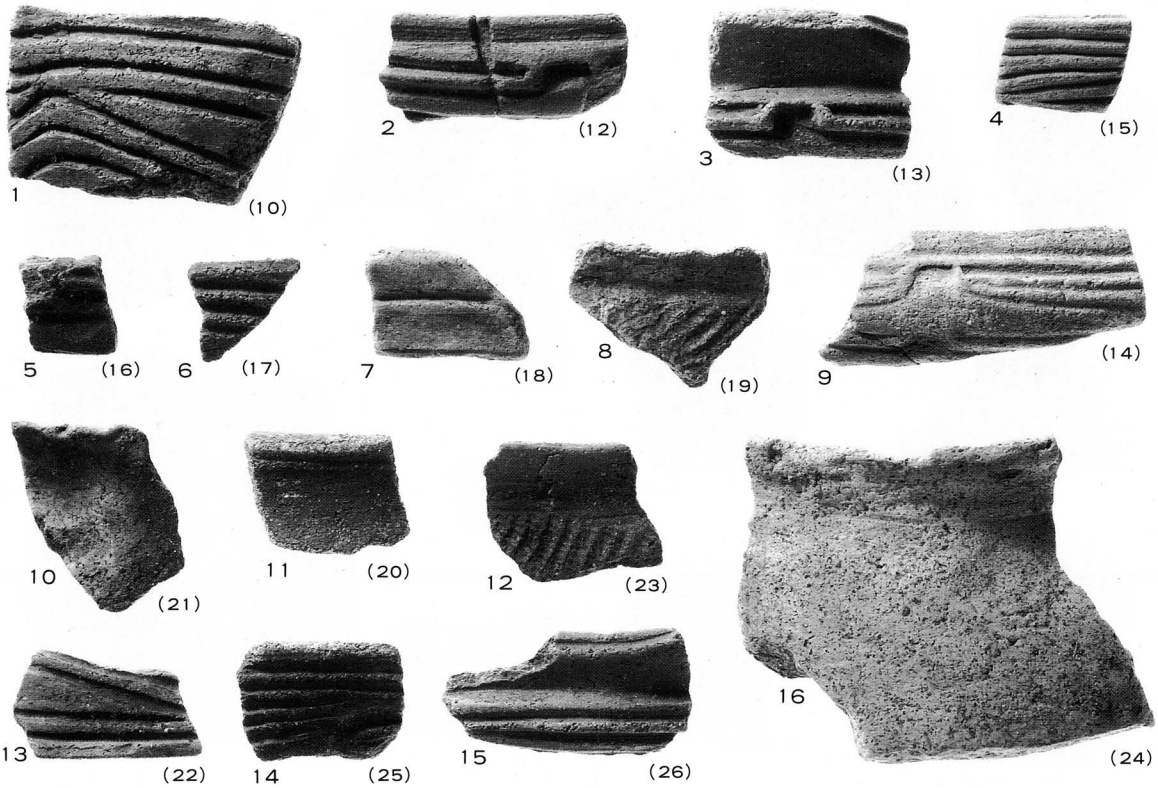
PL. 8　山王囲遺跡出土土器、土製品

Haji ware, ceramic ware and Clay object from the Sanno-gakoi site

1・2・4　C区ピット9　3　A区第1号竪穴住居跡
5　G区第2号溝跡　6・7・9・10　K区包含層
8　K区ピット191　11　C区ピット3　12　K区攪乱坑

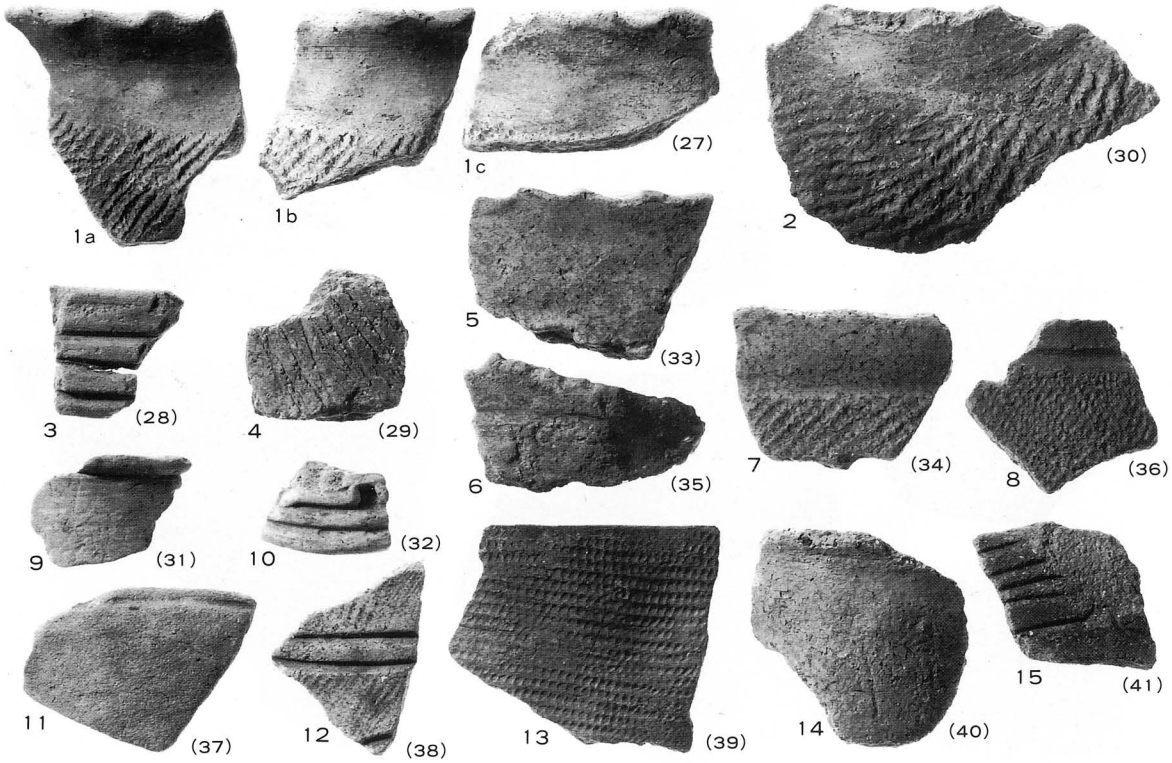


1　C、D区出土土器　　1～4 ピット3　5・6・8 ピット8　7・9 ピット9



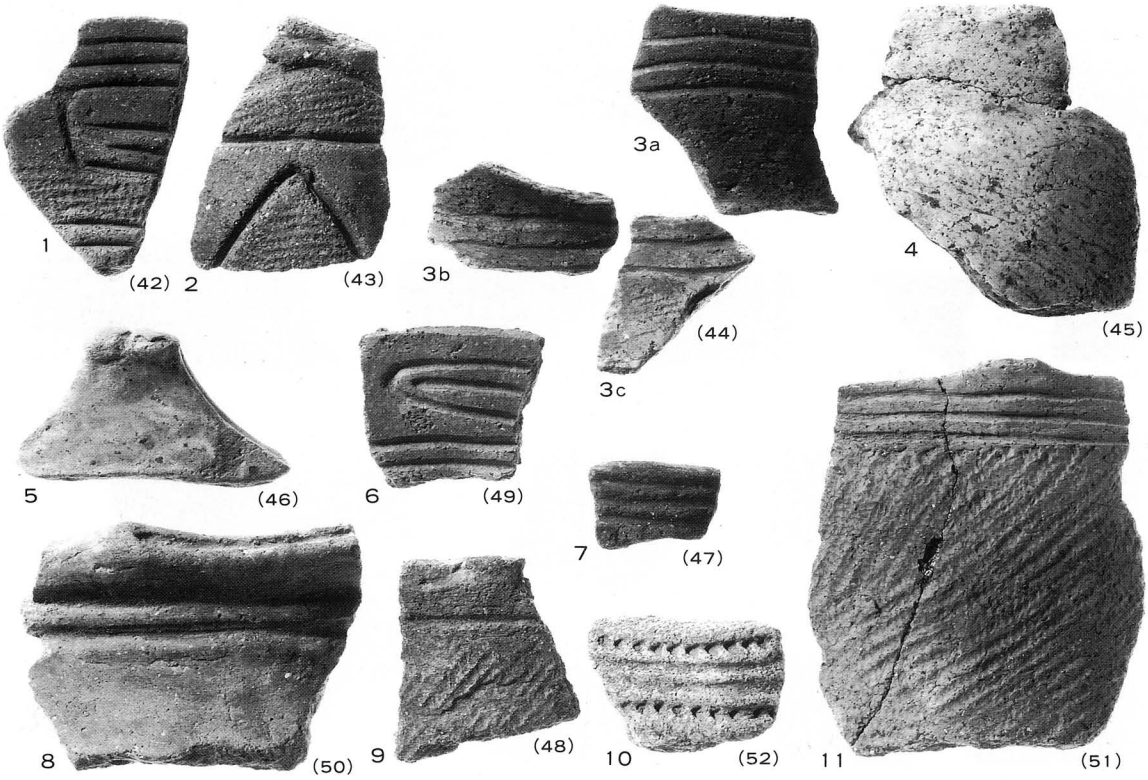
2　C、D区出土土器　　1 ピット12　2～11 ピット14　12～16 ピット42

PL. 9　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1　D～F区出土土器

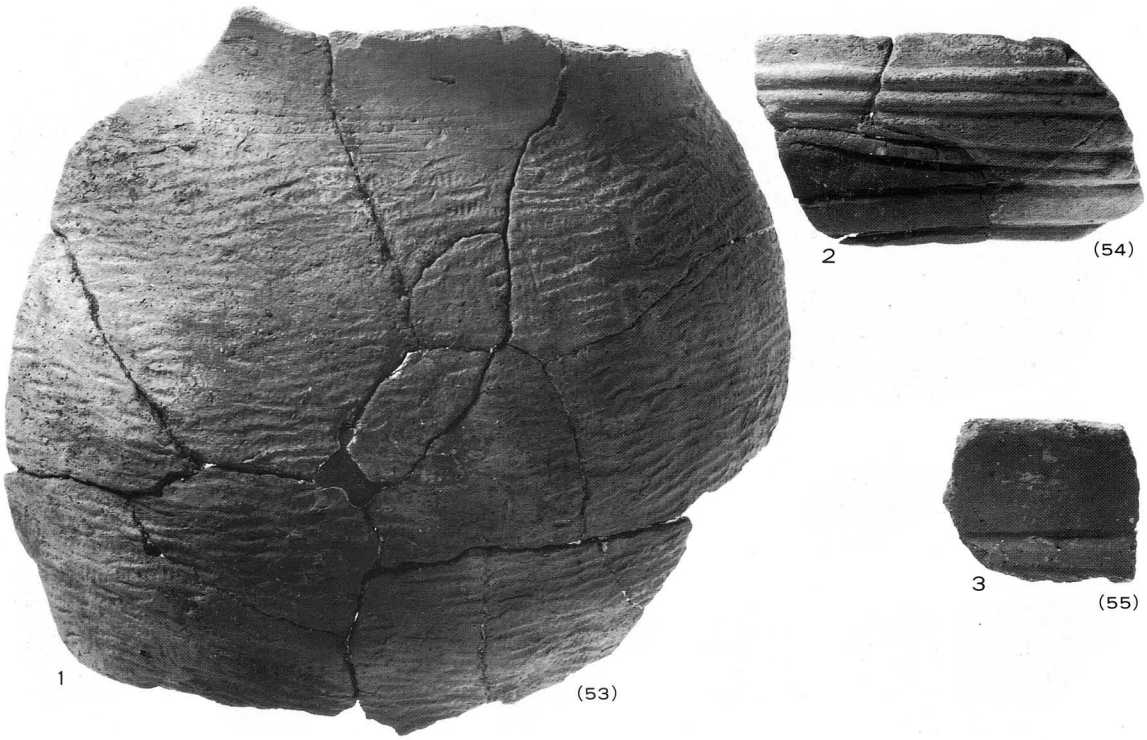
1　ピット42　2～10 第4号溝跡　11 ピット37　12～15 第2号竪穴住居跡



2　F、H区出土土器

1～4　第2号竪穴住居跡　5　ピット46　6・8　第4号溝跡
7　ピット47　9　ピット155　10・11　ピット152

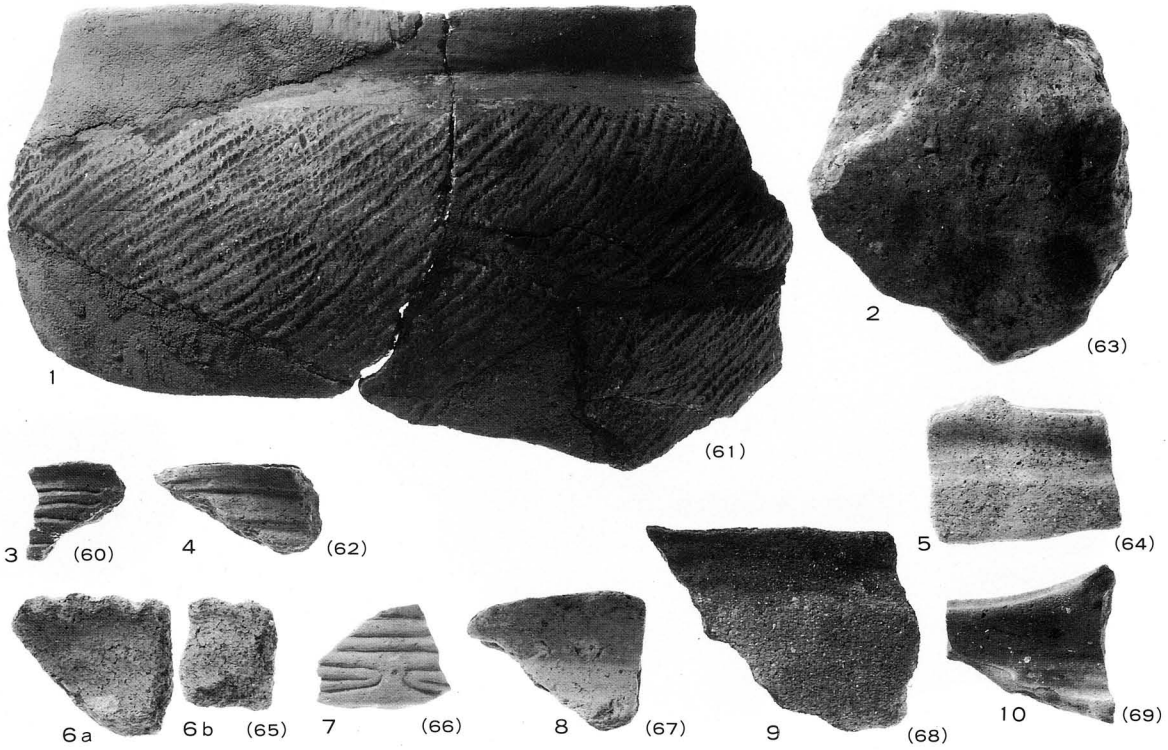
PL. 10　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1　G区出土土器　　1 第4号土器埋設土壙　2 ピット162　3 第1号配石遺構

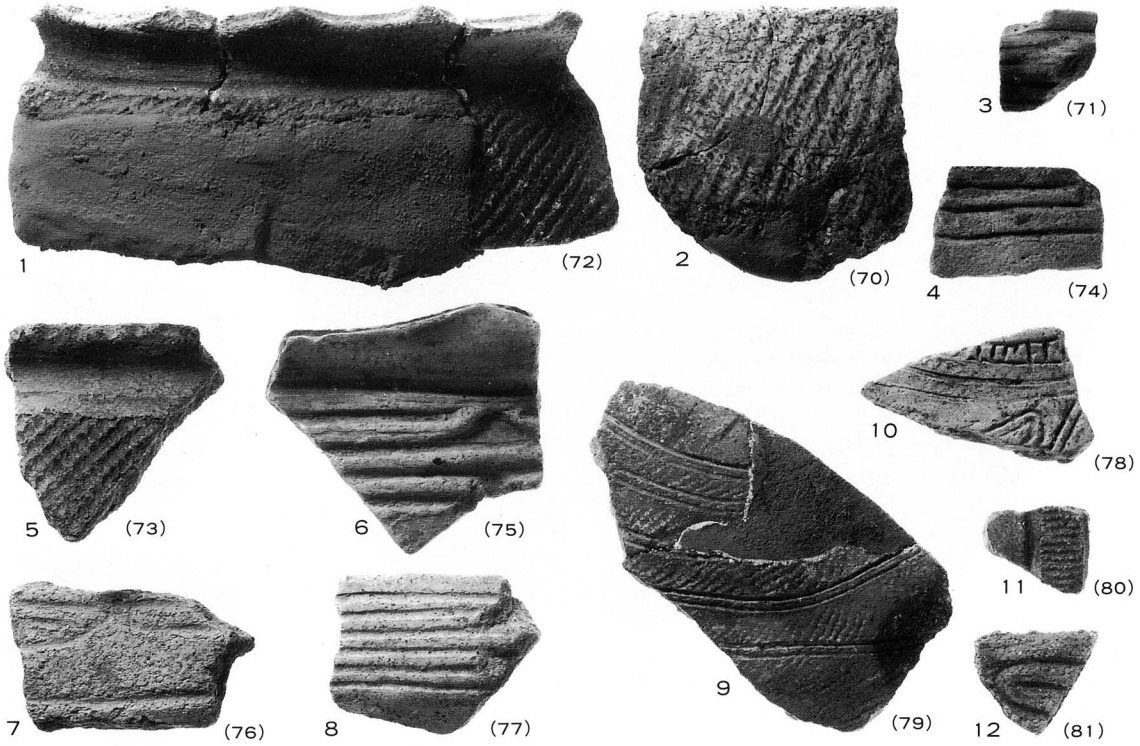
2　G区出土土器　　1 第1号配石遺構　2 第2号溝跡　3・4 ピット156

PL. 11　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1　K区出土土器

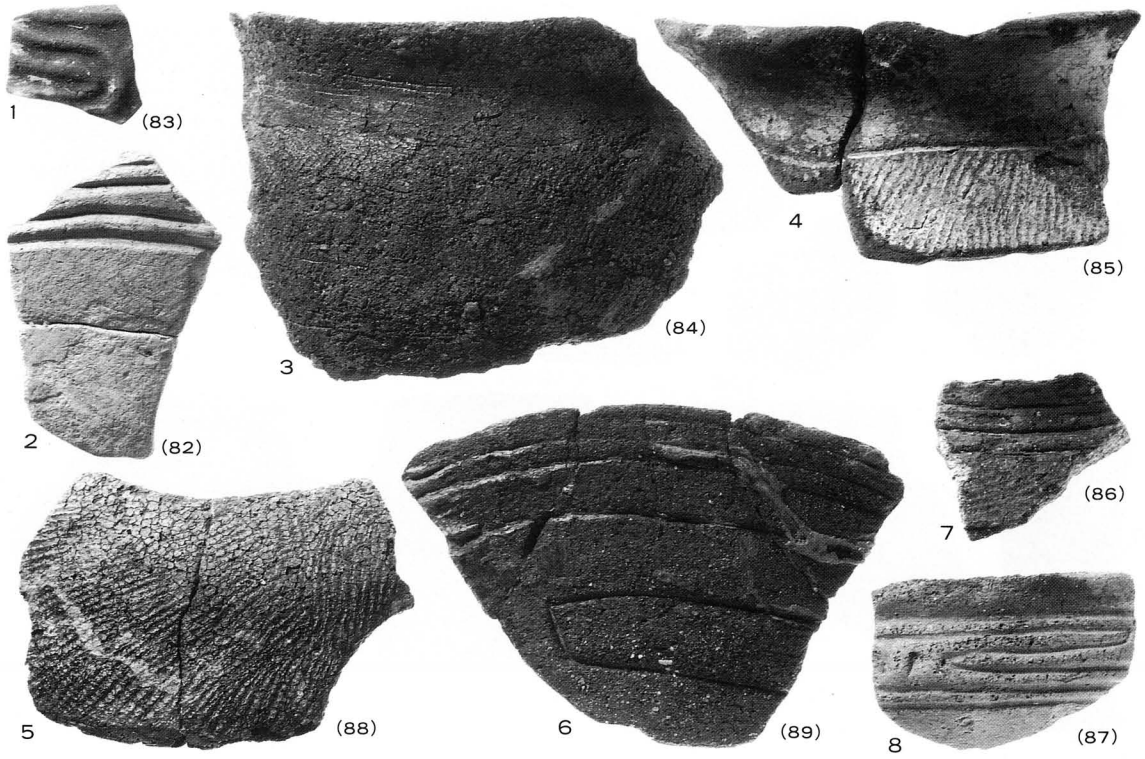
1・3・4　ピット187　2　ピット189　5　ピット190　6　ピット192
7　ピット196　8　ピット198　9　ピット200　10　ピット202



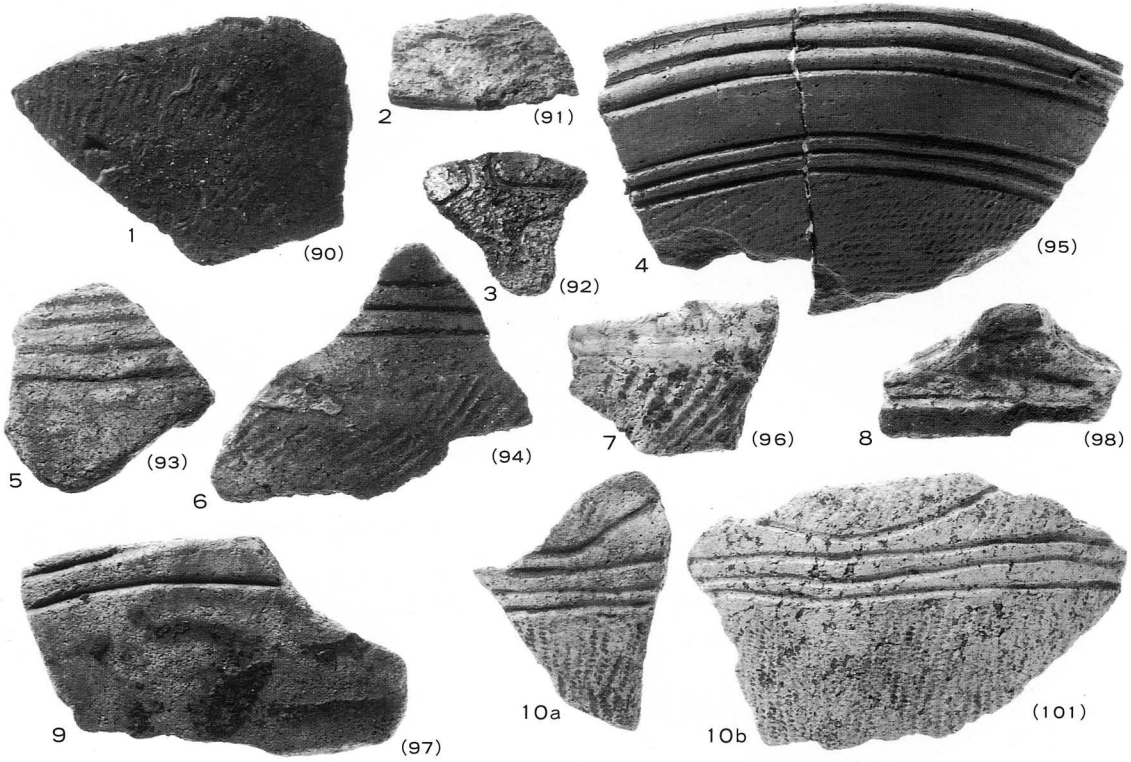
2　C、E、F、K区出土土器

1　ピット206　2　ピット204　3　ピット205　4　ピット216　5　ピット214
6　C区包含層　7・8　E区包含層　9　F・I区包含層　10～12　F区包含層

PL. 12　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

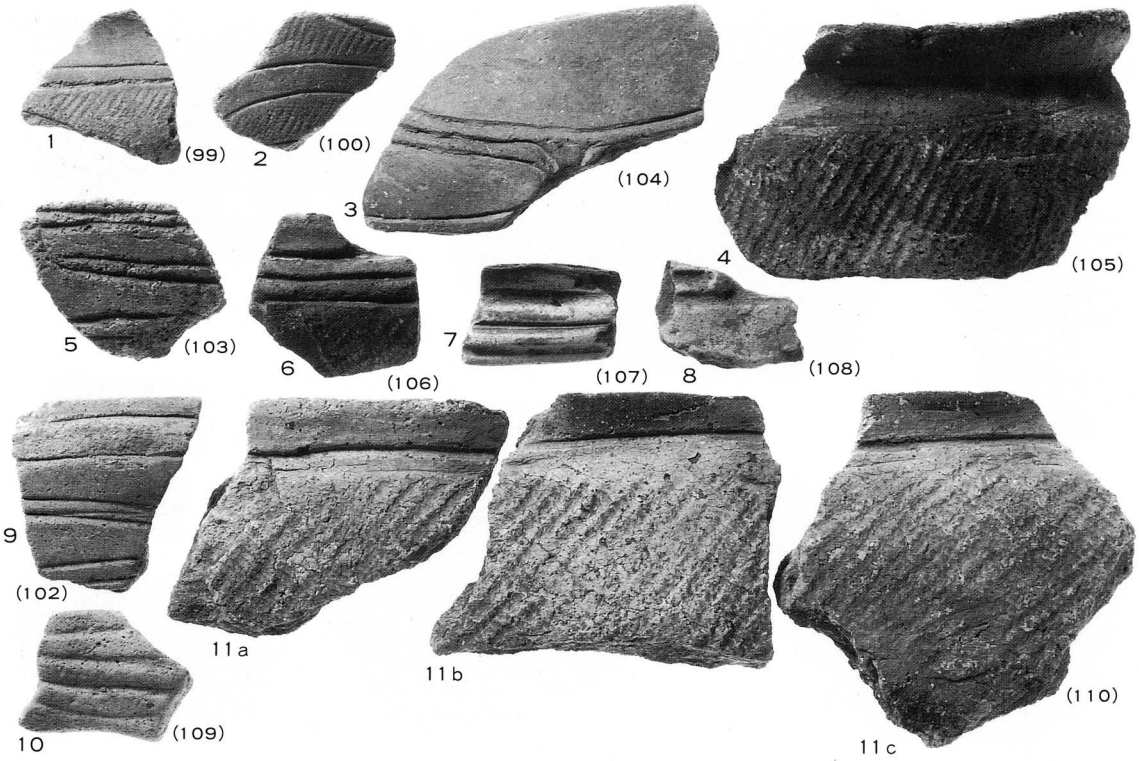


1　F、G、H、I区出土土器　　1・2　F区包含層　3・4　H区包含層　5・6　I区包含層　7・8　G区包含層

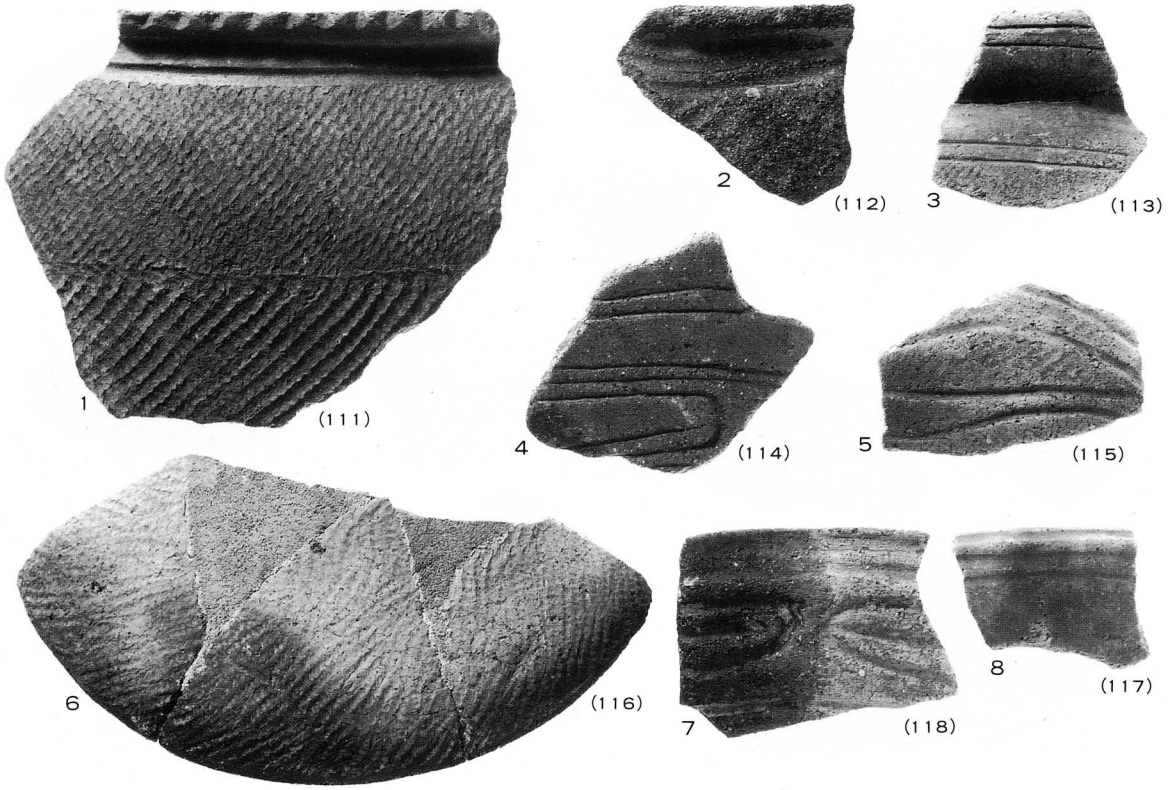


2　I、J、K区出土土器　　1～6　I区包含層　7～9　J区包含層　10　K区包含層確認面（7、8層の上部）

PL. 13　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

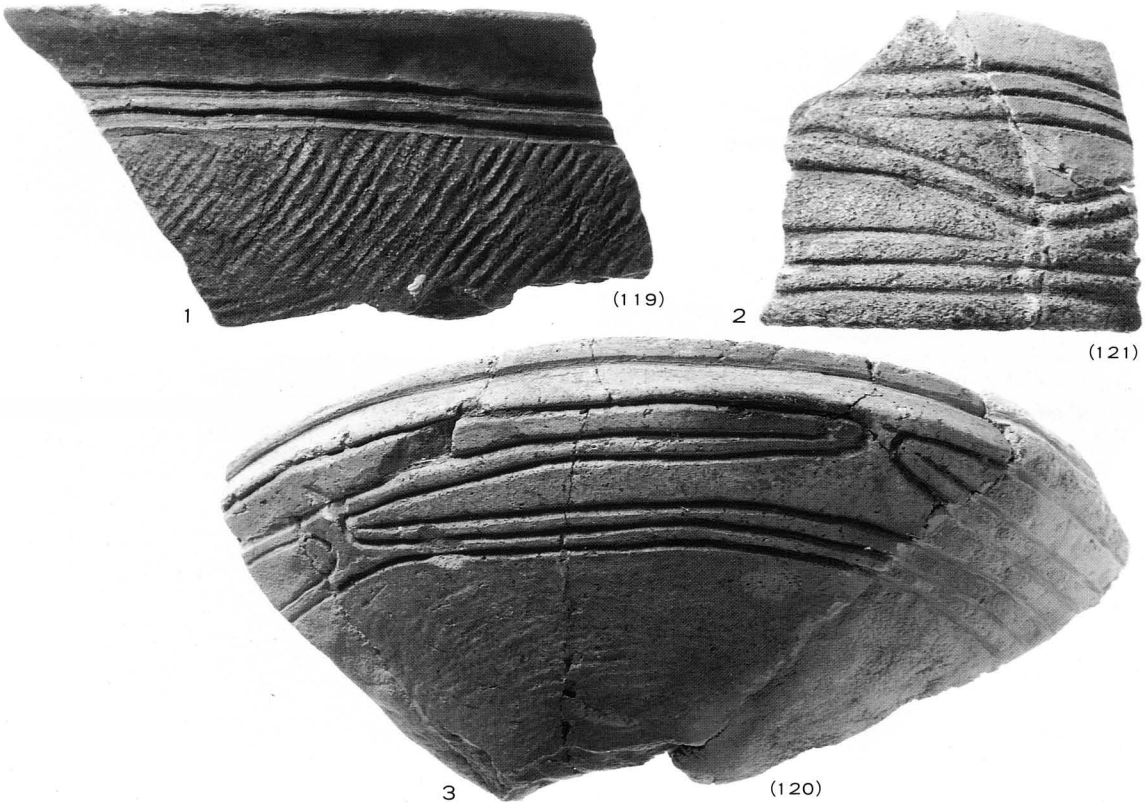


1　K区出土土器　　1～11　K区包含層確認面（7、8層の上部）

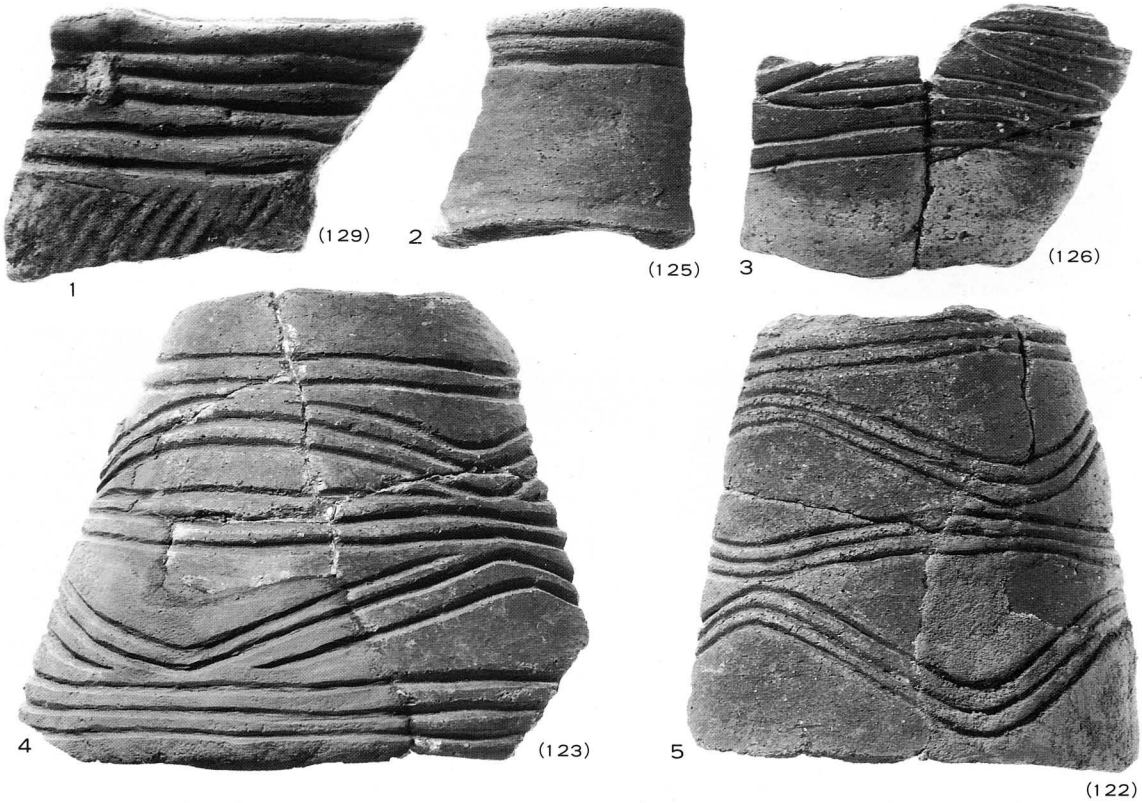


2　K区出土土器　　1・2　K区包含層確認面（7、8層の上部）　3～8　K区包含層（7、8層）

PL. 14　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

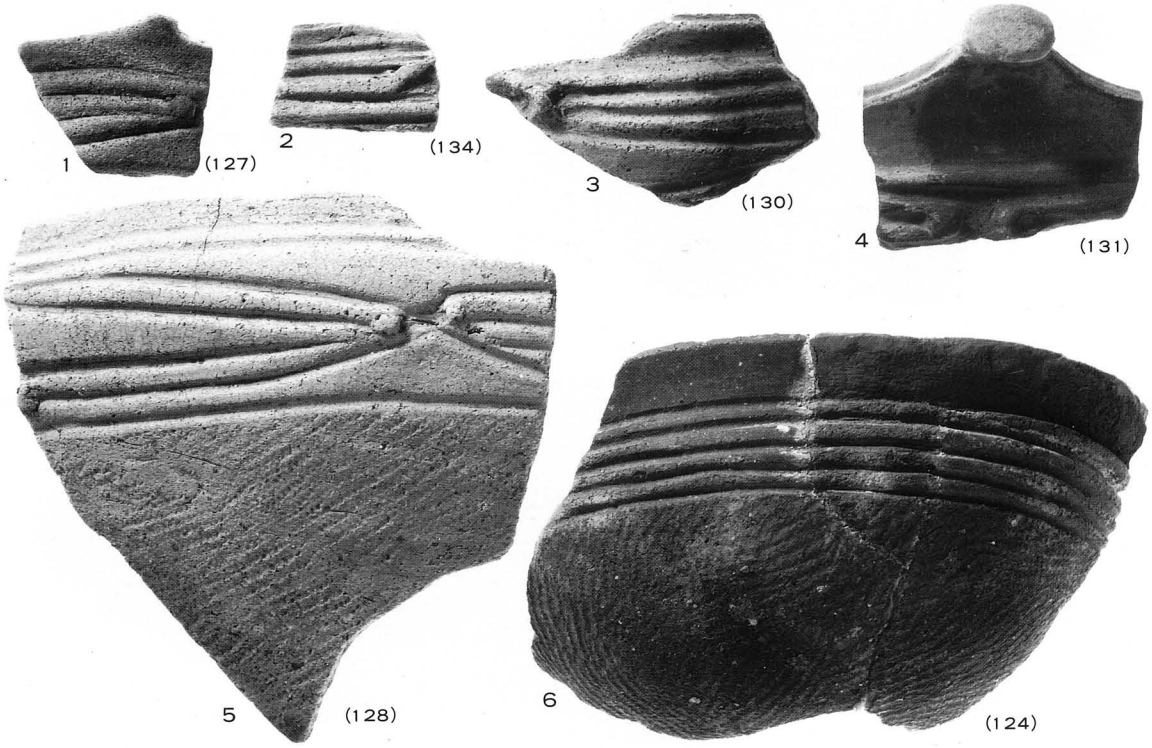


1　K区出土土器　　1～3　K区包含層（7、8層）

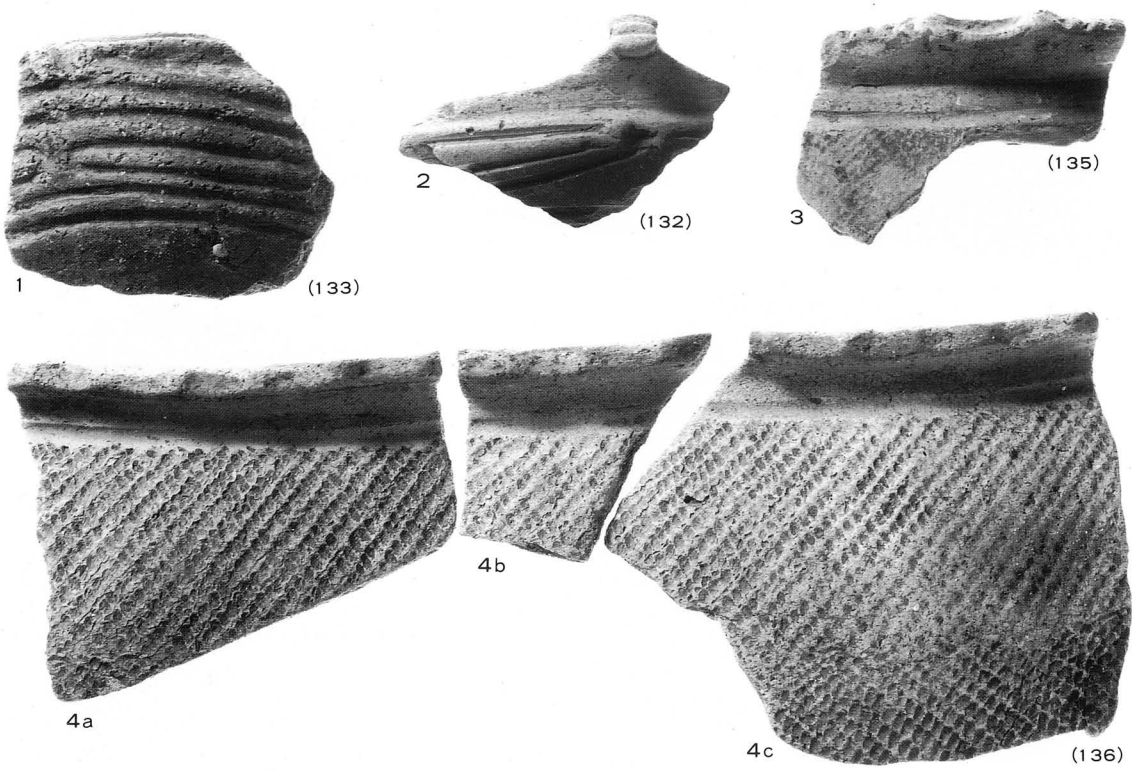


2　K区出土土器　　1～5　K区包含層（7、8層）

PL. 15　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

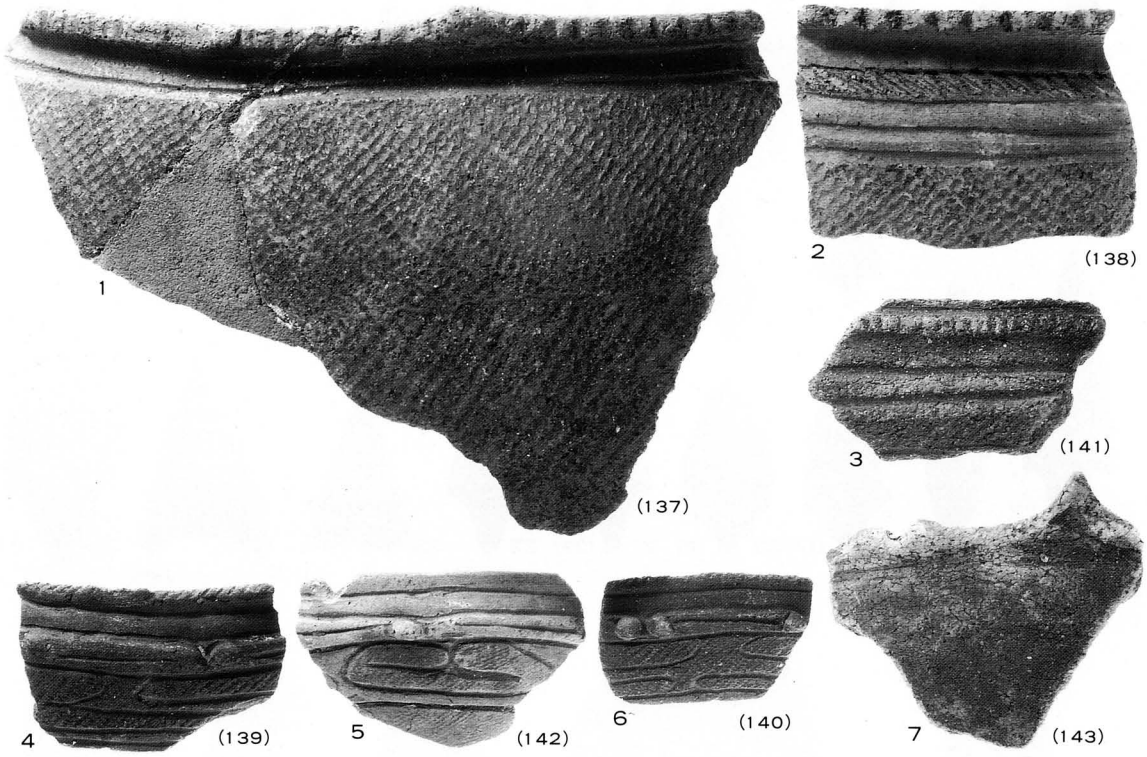


1　K区出土土器　　1～6　K区包含層（7、8層）

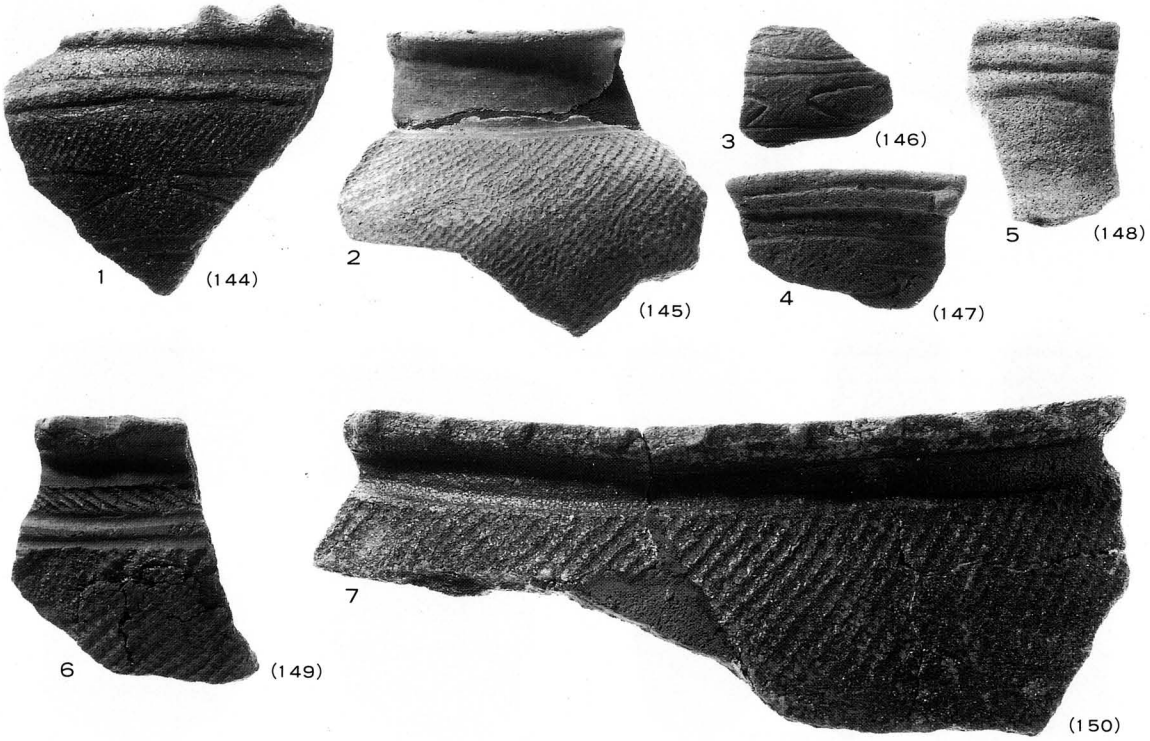


2　K区出土土器　　1～4　K区包含層（7、8層）

PL. 16　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

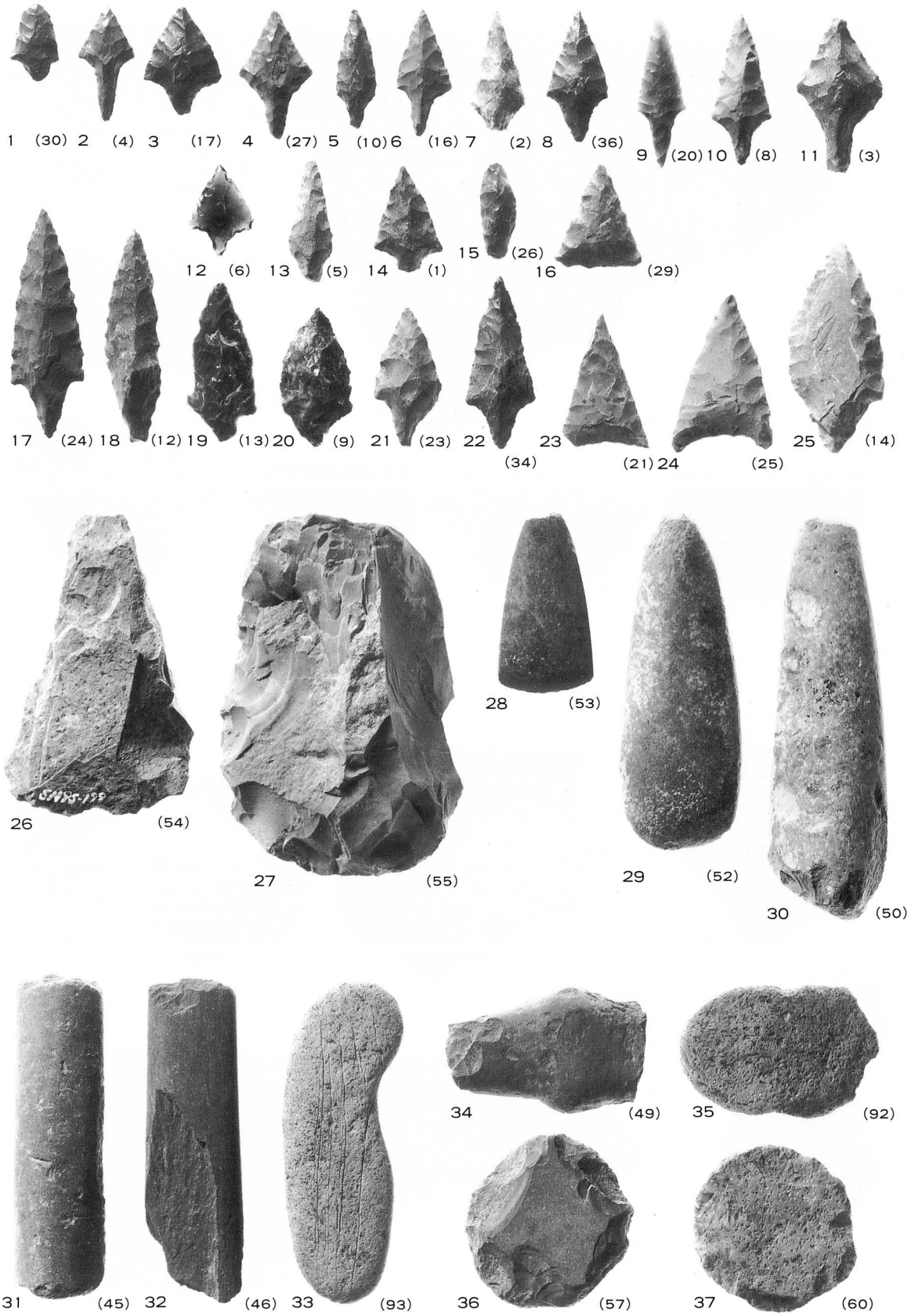


1　K区出土土器　　1～7　K区包含層（7、8層）



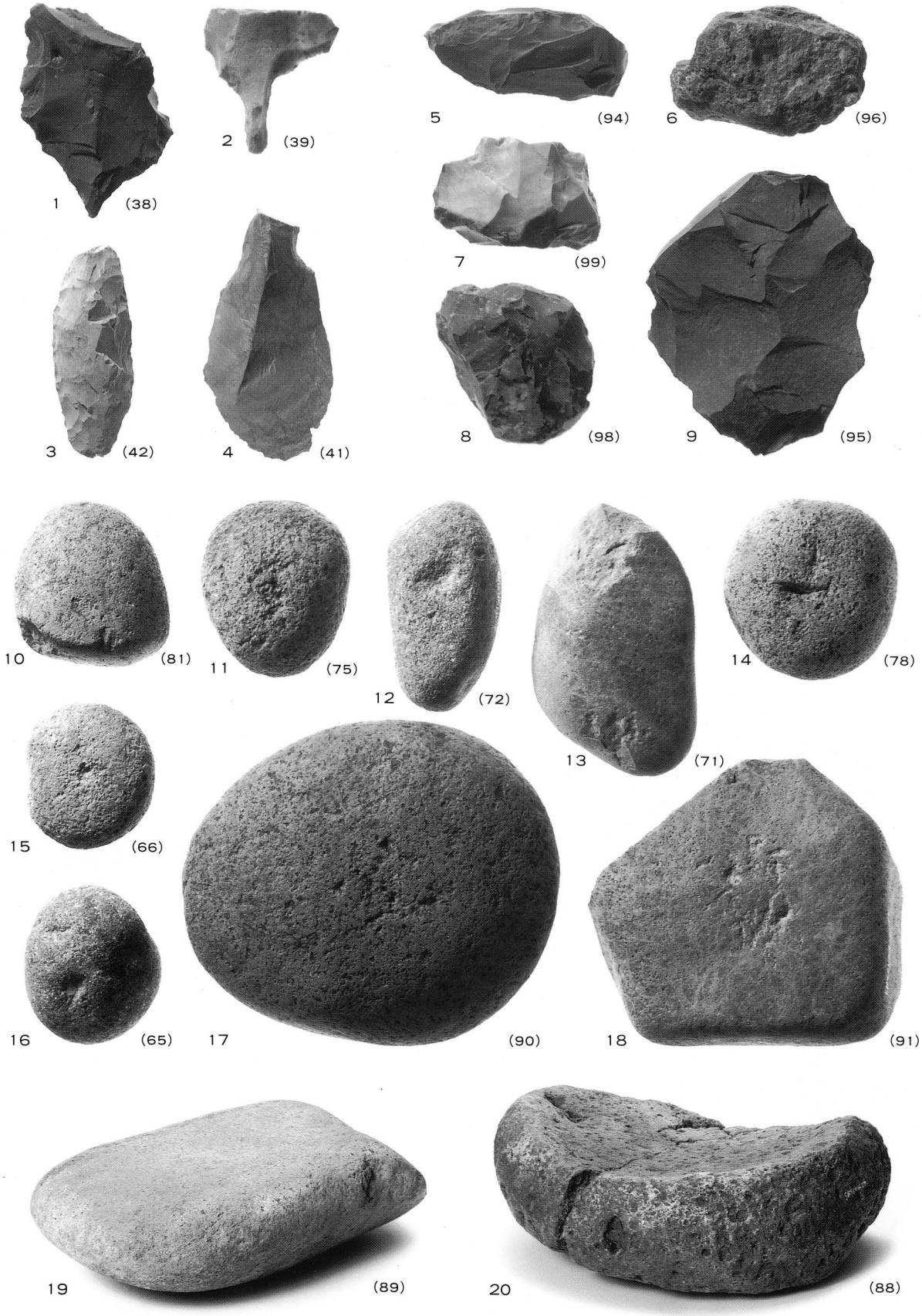
2　K区出土土器　　1～4　K区包含層（7、8層）　5～7　K区遺構検出面（8層下部から9層）

PL. 17　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



PL. 18 山王囲遺跡出土石器
Stone implement from the Sanno-gakoi site

1～25 石鏃 arrowhead 26•27 打製石斧 chipped stone axe
28～30 磨製石斧 grinding stone axe 31•32 石刀 sword-shaped stone
33 線刻礫 engraved pebble 34 独鈷石 artifact double-edged stone axe
35 石錘 stone weight 36•37 円盤状石製品 disc-shaped stone implement



PL. 19 山王囲遺跡出土石器
Stone implement from the Sanno-gakoi site

1・2 石錐 drill 3 楕円形両面加工石器 oval biface
4 石匙 tanged stone scraper 5～9 石核 core
10 磨石 grinding stone 11・12・14～18 凹石 cobbles with indention
13 敲石 hammerstone 19・20 石皿 grinding slab

国史跡 山王囲遺跡
発掘調査報告書Ⅰ

平成８年３月25日　印 刷
平成８年３月31日　発 行

発　行　宮城県一迫町教育委員会
栗原郡一迫町真坂字清水田河前５番地
ＴＥＬ　０２２８－５２－２１１１

印　刷　南部屋印刷株式会社
栗原郡築館町高田一丁目７－36
ＴＥＬ　０２２８－２２－２１３１